
悪の華

猫の手

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪の華

【Nコード】

N2420P

【作者名】

猫の手

【あらすじ】

※この小説は橙乃ままれ様の作品ログ・ホライズンの二次創作です。

作者様にまだ許可を貰っていないため、後から消す可能性があります。ますその事はご了承ください。

橙乃ままれ様とは解釈の違いが出てくるかもしれませんが、それは2次創作と言う事でご了承ください。

老舗オンラインゲームにエルダー・テイルと言うモノがある。

20年以上も続く息の長いタイトルであり世界中にこのゲームのファンが数多くいる事でも知られていた。

誰もが待ち望み楽しみにしていた十二番目の拡張パッケージ『ノウアスフィアの開墾』

これの適用時にプレイヤー達は人知を超えた災厄に巻き込まれる。大災厄と呼ばれる事件により、プレイヤー達は異世界に放り出されてしまったのだ。

ある者は悲嘆にくれ、ある者は立ち向かう事を選んだ。

悲嘆にくれた者達は立ち止り既存のスキルを悪用し他者を恐怖により支配する事を選んだ。

立ち向かう事を選んだ者達は既存のスキルを利用し他者に希望を与え共に歩む事を選んだ。

前に進む者と立ち止った者どちらがエルダー・テイルの勝者になるか……それは誰にも分らない。

01 狼殺し（前書き）

最初と最後で大分文章が違うので修正をかけました。
他のも修正をかける予定です。

01 狼殺し

数多あるMMOの中にエルダー・テイルと呼ばれるゲームがある。これは20年以上続く息の長いゲームで米アタルヴァ社によって運営されており、中世ヨーロッパ風の世界で冒険を行うという所謂『剣と魔法』の世界で遊ぶゲームだ。

所々に現代風のアレレンジが加えられているが概ねはそう考えて間違いは無いだろう。

エルダーテイルのマップは>ハーフガイア・プロジェクト<と呼ばれる計画に則り、現実の地球を半分の大きさで再現している。

ここまでならば普通のよく出来たゲームとして終わっていただろう。だが、12番目の拡張パッケージ>ノウアスフィアの開墾<適用時に起きた>大災厄<。

プレイヤー達は『剣と魔法』の世界に放り出され、多くの者が絶望に、恐怖に陥れられた。

目端の効く者の一部は大地族を虐げ自らの王国を作りだし、更に目端の効く者、冒険者達の良心を信じる者は他の冒険者達を正し、自らを律する国を作り上げた。

ここはエルダー・テイルのエッゾ帝国。

ススキノに集う邪悪な冒険者達により蹂躪される哀れな国。

大地族では不死の冒険者達に抗う事は出来ず、彼らに蹂躪され続けていた。

そんなエッゾ帝国の南西部、現実の日本では釧路と呼ばれる地域に小さな村があった。

その村は古くから薬草である芥子を育てている事で有名であり、エッゾ帝国中の医師達から買い付けられていた。

今までであればその良好な関係が続けられていたであろう……だが、

今は大災厄後の乱世、ススキノの冒険者達がソレに目をつけぬ筈が無い。薬草として用いられる芥子で阿片を作り、エッゾ帝国を、他の国を汚染せんと邪悪な欲望にきらぎらと目を輝かせて開始していた。



その童女は月を眺めていた。

ふさふさとした尻尾を揺らしながら湖の水面に映る月を静かに見上げる姿は絵画のような幻想的な光景だった。

赤い液体が満ちる杯を口元に寄せ、それをゆっくりと嚥下する。その味が気に入ったのだろう。頬を弛め、尻尾と共に狐のような耳も揺れ動いていた。月と湖の水面を眺めながら、童女は満足気に呟く。

「流石は竜種よ。飛竜の血がここまで旨いとはの……次は他の竜種で試してみるか。」

エルダー・テイルのプレイヤーキャラクターは、12種類のメインクラスと数多のサブクラスの組み合わせによって構成される。メインクラスとは、例えばRPGなどと言うところの戦士や僧侶といった職業に相当する。そして、サブクラスとは基本的に冒険者の色付け……個性を表す為に使われる。例えば〈騎士〉や〈貴族〉といったロールプレイをする為に使われたり、〈鍛冶屋〉や〈裁縫師〉といった冒険者が装備する武具防具を作成するためのモノがある。どれを取るかは各自の好みであり自由に選んで良いのだ。多少の有利不利は発生するが建前上、誤差の範囲内と言われている。

何故建前上なのかというと過去に例外的なモノが存在したためだ。

そのサブクラスの名前を「吸血鬼」と言う。欧州のとある下請け会社が作ったサブクラスなのだがそのあまりの強さに米アタルヴァ社が次のパッチで回復呪文を受けうと火傷をするという変更を行わざるを得なかったと言う凶悪なサブクラスである。この変更により、味方の回復職が「吸血鬼」のキャラクターを回復呪文で止めを刺すと言う事件が多発したため、サブクラスに選ぶ人間は激減した。今では見かけることすら珍しいサブクラスとなってしまっていた。

この月を眺めている童女の名をソルシエルと言う。赤い瞳に鋭くとがった犬歯が童女のサブクラスが吸血鬼であることを告げる。冒険者であれば見た目通りの年齢ではあるまい、この童女は余程の変わり種か、へそ曲りか、昔であれば傾奇者と言われるたぐいの人種なのであろう。赤い瞳を細めて杯に注がれた血液を静かに飲む姿は異形の美を感じさせた。

突如森の奥から雄叫びが聞こえてきた。それは追い詰められた者達が窮地を打破せんと足掻く悲鳴であり、絶望に打ち勝つためのウオークライだ。その声に応えるように鳥は空を飛び回り、獣たちは咆哮を上げる。夜気が震え森がざわめき始めた。先程までの静謐さは失われ、昼間のような活気が闇夜に蘇る。

童女は血の入った杯を地面へと打ち捨てて。興はそがれた。これ以上、月見を行っても不快なだけだろう。ならば……背負い袋の中から空飛ぶ箒を取り出し、一気に月夜を駆けあがる。雄叫びの正体を探るべきだと考えた。これが詰らぬ理由であれば雄叫びの主を殺せば良い。凍りつくような笑みを浮かべた童女は月夜を駆ける鳥となった。

その姿は正に御伽噺に出てくる魔女。それに目を付けられたのは幸運かそれとも不運であろうか。呪われし存在とも導き手とも伝えられる魔女が雄叫びの主の元へと駆けて行った。



醜悪な顔を更に歪め男は意味を持たぬ怒声をまき散らしながら走っていた。どす黒く染まったその表情は悪鬼すら裸足で逃げだすような邪悪さをまき散らしていた。気の弱い人間ならばその表情を見ただけで失神してしまうかもしれない。月明かりに照らされた森の獣道、その男は2人の少年少女を追いまわしていた。否、その男が用があるのは少女だけだ。少年はおまけにしか過ぎない。

悪鬼のような形相を浮かべ少女を付け狙うその男をブラッドと言う。エルダー・テイルの『ヨハネスブルグ』と謳われるススキノの中でも最悪の部類に属されるギルド銀牢寿のメンバーだ。また、ブラッド自身もその性癖から大地族や低レベルの冒険者、特に女性に恐れられていた。

ブラッドは女性に対しその狂った劣情を満たす為、好き勝手に乱暴狼藉を働くことで知られていた。そして、レベル90の〈盗剣士〉であるブラッドに勝てる大地族や低レベルの冒険者は存在しない。そのため、ブラッドの行いは日に日に過激に悪逆になっている。もし、彼に少女が捕まれば心が壊れるまで弄ばれた挙句、身体まで切り刻まれるだろう。その上でゴミのように捨てられる。それがブラッドがススキノで作り上げた地獄だ。それを少女は十二分に承知しているのだろう。決死の覚悟で逃げていた。シーサーペントの鱗で作られたスケイルメイルが月の光で薄らとした輝きを帯びる。その輝きと相まってブラッドは少女を飲み込む巨大な蛇のように見えた。そして、諦めの悪い少女に対して苛立ち、叫びを叩きつける。

「チエエエエルシイイイイ、ご主人様から逃げるんじゃないええええええー!!」

狂乱した獣のような表情で叫びながらチエルシーと呼んだ少女を追う。なるほど、月明かりに照らし出された彼女は美しい。艶やか

な黒髪に雪のように白い肌、黒い瞳は自分の運命に憂いていた。その憂いはブラッドにとって最高のスパイスである。何故ならば、ブラッドは悲鳴を上げる女性を力づくでモノにし征服することに最も喜びを感じる外道だからだ。そして、チェルシーが少女から大人の女性へ変わる年齢だと言う事もブラッドにとっては喜ばしい。その時期の少女が最もブラッドの好み合うからだ。だからこそ、ブラッドはチェルシーを追いつめる。それは極上の料理を追いつめるように極上の女をブラッドは欲しているのだ。

チェルシーは自分の手を引っ張って走る少年を不安げに見上げ名前を呼ぶ。

「ライ……」

「大丈夫だ。村の近くまで逃げればアイツは尻尾を巻いて逃げる」

ライと呼ばれた少年は不安げなチェルシーを励ますための言葉をかける。ライはレベル20の〈守護戦士〉でチェルシーも同レベルの〈施療神官〉にしか過ぎない。ブラッドに追いつかれたら最後抵抗すら出来ないだろう。恐怖を押し殺し必死になってひたすら走る。

実際のところブラッドは腕の悪い冒険者である。なので、自分より圧倒的にレベルの低い相手にしか勝利することが出来ない。普段であれば、高レベルの冒険者と一緒に出掛けるためこのような事態は発生しない。しかし、今日は間の悪いことにたまたま2人で出かけているところに襲撃を受けた。相手のミスに助けられ、幸運にも相手の隙について逃げ出す事が出来た。だが、その幸運はそうそうあるものではないということもライは理解していた。故に必死になって走る。2人が生き延びるための方法は自分達が所属するギルドが本拠地を置いている村に辿り着くこと以外ないのだから……

一方、ブラッドはこのままでは獲物である2人を取り逃がすかもしれないと考え始めていた。レベル20程度の冒険者の癖に逃げ足だけは早い2人に苛立ちを覚えつつ、このままでは不味いと内心焦

りを覚え始めた。村には腕の立つ冒険者が複数いるからだ。村に逃げ込まれば手出しをすることができなくなる。わざわざスキノから数日かけてやってきたのだ手ぶらで帰るのは勘弁願いたかった。ブラッドは、目の前にある極上の料理を手に入れる方法を必死になって考え始めた。自分の武器や特技、持っているアイテムを脳裏に浮かべながら最適の方法を考える。ブラッドの持つ武器は一对のブロードソードだ。逃げている相手に攻撃するには特技を使用したとしても少しばかり長さが足りない。故に背負い袋に手を突っ込み手持ちのアイテムを片っ端から検索してゆく。便利なことに背負い袋は腕を突っ込みさえすれば何が入っているのかがりかいできる仕組になっていた。ブラッドは走りながら背負い袋をあさる。しばらくするとブラッドは粘着くような笑みを浮かべた。

足を止めず走ったままの状態で背負い袋からアイテムを取り出す。取り出したアイテムはボーラと呼ばれる狩猟用の投擲武器だった。エルダー・テイルでは投擲武器のような消耗品扱いされているアイテムだ。投擲することによって対象を落馬させる、もしくは5秒間程度足止めをすることができる。そう高く無いアイテムであり、使い勝手も良いため大抵の冒険者達が持ち歩いていた。ブラッドは足を止め、頭上で風切り音を立てながらボーラを振り回す。振り回されることで加速していき十分勢いがついたところで力いっぱい投擲する。

今宵のブラッドはとことん幸運の女神に見放されているらしい。投げつけたボーラは錘の部分がライの背中にぶつかり道の外にある坂へと突き飛ばしてしまった。当然であるが、手を握っていたチェルシーも一緒に坂を転がり落ちていった。

折角のグッドアイデアを無駄にされたブラッドは面白くない。苛立ちをぶつけるかのように坂を転がり落ちる二人に罵声を浴びせた。

「糞がああああ！！！！勝手に落ちてんじゃねえよおおおおお
おおおお！！！！」

裏目裏目に出るこの状況に呪いの言葉を吐きながら、ブラッドは2人の落ちた場所へと向かった。急な坂ではあるが降りれない事も無い程度だ。ブラッドは舌打ちをしながら坂を下りはじめた。今日は厄日だと舌打ちをする。

だが、ブラッドはライ達の幸運、自身の不運もこれまでだと考えた。何故ならば、攻撃用の武器では無いにせよレベル90の自分が投げたアイテムがまともにあたったのだ。死にはすまいが無事ではあるまい。例え、チェルシーが回復呪文を使ったとしてもしばらくの間足止めをされる。そうなればこちらのものである。今までの鬱憤をぶつけてやればいい。どうやってチェルシーを凌辱しようか。ブラッドは皮算用をしながら軽快に坂を下っていった。



ライは背後から受けた強い衝撃により意識が朦朧とした。朦朧としながらも自分が掴んでいる手を離さないように手繰り寄せ庇うように抱きしめる。チェルシーを護らなければならない。朦朧とした意識の中でもその事は鮮明だった。坂を転がりながら落ちていったため、あちこちに身体をぶつける。ギルドマスターの鑄造した鎧でなければボーラがぶつけられた時点でアウトだっただろう。坂を転がり落ちるの衝撃だって耐えきれなかったかもしれない。彼の安全を祈願し出来る限りの工夫を凝らした鎧は坂の終わりまでライと抱きかかえたチェルシーを護り続けた。

やがて、坂が終わり転がり続けたライも止まる。転がり落ちた先は湖の畔だった。ライはダメージで意識をもうろうとさせながらも気力を振り絞り立ち上がる。意識は既にとぎれとぎれであった。それでもライは立ち上がる。それが男の在り方だとそう教わったから

だ。

少し遅れてチェルシーも意識を取り戻し立ち上がった。彼女はそうダメージを受けていないようで現状を把握することができるようだった。ライの方に視線を向けるとその傷の酷さに驚愕し、大慌てで回復呪文を準備する。

「……っう、あ、いつは」

「居ません。直に回復呪文を使いますから、無理をしないで……」

チェルシーの回復呪文により怪我と共にライの朦朧とした意識が覚醒する。見たことも無い湖の畔に自分達がいることに驚く。泥まみれになったチェルシーの姿と自分の姿に気がつき何があったのかチェルシーに尋ねた。

「……一体何が起きたんだ？」

「恐らくですが、ブラッドの攻撃で突き飛ばされ、先程まで走っていた道の外側の坂道を転がり落ちたのではないかと思います。」

「そっか、なら……」

逃げないと続けようとした瞬間、少し離れた場所から木の葉が擦れ合う音が響いてきた。この距離では逃げられぬと、ライは悲壮な覚悟を決めロングソードとバックラーを構え、自分達が落ちてきた坂へ意識を集中する。自分が時間を稼いでいる間にチェルシーを逃がせば良い。ライは腹を括った。

油断無く坂を見ながら後ろにいるチェルシーに声をかける。

「俺がここで足止めをする。だから、急いで村に戻ってナガトさん達を呼んできてくれ。」

「嫌です。私も戦います。……それに逃げる場所ありませんよ。」

逃げる場所の無いと言うチェルシーの返答に愕然とし後ろを振り返った。湖から流れる川が逃げ道を塞いでいた。それを確認したライに絶望感が襲いかかった。レベル20の自分達では時間稼ぎもできないことは明白だった。もし、チェルシーがブラッドに捕まれば、そのおぞましい想像だけで無念と恐怖がこみ上げてくる。

〈大災厄〉によってエルダー・テイルは弱肉強食の世界へと変わってしまった。もっとも、他の地域では違う可能性もあるが、少なくともエッゾ帝国ではそれが真理である。力の大地族やレベルの低い冒険者は高レベルの冒険者に屈服するしかない。だが、諦めるわけにはいかない。帰還の呪文が使えない現状では逃げ出す手段が無い。ライ一人ならばその手で逃げることは可能だ。だが、チェルシーは逃げる事が出来ない。

故にライは億に一つの可能性を求め戦うことを選ぶ。無論、勝利することが目的では無い。逃げだす隙を作りだす事が目的だ。敵はレベル90の〈盗剣士〉相手では逃げる機会を作ることすら那由他の果てなのかもしれない。それでも自分達が生き延びるにはそれを掴み取らねばならないのだ。

やがて、木の葉が揺れる音が止まり、ゆったりとした動作でブラッドが2人の前に姿を現した。圧倒的なレベル差故の余裕だろう。ブラッドはチェルシーばかりに視線を向け涎を垂らさんばかりの表情で笑い、剣の刃を舌で舐める。そして、いやらしい目つきでチェルシーを舐め回すように見ながら粘つくような笑みを浮かべる。そんなブラッドの行動にチェルシーは吐き気を催すほどの怖気を感じた。ライを無視しチェルシーへ言葉をかける。

「ひゃっはっはっは、よろこべええチェルシイイイ、ご主人様のブラッド様のご到着だぜええ？」

「私は貴方なんかのモノではありません!!」

「クッククク、最初は誰でもそう言うもんさ。だがなあ、たつぷりと俺の愛を注ぎ込めばよ。皆、股を開いて欲しがるのさ。お前にゃ

あ苦勞させられたからなあ……たあつぷりと可愛がつてやるよ。」

ブラッドの目は欲望で血走り、チェルシーの肢体を何度も何度も視線で凌辱する。そのブラッドの行動にチェルシーは本能的に恐怖を覚え自分の身体を抱きしめた。

ススキノにいた者の間では有名な話なのだが、ブラッドの手によって数多の大地族の女性が壊されてきた。それは心であつたり、その狂った性癖を満たす為にズタズタに引き裂かれた肉体だつたりする。チェルシーは実際に見た無残な亡骸を思い出し怯え始めた。

ライはそんなチェルシーを庇うためにブラッドの前に立ちはだかる。幾ら冒険者が死なないとはいえ圧倒的な敵と戦うことは恐怖を覚える。そして死なないとはいえ、殺されることは間違いなく。それは人によつては強い精神的なダメージを被るのだ。それでもライは立ちはだかった。なぜなら、ライは強い怒りとチェルシーを護らなければならぬと言ふ使命感に突き動かされたからだ。そして、叩きつけるようにブラッドに対して啖呵を切る。

「黙れ！！下種。てめえなんかにチェルシーはわたさねえよ！！ナガトさんにビビッてコタンに近寄る事も出来なかつた臆病者が寄るんじゃねえ！！」

ブラッドはライの言葉が理解できないと言ふ表情を浮かべた。何故ならば、ブラッドにとつて弱者とは強者に媚びへつらう存在であり逆らうことなど天と地がひっくり返つても有りえないからだ。その驕った考え方がブラッドの思考に空白を生む。

それがライにダイヤモンドよりも貴重な時間と機会を与えた。盾を前に剣を後ろに気がつけば〈守護戦士〉のクラスが持つ基本的な構えを取っていた。ライは心の中で言い聞かせるように言葉を紡いだ。

『恐れるな！恐れる暇があれば剣を取り戦え！一分一秒でも長く！』

！チエルシーが逃げる時間を稼ぐために！！その一瞬の隙を作り出す為に！！』

ゆっくりと敵に気がつかれぬように息を大きく吸い込む。腹式呼吸で溜めこんだ空気を裂帛の気合と共に吐きだし雄叫びをあげた。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお————ッ！！」

決死の覚悟とここでは意地でも引かぬと言う強い意志がこもった雄叫びは大気を揺らし、枝を揺らし、木を揺らし、そしてついには森を揺らした。物理的な圧力すら籠った雄叫びはブラッドの鼓膜を揺らし、肌を強く叩き、心を打ち据える。

剣の達人の中にはこの声だけで相手を昏倒させる程の雄叫びをあげる事ができる者がいたらしい。ライはその域にこそ届いていないが、並はずれた声量はブラッドの恐怖心呼び起こした。そして、その恐怖心がライに対して気を抜けば手痛いダメージを与えると告げていた。

これこそが〈アンカー・ハウル〉。

〈守護戦士〉を象徴する特技であり、背後にいる誰かを護るための力だ。そして、それは自陣の仲間達に勇気を与える。ライの雄たけびはチエルシーの恐怖心を打ち砕き、毅然と立ち向かう力を与えた。確かにブラッドと自分達の間には絶望的なレベル差がある。だが、それがどうしたと言うのだ。ライが共に闘うのであれば、それすら超えてみせよう。チエルシーはスタッフを握りしめ、ブラッドに向ける。震えながらも自分の運命に抗う気高き少女がそこにはいた。

ブラッドはその2人に気圧され一歩後退した。そして、それに気がついたブラッドは屈辱のあまり顔を真っ赤にする。相手は高々レベル20の冒険者だ。レベル20、レベル20、そうレベル20なのだ。レベル90の冒険者であるブラッドに逆らっていい存在では無い。それは決して許されることではない。弱者は強者に媚びへつ

らうこと以外してはならないのだ。

激怒したブラッドは相手をただ殺すだけでは済まさないと考えた。徹底的に地獄を見せて絶望を与えてやらなければ気が済まなかった。このエッゾ帝国の主人が誰なのか賤けの悪い雑魚に教育してやらねばならない。そうブラッドは誓う。そして怒りを言葉と共に吐き出した。

「糞餓鬼がああああ！！てめえを芋虫みてえにした後、たっぷりとチエルシーが女になる様を見学させてやらあ！！てめえが俺に逆らう気を起さなくなるまでたあああっぷり時間を掛けて犯してやらあ！！」

欲望でどす黒く染まった顔を怒りで赤く染め、一対のブロードソードを抜き放つ。小生意気な小僧に絶望を味あわせ、小娘に地獄を見せるためにまずは、動けぬよう手足を引裂き、次に縄で縛める。そして、目の前でチエルシーが凌辱されてブラッドに従順になる様を見せてやろうと考えた。むろん、短期間でそういうことをする技術はブラッドには無い。だが、自分達が流通させ始めたアヘンを利用すればそれに近いことは可能であると考えた。クスリを使って意識を飛ばせばあっさりと言う事を聞くようになる。――：チエルシーにライを犯させれば奴らはどんな表情を浮かべるだろうか。そんな下種な考えを巡らせながら、ブラッドは一気に間合いを詰めた。

肉を引裂く音……

骨を砕く音……

飛び散る鮮血……

それらがライを真っ赤に染め上げた。

ただし、それは返り血だ。

月より降り注いだ氷の槍に貫かれ地面に縫い付けられたブラッドから流れ出たものだ。理解できない事態と激痛にブラッドは悲鳴を上げる。氷の槍を砕こうにもブロードソードを落としてしまったブラッドにはどうする事も出来ない。ただ、採集されたピンで貫かれた虫のように氷の槍に縫い付けられたブラッドは泣き喚く。

ライ達が空を見上げると、月を背に童女が空飛ぶ箒に乗って空を飛んでいた。童女の赤い瞳が氷の槍で縫い付けられたブラッドを冷たく見下ろしていた。ことの急展開について行けず、ライ達は茫然とした様子でそれを見つめていた。泣き喚くブラッドに対し、童女は冷たく切って捨てる。

「あああああああああああッ……そ、いてええよ。何だこりゃあああああああ！！！」

「……下郎が」

地面に縫い付けられたブラッドは振り向くことさえ許されない。ただ、我が身に起きた不遇に泣きわめくことしかできなかった。あと一步、あと一步でチェルシーが手に入るところであつたのにと、無情な現実にはブラッドは罵り声を上げる。

そんなブラッドの手前勝手な論理など童女には興味が無いのだろう。外道が初心者と思わしき少年少女を襲った。それだけで殺害するには十分な理由である。童女は愛らしい小さな唇を開き呪文を詠唱する。プラズマによって作られた複数の球体が童女の周囲に現れた。それらは火花を散らしながら耳障りなノイズを発生させる。童女の命によりゆっくりと集い、形を変え、巨大な鉄槌のような形状へと変化する。

ブラッドは自分の身に迫る危機を敏感に察して逃げようとするが、串刺しにした氷の槍がそれを許さない。彼に出来ることはただひた

すら耐えること。いつの間にかブラッドは狩る側から狩られる側に回っていたことに気がついた。それが受け入れられないのだろう。ブラッドは支離滅裂な罵声を上げて全てを罵り始めた。しかし、童女はそれをそよ風のようにしか感じていないらしい。ブラッドの行動を鼻で笑うと、赤い瞳が見開かれトリガーワードが発せられた。

「雷神の槌よ。」

童女の周りに集まっていたプラズマの槌が雷へと変化し轟音を立ててブラッドに降り注いだ。自然界の雷すら超えるその雷撃はブラッドに悲鳴を上げる暇すら与えず、燃やしつくし影すら残さなかった。塵となり消えゆくブラッドを注意深く観察しながら消滅したことを確認すると、騎乗していた空飛ぶ箒の高度をゆっくりと下げ始めた。



ブラッドが焼き尽くされる光景をライとチェルシーは茫然とした様子で見っていた。突如、現れた天の助けにどう対応して良いのか理解できなかった。ブラッドをあっさりと屠った技量からいっても自分達が刃を向けた所で抵抗すらできずに死ぬだろう。故にライとチェルシーは茫然と童女を見上げることしかできなかった。

降り注ぐ月の光が童女の金色の髪を流れ雫のような光が零れ落ちる。紅の瞳は月の光の加減のせいか黄金色に染まっていた。人外的美とでも言うべき幻想的な光景をライとチェルシーは魅入られたように見上げていた。やがて童女は2人の前まで空飛ぶ箒の高度を下げる。赤い瞳で2人を見つめながら、愛らしい小さな唇を開いた。

「こんばんわ、幼き冒険者よ。このような夜更けにそなたらが外出歩くのは感心せぬな。」

「え？ああ、あ、た、助かりました。」

「……助けて頂きありがとうございます。」

「なに、気にする必要はないぞ。初心者を助けるのもベテランの役目じゃ。」

童女に敵意が無いことを確認したライは剣を地面に突き刺してへたり込んだ。チェルシーは半ば茫然としながらも行き届いた躰けによって礼を失さぬように感謝の意を述べた。命の危機が去ったことを実感した2人は緊張の糸が切れてしまったらしい。ライに至っては礼すら述べる余裕が無かった。

そんな2人の様子を童女は微笑ましげに見ながら、相手を試すかのように提案をした。

「ふふふっ、そなたらは愛いの。斯様な襲撃を受けるのも無理からぬ話じゃ。……どれ妾が安全圏まで送ってやろう。」

「……オレ達は近くの村に住んでるから、そこまで頼みます。」

童女の申し出に対してライは少し悩み、お願いすることにした。ここに至って疑っても仕方ないし、ブラッドの所属ギルド銀牢寿に女性はいないはずだ。また、折角ブラッドから逃げのびる事が出来たのに他の何かの手によって殺されては洒落にならない。それに、作戦とはいえギルドメンバーを殺すような真似をするところも無いだろう。故に銀牢寿の関係者と疑う必要も無いと考えた。まあ、何より目の前の童女は逆立ちをしても勝てる相手ではないので疑ってもしようがないと言うのが一番の理由なのだが……

そんな、ライの返答に童女は獣耳をピンっと立てて満足げな表情を浮かべる。

「うむ、良い判断じゃ。坊や……そういえば、自己紹介がまだじゃったの。妾はソルシエール、〈妖術師〉じゃよ。」

「ライだ。……坊やなんかじゃない。」

「ソルシエール様、私はチェルシーと申します。」

坊やと呼ばれたライは懺然とした表情を浮かべ、童女に対して苦情を言う。チェルシーはと言うと礼法に適った典雅な礼を返した。そんな2人の様子が面白いのか尻尾を振りながら童女はからかう様な笑みを浮かべる。面白い玩具を見つけたとでも言わんばかりの表情だ。

そんな童女の態度に嫌な予感を覚えながら、ふぬけていたライは少しかだけ普段の調子を取り戻した。そして、今まで忘れていたことを思い出した。今の今までライはギルドに連絡を入れていなかったのだ。脂汗を垂らしながらどうしようとおろおろしはじめ、その瞬間だけ童女の事を忘れ、チェルシーに相談する。

「しまった……不味い、不味い……どうしよ、セリアさんに連絡入れて無かった!!」

「……心配されているでしょうね。」

ようやく命の危機から解放されてその喜びからか、セリアへの連絡をすっかりと忘れてしまっていたのだ。チェルシーは慙愧の念に堪えぬと言う表情を浮かべ、ライは少しだけ怯え始めた。そんな2人の様子が童女は苦笑する。正直い話せば悪いようにはならないと安心させるように言い、その言葉がライ達をほっとさせた。

セリアとはライ達が所属するギルド、カラカンチのギルドマスターである。レベル90に到達した人間の召喚術師であるが特殊なクエストをあまりこなしていないため、強力な召喚獣を使用する事が出来ない召喚術師だ。むしろ、サブクラスである〈鍛冶屋〉の方を極めており、こちらのクエストはほぼ全てこなしているらしい。面

倒見の良い女性であり、〈大災厄〉直後にも拘らず、見ず知らずのライ達を保護するためにギルドを作った人物だ。そのことにライとチェルシーは強い恩義を感じていた。

故に心配をかけて申し訳ないという気持ちと怒られるだろうなと言ふ怯えにビクつきながら、ライはセリアへ念話による連絡を行った。

『ライ？――…何処にいったのよ！！いえ、今どこにいるの？』

『セリアさん、本当にごめんなさい。グレゴールが少し前話していた湖の方へ行っていたんだ。そしたらそこで銀牢寿のブラッドとはち合わせて……今までずっと逃げ続けていたんだ』

『そう……無事でなのね？』

『うん、助けて貰ったから』

『そうなの……本当に良かったわあ……』

ブラッドと言う名前を聞いてセリア荷最悪の可能性を想像させたが、助けて貰って無事だと言う言葉に安堵を覚えた。少しでもくぐもった声にライは強い罪悪感を覚えた。そして、セリアが心から心配をしてくれたことが本当に嬉しかった。

セリアはライ達を助けてくれた人にお礼を言わねばと考え、ライ達にその人を村まで連れてくるように指示しようと口を開いた。

『それで、誰に助けて貰ったかしら？その人にもお礼を言いたいから村まで来て貰うように説得して』

『う、うん。ええっと、ソルシエールって名前の女の子、ちょうどその人が村まで送ってくれるって言っているから大丈夫だよ。』

『ソルシエール！？……そ、そう、分ったわ。その人がいるなら多分大丈夫でしょうね。村でその人の分の宿も用意して待っているから早く帰って来なさいね。』

『え？……う、うん、分った。』

ライは釈然としないものを感じつつセリアとの念話が終了したことを告げる。無事連絡が終わったことに安堵したチェルシーはお疲れさまと言ってライをねぎらう。童女は言った通りであろうとふさふさとした尻尾を揺らしながら笑いかけ村へ行くかと言ってライに先を促した。その言葉にライは頷くと村の方へ向かい歩き始めた。数分歩いたライの背後で人が倒れる音が響いた。慌てて振り返るとそこには石に躓いてこけている童女の姿があった。ライは手を差し伸べるがなんでもないといい童女は自力で立ち上がる。服についた埃を払いやれやれとでも言いたげに嘆息する。どうも身体のパランスが上手く取れないらしい。これは現実世界の本人の体格とエルダー・テイルのキャラクターの体格があっていないときに発生する現象だ。ライもそう言った冒険者を何度も見ているので苦笑して苦言を呈す。

「あーもしかして>外観再決定ポーション<使っていないとかですか」「アレは〈大災厄〉前に人にくれてしまっただけ。……戦闘時は身体が勝手に動く故問題はないがの、それ以外では不便じゃ。とはいえ、時をかけて身体を慣らす他に方法はなからう。」

「村まで歩けそーですか？」

「まあ、何度か転ぶじゃろうがさほど問題はあるまいて。さて、参ろうかの。」

ライに対してそう答えると童女は歩き方を確認しながらゆっくりと歩く。元々歩幅狭いらしく、そんなに早くは歩けないらしい。それでも冒険者の身体能力は高くそこの大地族よりも遥かに早いのだが……ライやチェルシーも自然と童女の歩みに合わせて歩くことになる。このままでは村に辿り着くのにかなり時間がかかりそうだと感じた。まあ、それでも良からうと考えなおし、暇つぶしに童女に話題を振ることにした。

「そいあ、ソルシエール…さんは〈妖術師〉らしいですけど種族は何です？」

「妾は＞狐尾族＜の吸血鬼じゃ。何故か炎に関する特技…呪文がことごとく習得できなくての不便をしておるよ。」

「＞狐尾族＜…珍しいですね。」

「ヘーキツネの人は…って吸血鬼いい!？」

「大声を上げるな。全く騒がしい坊やじゃ。」

「オレは坊やじゃ…っていやいやそーじゃなくて!!」

吸血鬼であると聞いたライが大慌てをしている。童女は耳を押さえ苦情を述べるが混乱しているライは聞く耳を持たない。呆れた様子で童女は指で唇を持ち上げ牙を見せ、「ほら証拠じゃ」と言う。ライはそれを見てますます混乱を深めたようだ。モンスターじゃないよとか血を吸われないよとかブツブツとつぶやき始めた。

その様子にチェルシーは嘆息する。村に戻ったら補講潰けになるだろうと考えながら、吸血鬼に関して説明を始めた。

「ライ、サブクラスに吸血鬼は存在するのですよ。」

「え!?! マヂ!?!」

「ああ、一時期、一世を風靡したサブクラスよ。知らぬものがおるとは意外じゃな。」

チェルシーの解説と童女の補足を聞いて、ライは顔を真っ赤にしておろおろとし始めた。吸血鬼のサブクラスを知らないことは結構恥ずかしい事らしい。…動揺を上手く隠せずに誤魔化すようにチェルシーに問いかける。

「チェ、チェルシーはどうして知っているんだよ!?!」

「先週アリア様に教えて貰ったばかりですよ。ライも一緒に聞いて

いた筈ですが……」

「ごめん。忘れてた。」

そのライの返答にチェルシーは嘆息する。「アリア様にお知らせしないと」とポツリとつぶやいた。アリアとはライ達の所属するギルドカランチのメンバーの一人で〈施療神官〉をしている優しい人物なのだが、こういう不真面目な態度を取る生徒には非常に厳しい対応を取るらしい。しばらくの間、ライは補講漬けの日々を過ごすことになるだろう。

自業自得故に誰も憐れんでくれないのだが、どんよりと曇った死んだ魚のような目をしたライを横目に、チェルシーと童女は話し合いながら村へと歩いて行った。



村の入口は篝火によって煌々と照らされていた。その明かりによって赤く照らされた男が鋭い眼差しで村の外を睨みつけていた。その男はまるでレイドにでも行くかのような重装備をしていた。フルプレートを身に纏い、油断無くカトラスとタワーシールドを構えた油断のない佇まいからもその戦歴が伺える。

その男の名をナガトと言う。かれこれ十数年エルダー・テイルに参加している熟練の〈守護戦士〉だ。彼は海をこよなく愛しており、キャラクターにつけた名前やサブクラスに選んだ〈船乗り〉からもそれが伺える。何よりもそこらへんの悪漢どもよりも遥かに肝が据わっており、ススキノのならず者達ですらナガトのことを恐れ一目を置いていた。そのため、この村には悪しき者達も二の足を踏んでいた。

村の内側からユニコーンに乗った女性がナガトに向かって駆け寄

ってきた。彼女の名はセリア、零細ギルドカラカンチのギルドマスターであり、熟練の〈召喚術師〉だ。その凜とした佇まいは可愛いというよりも美しく、美しいと言うよりもかっこいい、もしくは男前と評される姿だ。さぞ、女性にもてたであろう。それはさておき、セリアはナガトの傍でユニコーンから降りると直に送還した。村の外を睨んでいたナガトは焦燥感が現れた表情でセリアに視線を向けた。そんなナガトを安心させるために先程ライから念話があったことを伝える。

「お疲れ様。ライ達は無事みたい。先程、ようやく連絡が取れたわ。」
「そうか……ったく今の今まで何をやって居やがったんだあいつらは」

「銀牢寿のブラッドに追いかけていたそうよ。でも、安心して良いわ。親切な人に助けて貰ったそうだから」

「なるほど、どうりで連絡が取れないわけだ。本当に無事で良かったよ。」

セリアの言葉にナガトは安堵の息を漏らす。ナガトはカラカンチに所属しているわけではないが、セリアに頼まれライ達に戦いのイロハを仕込んでいる。エルダー・テイルでは、特にエッゾ帝国では戦う力を持ったぬ者は高レベルの冒険者の手によって悲惨な目に合わされることが多い。故にナガトも二つ返事で引き受けた。幸い、ライはセンスがあるため、そう遠くないうちに一線級の〈守護戦士〉になれるだろうと考えていた。だから、他人に頼る癖をつけないように自分達だけでたち回れるようにと単独で狩りをする許可を出したのだ。

それが初日からこんな風に躡くとはナガトも計算外であった。それとも見通しが甘かったのであろうか。ススキノの人間が執念深く狙ってくるのはナガトにとっても意外であった。もしかすると村を

見張っている者がいるのかもしれない。〈召喚術師〉や〈暗殺者〉ならばそれも可能なのだから。考えだすと悪くなっていく状況にナガトは憂鬱な気持ちになった。そして、それを考えるならば、今回の件はライではなく、ナガトに責任があると言っても過言ではないだろう。

「すまん。今回の件は完全に俺のミスだ。」

「いえ、貴方だけが悪いわけではないわ。貴方が許可をした理由も場所も納得のいくものだった。それを言うなら私も同罪よ。」

「その親切な人にはいくら感謝をしてもし足りないな。」

「ええ、こちらまでエスコートしてくれるそうだから、その時にお礼を言うつもりよ。それで、その親切な人なんだけど……」

セリアが言い淀んだ。姉御肌の彼女にしては珍しい態度である。

ナガトは内心首をひねりつつも急かすような真似をせず、セリアが喋るまで待つことにした。

「ソルシエールと言うそうよ。」

ナガトはその名前を聞いて得心する。悪評と好評の両方が突き抜けており、本人にあったことが無ければどう評価してよいか困る人間なのだ。ナガトとはある縁より付き合いがありそれ相応にどういう人物なのかを知っていた。故に困惑しているであろうセリアを安心させるために口を開いた。

「そいつは幸運だったな。アイツは初心者には親切なタチだ。キチンとエスコートもしてくれるだろうよ。むしろ、襲ってきた奴の方を心配してやるべきかもしれん。初心者狩りが嫌いだから徹底的にやったかもしれん。」

「知り合いなの？」

「昔からの馴染みさ。俺はエルダー・テイルでも海にいる事が多くてな。アイツが海外で仲間を募集していた時には良く呼ばれたもんだよ。」

セリアはナガトの言葉を聞いてなるほど納得した。ナガトは十数年間エルダー・テイルに参加し続けているプレイヤーである。それだけ続けていればソルシエルと会う機会もあるだろうと言うのは納得のいく話である。ナガトの口振りからしても心配する必要がある相手なのかもしれないと考え始めていた。ナガトは〈大災厄〉後の本当に苦しい時期を助けあった仲間なので信頼も出来れば信用もしている。藪をつついて蛇を出すような真似をするべきではないと考えた。第一スキノの悪漢達だけで頭がいっぱいなのだこれ以上何かが来たら間違はなくパンクしてしまう。セリアは溜息を吐きながら街の外をに視線を向けばやいた。

「はあ……いっそ、アキバにでも行けば良かったかしらね。治安が良いみたいだし、正直羨ましいわ。」

「仕方ないさ。コタンの村には大分世話になった。見捨てていくのは不義理が過ぎるぜ。」

「愚痴っただけよ。愚痴ぐらいいでしょ、あの馬鹿共の対策だけで頭痛いんだから、五月革命以降挑戦している紡績機はまだ出来ないし……」

「まあ……」

セリアは色々と上手くいかない現状に溜息をついた。五月革命のとき、セリアが真っ先に思いついたのが紡績機だったりする。アレがあれば日常的に着る服や布製品を作るために必要な布が大量生産できるという利点がある。人の手を使って作るよりも遥かに早く作れるため、これから先必ず必要になるときがくるはずだとセリアは考えていた。時間の合間を見て生産メニューをチェックしながら設

計図を修正している毎日だ。完成にはまだしばらく掛かるだろう。紡績機は時が解決してくれる問題だから放っておいても良いだろう。だが、銀牢寿の襲撃は時が解決してくれる問題ではないため、セリアは手を焼いていた。彼らの目的は誰の目から見ても明らかなためどうか対処ができる事が救いではあるのだが……

嗜好に没頭し始めたセリアの耳に、金属同士が擦れ合う音が響く。ハッとして音のした方向に目を向けると、ナガトが武器を構え慎重に一点を見つめている所だった。セリアもナガトの視線先に目を向けると、3つの人影がこちらに向かって歩いてきている姿が見えた。

「帰って来たのかしら？」

「さあな。気を抜くにはまだ早い。」

ナガトは言外に人影が敵である可能性があるかと告げる。セリアはその意図を汲み取り慎重に人影を観察し始めた。人影の正体が判明するまでの心を鑢にかけるような時が過ぎる。やがて、人影が判別できるようになったころ、ナガトはカトラスを下ろし嘆息した。セリアも人影の正体が誰なのか分りほつと安堵の息を吐く。

森の入口からライとチェルシーと一緒に金髪紅眼の童女と一緒に歩いていた。あの童女がソルシエルなのだろうとセリアは考えた。ソルシエールの歩みは遅い、何故なら右足の動かし方があまりに雑であるためだ。あんな動かし方ではロクに歩く事が出来ないだろう。実際の体格との差異で身体が上手く動かせないケースとは違っているように見えた。それはセリアには関係の無いことだ。ソルシエールの歩みに合わせてライとチェルシーも歩いているため、非常にゆったりとしたペースだ。ナガトなどはコンパスの差がここまで影響するとはなと呟いていたりする。

月が天頂に昇るころ3人は村に辿り着いた。セリアはライとチェルシーの傍によると2人をぎゅっと抱きしめた。

「おかえりなさい。」

「セリアさん、ナガトのおっさんもただいま。」

「セリア様、ナガト様遅くなって申し訳ありません。」

「おかえり……おっさんは余計だ。だが、無事に帰って来れて良かったよ。それと久しぶりだな、ソルシエール。」

「ああ、久方ぶりよな。ナガト」

抱き寄せたセリアは安堵のあまり瞳から一筋の涙をこぼした。ライとチェルシーはセリアの様子に強い罪悪感と安堵を覚えなされるがままになっていた。それをナガトとソルシエールが微笑ましげに見ていた。セリアは2人を抱きしめたままの姿勢でソルシエールの方に顔を向け礼を述べる。

「……2人を助けて頂いて本当にありがとうございます。私はライが所属しているギルド、カラカンチノギルドマスターを務めるセリアです。あの鬼畜共に捕まればどんな目に合っていたか……本当に感謝してもし足りませんわ。」

「俺からも礼を言うよ。本当に助かった。」

「そう気にせずとも良い。初心者のエスコートは熟練者の役目だ。」

当たり前のことだろうとソルシエールは答える。その言葉を聞いたセリアは信用しても良いかもしれないと思った。どこまで信用できるかは不明であるがスキノの悪漢達よりは遥かにマシであろうと言うことは間違いない。そして、ソルシエールの言った言葉はへ大災厄前ならば誰もが言っただけのことに行っていたことだ。そして、へ大災厄後は滅多に行う者がいなくなった言葉でもある。その言葉を聞いたナガトは感謝の言葉を口にする。

「そーいってくれと助かるぜ。正直、へ大災厄後のエッゾ帝国はソマリア並みの危険地域でな。気の休まる暇が無い。ライ達の件

も俺の判断ミスだ。……2人ともすまなかった。」

ナガトの言葉にライとチェルシーは大慌てしてしまう。そんなことはない、今回は単純に運が悪かったただだと口々に言う。そんな2人の慰めにナガトは感謝した。

一方ソルシエールはと言うとナガトの愚痴の險呑さに眉をひそめていた。強い力を手に入ればそれに溺れる人間も出てくるだろう。とはいえ、それだけでソマリア並みの無法地帯が発生したというのは言いすぎではないかと思った。しかし、ナガトの真剣な表情が偽りの発言ではないと言う事を述べていた。加えて言うならば、ライ達を襲撃した男が多数いるならばそれも真実になる可能性があると考えた。

ソルシエールはしばし目を閉じ困ったような表情を浮かべた。

「難儀な話じゃ。」

「ああ、全くだよ。」

応じるナガトも苦り切った表情を隠さない。

セリアはナガトとソルシエールの会話をライ達を抱きしめたまま聞いていた。ソマリアとは言い当て妙だっただけに笑えなかった。おまけにススキノはエルダー・テイルノヨハネスブルグと言う不名誉極まりない名前を付けられていた。改めて、セリアはエッゾ帝国での生活の先行きの暗さに頭を痛めた。これ以上はこの事を話しても不毛なため、セリアはライ達から手を話すとソルシエールに向き直りこの村に泊まらないかと提案した。

「ソルシエールさん。村に宿を用意したから今日はそこで休んで貰えないかしら……別に用事があるのなら無理にとは言わないけど」

「ふむ、ありがたく休ませて貰おう。屋根のある部屋で寝るのはへ大災厄」以来じゃ。」

その言葉に一同は自分の耳を疑った。ソルシエールの言葉は〈大災厄〉が発生してから今までフィールドエリアで過ごしていると云っているようなものだったからだ。空耳だったと自分の聞き間違いであったと確認するためにナガトは一同を代表して質問した。

「聞き違いだとは思うのだがよ。一応確認させて貰うぞ。お前さんは今まで何をしてきた。」

「うむ、森の中を彷徨っておった。オプタテシケへ向かう途中に〈大災厄〉が発生したからの。」

その言葉に一同は哑然とする。普通であればそのような状況に巻き込まれて平静とできる筈が無いからだ。〈大災厄〉後、冒険者を一番悩ませたのが戦場の、戦闘の恐怖を払拭することもしくは初陣に耐えることであった。これに耐えきれず戦うことを辞めた者も数多い。ナガトは頭痛を堪えるかのように額に手を当てた。ライとチエルシーは鳩が豆鉄砲を食らったような表情を浮かべる。「証拠じゃ」と言ってキンムカムイの毛皮やオプタテシケでしか取れない高山植物、飛竜の鱗を背負い袋から取り出して見せた。

セリアは苦笑いを浮かべながらそれらを見つめていた。苦笑で済んでいるのは、セリアもソルシエールと同じことをやれと言われればできないことがないからだ。

〈召喚術師〉は他のメインクラスにはない利点を持っている。それは、モンスターと戦う際に召喚獣に命じておけば本人が怯えていても戦うことができるという点だ。〈召喚術師〉は召喚獣を呼んで戦わせる魔法職だ。一度命令すれば相手を殺してしまうまで召喚獣は手を休める事が無い。そのため、〈大災厄〉後の初陣でも勝利を収めることができ、その後も狩りをし続けることでやがて戦場の空気に慣れて〈大災厄〉前と変わらぬやり方で戦う事ができるようになるのだ。

だが、それは〈召喚術師〉故の利点であり〈妖術師〉であるソルシエールは前提条件が違う。もし、それが真実で数ヶ月山の中で過ごしたと言うのなら生半可なプレイヤーでは太刀打ちできないであろうことが予測された。

ナガトは頭痛がようやくおさまったのだろうか。頭に置いていた手を退かした。だが、引き攣らせたような表情は変わらず、更に確認するかにようにソルシエールに問いかける。

「……帰還の呪文とか使おうと思わなかったか。」

「そのような呪文もあったの。妾はあの手の呪文は好かぬから今の今まで忘れておったよ。」

「……確認するが飯はどうした。」

「吸血鬼である妾はモンスターの血をすすればことは足りる。なかでも竜種の血は格別であった。あれこそ至高の味じゃ」

ソルシエールは小さな唇を開き鋭い犬歯を見せた。ナガトはあぐりと口を開け、ライとチェルシーは乾いた声で「わーお、便利だな。吸血鬼って。」「ええ、ここまで便利とは思いませんでした。」などと台詞を棒読みするような口調で言いあっていた。セリアはここまで無茶をするとは思っていたのだろう。呆れた様子ソルシエールに突っ込みを入れる。

「色々言いたいことはあるけど、貴方のような例は空前絶後でしょうね。」

「2人もいてたまるか！」

「ちょっとしたサバイバルに過ぎぬ。冒険者の身体能力ならば大したことでは無いよ。」

セリアの台詞に冗談ではないとナガトは返す。ソルシエールが2人もいれば大変なことになるだろう。関わる羽目になった不運なも

のは胃薬を常備しなくてはならなくなるかもしれない。ライは乾いた笑いを浮かべ、チェルシーは何処か呆れた風な表情を浮かべる。ソルシエールの在りようはあまりにフリーダム過ぎた。

ナガトは疲れた声でぼやく。

「昔からお前さんは無茶苦茶していたが、今は更に輪をかけて酷い事になっているな。」

「そうかな？――…大したことはないと思うのじゃがな。それに妾にとってエルダー・テイルでの日々は楽しい。全てが新鮮じゃ。」

大したことでないと言う発言にライとチェルシーは絶句する。何人か高レベルの冒険者を見てきたがソルシエールのような無茶をする存在は見たことが無かった。エルダー・テイルの日々は決して楽ではなかった。少なくともススキノでの日々地獄のようだった。フィールドでモンスターを警戒して過ごす日々もそれほど楽しいとは思えないのにソルシエールはそれが楽しく新鮮だと言う。ライはソルシエールの理解できなかった。

ソルシエールの発言にナガトは苦笑をしながら一応釘を刺しておくことにした。

「お前さんはそうかもしれないが、大変の人間はこの世界で地獄を見ている。そういうことは他では言うなよ。」

「……すまぬ。大分浮かれていたようじゃ。忠告、感謝する。」

「ええ、気を付けて頂戴。特にエッゾ帝国は〈大災厄〉後、本当にひどい状態になっているから……このまま話していても限が無いわね。詳しい話は明日にしましょう。その時に他の冒険者やこの村の村長を紹介するわ。」

セリアの言葉に一同が了承したように頷く。セリアは「こちらよ。」と言うと皆を先導してソルシエールが泊まる宿に向かって歩き始

めた。セリアについて歩いて行こうとしたソルシエールは踏み出した右足の雑な動きのせいでまたバランスを崩しずっこけた。「いたたと……」言いながらも鼻を押さえながら立ち上がり再び歩きはじめる。

それに対しナガトとセリアは何も言わず歩く速度を落とした。村に着くまでの間に何度もあったのだろう。ライは少し呆れたような表情を浮かべると苦言を呈する。

「〈外見再決定ポーション〉使ったらどーだ？流石にそれだと大変だぜ。」

「だから、譲ったと言っておろう。まあ、仮にあったとしても使わぬよ。戦闘には困らぬからの。」

「まあ、いいんじゃないか。戦闘で問題が発生しないのなら大丈夫だろ。」

「ええ、本人がそう決めたのなら他人が口を出すべき問題ではないわ。少しペースを落として歩きますから、ゆっくりついてきて。」

ナガトとセリアが揃って容認する発言をしたため、ライはそれ以上追及するのをやめることにした。もしかしたら、触れてはいけないマナーの部分に関わるかもしれないとおもったからだ。

ナガトはライが追求を辞めたことにほっと安堵の息を漏らす。それを目ざとく見つけたセリアが問いかけるように視線を向けると、ナガトは首を横に振り、宿に向かうように促した。ナガトはセリアからの追及を逃れるため話題を変えようとソルシエールに話を振った。

「しかし、まだ吸血鬼のままにしているとは思わなかったよ。ペナルティ、かなりキツイだろ」

「……問題はないよ。ソロであれば回復魔法は使わぬし、レイドも〈妖術師〉が回復魔法に頼るようになればそれは負け戦じゃ。」

ソルシエールはそう断言する。実際のところソルシエールは幾多のレイドに参戦し幾多のPK、PKKともやり合っている。立ち回りの上手いので回復用のポジションだけでも自身の回復は間に合うらしい。ナガトの発言もソルシエールにとっては余計なお世話と言ったところだろう。もっとも、一番気をつけなければならぬのは仲間の回復役に止めを刺されないようにすることなのであるが……村の家々に灯された明かりを見ながらソルシエールは首を傾げる。空き家の数が異常に多いのだ。これも〈大災厄〉の弊害であろうかと考えたが明日、村長などを紹介して貰う時に聞けばいいと考えた。故に、他愛のないことをナガトに聞いてみることにした。

「ナガト、船は使用できたかの？」

「ああ、確認したよ。問題無く使用できそうだ。まあ、ススキノの馬鹿共が大人しくなるまではお預けだろうがな。」

船に乗れない現状を思い出しナガトは不満げに鼻を鳴らす。セリア達はいつものことかと苦笑を浮かべた。高レベルの冒険者が少ない村で歴戦の〈守護戦士〉であるナガトは貴重な戦力であった。彼がいるからこそ、この村はススキノの悪漢達に蹂躪されずに済んでいるのだ。

セリアはナガトに申し訳ないと思いつつも現状が続く限り居残って貰わなければと考えていた。そういえばとセリアはふと思いついた。ソルシエールが〈大災厄〉後、街によつていないのであれば服や下着などで相当苦勞している筈である。それを聞いてみるのも良いかもしれないとセリアは考え、問いかける。

「そういえば、ソルシエールさんは服の替えとか持っていないわよね。」

「うむ、お陰で大分不便をしておるよ。」

苦笑いを浮かべながら答えるソルシエールにセリアは恩を売る機会かもしれないと考えた。名の知れた冒険者でもあるし、この村にいる間は良いお客さんになって貰えそうだと考えたからだ。そんな内心をおくびにも出さず、セリアは話を続けた。

「〈五月革命〉で発表された情報の中にね。生産スキルに関する面白い物があったわ。ツールを使わずに手作業で行えば、服や下着を自由に作成することができらしいわ。カラカンチにも裁縫師がいるから、明日紹介するわね。彼女に頼めばすぐにつくってくれるわ。」

「それはありがたい。替えの服やら下着やらが無くて困っておったところじゃ。幸い材料は持ち合わせておる。それで頼むでしょう。」

「ええ、それだと良い物が作って貰えそうね。余った分は私達が引き取るわよ。」

「……了解した。そちらに卸そう。」

「ふふふ、まいどあり〜」

商魂逞しいセリアの発言に苦笑しながらソルシエールは了承する。実際のところ、ソルシエールが持っていたても活用できないので問題はなかった。必要ならば狩りに行けばいいだけだし。死蔵するよりも生産系のサブスキルを持っている人間に譲り渡した方が有益である。下手をすれば下着無しで過ごさなければならないと覚悟していたぐらいだ。下着を作って貰えるのだからそれぐらいは大目に見るべきだろうと考えた。

セリアとの話が終了すると、次はチェルシーがソルシエールに質問をした。

「これから先はどうされますか。」

「ふむ、曖昧じゃな。まあ良い。しばらくはこの村に滞在させて貰

うつもりじゃ。僅かばかりではあるが路銀も持っておるしの。足りなければ狩りに行けば良いだけの話じゃ。」

「そうですか。では、これからよろしく願います。ソルシエール様」

「うむ、こちらこそ。」

セリアが足を止めた。会話をしている間にソルシエールを止める宿、正確には家に辿り着いたようだ。小さなログハウスといった雰囲気造りでその庭には見事な枝ぶりの林檎の木が植えてあった。手入れをきちんとしているらしく寂れた感じが無い家である。ただし、周辺の家と全く同じつくりであり宿泊施設として作られたものではないことは明らかだった。それよりも先程からこのような家が複数あるという事態にソルシエールは疑念を覚えた。本来であれば、明日聞く予定であったが今日聞いておかねば危険に巻き込まれるのではないかと考え、その事について問いかけた。

「立派な家じゃな。……じゃが、これは元々この村の大地族の家ではないのかの？」

「この家の持ち主は少し前に亡くなられたわ。エルダー・テイルは大地族にとって、とても厳しい世界よ。……それに輪をかけてススキノの悪漢共がいろんなところで暴威を振るっているから……」

「ここに住んでたおっさんは――」

「ライ……余計なことを言うな。ソルシエールも詳しくは明日話すそれでいいな。」

「ああ、どうやら込み入った話のようじゃ。それで構わぬよ。」

そういうとナガトは「沈黙は金と言う言葉を知らんのかな。」と言いながらライの耳を引っ張っていた。多分、説教をするつもりなのだろう。セリアも少し怒っており、チェルシーの目も冷たかった。ナガトに連れられて行くライを見ているとドナドナの歌詞が脳裏を

よぎったが、どうにも自業自得らしいので放っておくことにした。
残っていたセリアとチェルシーにお休みと挨拶をすると、ソルシ
エールは家の中へと入っていった。セリアはそれを見届けた後、チ
エルシーの背中を押しながら、カラカンチのギルドハウスへ向かっ
ていった。



ライに対する説教を終えたセリアはベッドの上に転がり今日一日
の出来事を思い浮かべた。一日の半分ぐらいをライとチェルシーの
探索にあてたため、鍛冶屋の仕事が予定の半分程度しか進まなかつ
た。明日頑張って今日の分を取り戻さなくてはならないことに気が
つき少しだけ凹んだ。

セリアは自分の部屋に飾ってある実験用の蒸気機関の模型を眺め
ながら、ソルシエールとの会話を思い返していた。ソルシエールは
『話に聞いていた』よりもまともな人物であったと言うことは幸い
だった。ススキノの悪漢達が虎視眈々と村を狙っているのだ。これ
以上の厄介事はなんとしても避けたかった。ナガトの知り合いだと
言うことは意外だったが、それは幸運だと考えていた。知り合いが
いるのならば人間関係が円滑に築きやすく、知り合いがいる以上ソ
ルシエールの方も無茶な真似をしないと期待できるからだ。

現在カラカンチには問題児が一人いる。〈大災厄〉前は真っ当な
プレイヤーだったのだが〈大災厄〉後モンスターに対する恐怖に負
け引き籠ってしまったグレゴールと言う〈盗剣士〉がいる。それだ
けならばまだ良かったのだが、不平不満を周囲にぶちまけて足を引
っ張ることに躍起になるようになったため、非常に手を焼いていた。
この村での問題の半分ぐらいは彼の手によって引き起こされている
と言っても過言ではなかった。

だが、一月ぐらい前から少しだけ落ち着き、ゴブリンぐらいならば問題無く狩れるようになってきたのだ。このペースならば時間があれば元通りに戻ることが期待できた。そのため、ソルシエールが悪い刺激にならないようにセリアは十分に注意しなければならない。ナガトにも頼んでおこうと考え、その事をベッドの横に備え付けてあるメモ用紙に書き込んだ。

そして、ふと思い出したソルシエールの評判を確認するかのよう
に呟く。

「エルダー・テイル屈指の冒険家にして屈指のPKか……ほんと極端な子よね。」

PKとは言えススキノの外道達とは違うようだから普通に付き合うことは可能だろう。それにライとチェルシーを助けてくれた人物でもあるのだから、信じてみても良いだろう。そして、彼女について少しでもわかった事もある。もし、想像通りであれば〈大災厄〉後のこの世界は彼女にとってパラダイスとは言わないまでも新鮮なのだろう。はしゃぐ気持ちも分らなくはない。

明日はギルドの仲間達を紹介しなければならぬ。グレゴール以外も可愛い物好きのアリアが暴走しないことを願うのだが……まあナガトか誰かがフォローしてくれるだろう。セリアは少しだけ現実逃避をすることにしたようだ。眠気で瞼が落ちてきた。そろそろ眠らなければ明日に支障が出てくるだろう。明かりとして召喚していたウィル・オー・ウィプスを送還するとセリアは夢の世界へと旅立っていた。

01 狼殺し（後書き）

駄文ですがご容赦を

窓から射す朝日に目を細めながら、ソルシエールは瞼を擦りつつベッドの上で大きく伸びをした。

久しぶりの心地よい目覚め、冒険者の身体と言えど野外での睡眠は十分と言う訳にはいかないらしい。

ゆっくりと足を動かしベッドの上から降りようとした。

だが、上手くバランスがとれず床の上に倒れこんでしまった。

どうも右足に上手く力が入れられないらしい。

動かし方が雑であり、はた目から見てもアレではバランスを取る事が出来ないだろうと思われる。

痛みのあまり狐耳がペタンと頭に張り付いており、尻尾が揺れていた。

「くう……いたたたた、そう簡単にはいかぬか。」

ベッドに手をおいてゆっくりと立ち上がり、思うように動かない我が身に苦笑いを零す。

八つ当たり気味に生産系のサブスキルでメニューにないアイテムを作れるのなら魔法使いは新たな魔法が作れないものかと考える。

それも出来れば空を飛ぶ魔法。

まあ、実際に作ったとしてもグリフォンの方が便利だから使われる事はないであろう。

そんな事をつらつらと考えつつ、背負い袋から防具を取りだし羽織る。

今日は村の責任者と冒険者達の紹介がある日である。

暇であるし、村の散策ついでにナガトやセリア達を訪ねるのも悪くは無いだろう。

そう考えると、ソルシエールは出かける事にした。



村の朝は早い。

夜明けとともに起き支度を済ませ、各々の仕事場へと向かっていく。ソルシエールは既に仕事を始めている彼らとあいさつを交わし、ナガトの家を教えて貰いながら村を歩いてゆく。

大地族は冒険者であればどのような外見でも、容姿でも、いつ現れたとしても不思議ではないのだろう。

詮索されること無くナガトの家を教えて貰えた。

ソルシエールは村人たちと話しながら、NPCのような扱いをしない方が良くと考え始めていた。

彼らは純朴だが知性があり、感情も持ち合わせている。

そんな彼らにNPCに対して接するような態度を取ればいずれ手痛いしっぺ返しが待ち構えているであろうことは容易に想像できた。

そういう意味ではカラカンチのやり方はかなり良いやり方なのではないかとソルシエールは考えた。

ナガトの家はわりと離れた場所にあったがほどなく辿り着く事が出来た。

ドアをノックし来訪を告げる。

ノックをして幾らか待つと眠たそうな声がドアから離れた場所から聞こえてきた。

「誰だ？」

「おはよう。――：ソルシエールだ。ナガト」

「ああ……そろしえーるか。……入っていいぞ……」

この状態でも今だ寝ぼけているナガトはいつそ天晴れとでも言うべきだろうか。

そんなくだらない事を考えつつも思考を現実に戻し、しばらく役に立たないであろうナガトではなくソルシエールに問いかける事にした。

「えーと、ソルシエールさん、コレは一体どういう状況なのかしら？」

「先程、玄関の扉をノックしてナガトに扉を開けても良いと許可を貰ってな。……ドアを開けたらコレじゃ。」

部屋を親指で指しながら、呆れた様子でソルシエールは答えた。

セリアは頭痛を堪えるかのように頭を押さえる。

シーツで肢体を隠しながらアリアは半泣きになっていた。

そんな中ナガトは頭をボリボリと掻きながら「未通女にやあ、刺激が強かったか？」などと呟いた。

それを聞いたセリアとアリアの表情が般若へと変わる。

それを見ながら、ソルシエールは阿呆めと内心呟きナガトの株価を下げる。

セリアとアリアによる制裁が始まる前にソルシエールは退避する事にした。

「妾は外で時間を潰す事にする。海より深く反省するが良い。ケダモノ」

ナガトはようやく目を覚ました。そして、自分のしでかした過ちに気がついた。

頼みの綱であるソルシエールは救援を求める前に立ち去っている。孤立無援の状況の中、ナガトはセリアとアリアの手によって地獄の一丁目へと連行されていた。

ちなみに、大声に気がついてこちらに来ようとしていたライ達はソルシエールの手で止められ安全な場所へ誘導されていたらしい。



アリアと共にナガトを折檻して怒りがおさまったセリアは、村長の家にソルシエールを案内すると約束していたと言う事を思い出す。早朝だったと言うことが幸いしたのだろうそう遅い時間では無い。セリアはアリアに後の事を任せると外に出たソルシエールを探しに出かける。

幸い、ソルシエールはナガトの家の入口から見える場所に居た為、直に見つける事が出来た。

セリアはソルシエールの元へ歩いてゆく

「遅くなってごめんなさい。今から貴方をこの村の村長の家に案内するわ。」

「気にせずとも良い。アヤツめを矯正する事の方が肝要故にな。」

爽やかな笑顔を浮かべ、童女はセリアに気にするなと言う。

その答えにありがとうとこちらも爽やかな笑みを浮かべるセリア。

朗らかではあるがどこか凄みのある笑顔を浮かべながら、二人は村長の家へとむかった。

コタンの村は小さな村であり、誰の家に行くにしてもあまり時間がかからない。

村長の家も十数分程度でたどり着く事が出来た。

セリアがコンコンとノックをし許可を貰った後、ドアを開ける。

部屋にいたのはかつては戦場で勇名を馳せていたのであろうと予想させる数多の傷跡を持つ隻腕の老人がいた。

その老人は好々爺のような表情を浮かべると家に入ってきた二人を歓迎する。

「おはよう、セリア殿。そちらにいる御仁はどなたかな？」

「おはようございます。ブルースさん。彼女はソルシエール。昨日、この村にやってきた冒険者くよ。」

「初めまして、御老体。妾はソルシエール冒険者くの一人だ。」

「ふおおふお、初めまして、ソルシエール殿。わしはこの村の村長をしているブルースと申す者。以後見知りおき願います。」

快活に笑うとブルースは二人に椅子をすすめる。

その言葉に従い、二人は椅子に座った。

ソルシエールは老人――ブルースを見て内心、首を傾げた。

ブルースの技量は高い40といったところか？、大地族の中では上位に当たるだろう。

その上、油断や隙といったものが存在しないのだ。下手な冒険者ではあつという間に寝首を掻かれるだろう。

例え隻腕だったとしてもこの村に留まっていけない人物ではない筈だが……

「ソルシエール殿でしたな。この度はどのような用事でコタンの村へ？」

「妾に用事があつたわけではない。昨晚、保護した若き冒険者をこの村へ送り届けに來ただけじゃ。」

「ふむ、それではすぐに立ち去られるのですかな？」

「否、妾はエルダー・テイルの現状の情報を持っておらぬ。それを手に入れるまで逗留しようと考えておる。」

「ふむ、見た所腕の良い冒険者の方のようだ。貴方ならば問題はないでしょう。村の皆にはわしから伝えておきますよ。それと御逗留の間は、是非ともコタンの地酒と鮭料理をご堪能ください。きつと

満足していただけると思いますよ。」

「うむ。楽しみにさせて貰おう。」

そういうとセリアとソルシエールは立ち上がりにこやかにあいさつを交わして立ち去った。

村長の家を出てほっと息を吐く。

老獺さが滲み出る人物だったNPCなどと言って甘く見ていい存在では無い。

多くの冒険者にとって戦闘力の無い彼は路傍の石のように映るだろう。

だが、老人の人生経験からくる老獺さはそういう冒険者の意識すら逆手にとり利用してのけるだろう。

大した狸だとソルシエールは内心呟く。

「あの御老体、只者では無いの」

「ええ、元近衛兵だそうよ。戦場での負傷がもとで退役したらしいわ。」

「何故じゃ、斯様な人物であればそれこそこのような村に留まらずとも余生を過ごす事など出来よう。」

「元々この村の出身らしいのよ。近衛兵時代のコネを使ってこの村を発展させたらしいわ。」

「なるほどの、故郷に錦を飾るか……道理で狸なわけじゃ。」

村長の人物評を聞いてますます大地族をNPCとして甘く見るわけにはいかないと言う事を確信する。

ふと、ソルシエールは畑に視線を向けると、どこかで見た事がある植物が畑で育てられていた。

記憶をたどりながらもそれを思い出せないもどかしさを覚え、セリアに尋ねてみた。

「セリアよ。この畑では何を育てているのじゃ？」

「――：芥子よ。ただし医療用の薬として育てられているわ。元の世界でもモルヒネの材料に使われているのわよ。」

「なるほど、道理で見覚えがあるはずじゃ。医療用として用いれるとは知らなかったの」

「ええ、普通はそうでしょうね。芥子は歴史が古いの紀元前5000年頃から薬として用いられていたのよ。アヘンに使われるようになったのはもっと後、ローマ帝国の時代ね。」

「ほう……」

そう言いながらセリアはフォローをしておく。

最近は何人でそれらを育てると言う真似をする阿呆もあり、それが写真付で新聞に載ることもある。

ソルシエールに見覚えがあったのはそれが原因だ。

現代人にとって芥子は麻薬の材料と言うイメージしかなくそれが嫌悪の原因になっては困るからだ。

こちらの常識を押しつけるような真似をすれば、ただでは済まないだろう。

何故ならば、薬が無ければ病人の治療が難しくなる。

大地族はそれを受け入れる事は出来ないだろう。

「ギルドハウスに着いたら、カラカンチのメンバーとナガトさん以外の他のギルドの人を紹介するわ。といっても、うちのメンバー6名それ以外2人しかいないのだけどね。」

セリアはそう言って、ソルシエールを工房兼ギルドハウスへと案内する。

そろそろ馬鹿^{ナガト}への制裁は終わっているところだろう。

セリアは鍛冶屋、アリアは裁縫師をやっている。他に生産系のサブクラスを持つ者はあと1人しかない。

彼女は生産系としても未熟なのでまだ売り物は作れないだろう。ライはまだサブクラスを決めていないので出来れば生産系をやって欲しいと考えている。

そんな事を考えながら歩いていると、ギルドハウスが見えてきた。そんなセリアもソルシエールへの紹介で波乱が起きるとは思ってこなかった。



ソルシエールの紹介があった翌日。

昨日起きた騒動に溜息をつきながら、ナガトは狩りの準備を終わらせて村の外れの集会所へと向かっていた。

カラカンチに所属するとある男がソルシエールのPKとしての活動を知っており、それだけならば良かったのだが『イカレ女と一緒にいられるか』と叫んだのが騒動の始まりであった。

セリアが叱りつけ、反発するように怒鳴り返し、拳句の果てに禁句に触れかけたのでナガトが慌てて止めに入ったのだ。

ソルシエールが相手をしなかったのが幸いして致命的な事態へは発展しなかったが一歩間違えばカラカンチとソルシエールの戦闘へと発展しかねない事態であった。

本来であれば叩きだしたかったのだが、セリアの頼ってきたものを見捨てられないと言う性格のためそれも出来なかった。

ソルシエールに関しては本当に良く知っているだけにそう言う理由で彼女を追いつく真似はしたくなかった。

これからも続くであろう騒動に頭を痛めていた。

集会所が見えてきたとき、ナガトは意識を切り替える事にした。自分の成すべき事はライ達3人をエルダー・テイルで生き残れるように一人前に育てる事である。

今日は狩りの前にミーティングを行い、次のステップに関しての説明をしてやらねばならない。

おはようとそれぞれに挨拶をし、既に3人がそろっている事を確認する。

それではとナガトは口を開いた。

「今日は狩りに行く前に説明しておく事がある。それは『流派』に関してだ」

「ナガトさん、昨日、セリ姉とアリア姉に怒られ過ぎてボケちゃった？」

ナガトの厨二的な発言に呆れたように突っ込みを返す少女。

彼女の名をカレンと言う。

髪は短くショートで纏め、革製の胸当てショートパンツを穿いた活発そうな少女だ。

彼女のメインクラスは＞召喚術師＜、ライの幼馴染らしく彼を誘ってエルダー・テイルを始めようと言いだしたのは彼女らしい。

何でもソルシエールの作っているHP『エルダー・テイル旅行記』を読んでやりたくなったらしい。

ある意味、ソルシエールが原因で＞大災厄＜に巻き込まれたプレイヤーだろう。

昨日の騒動の原因の一人だが悪い事をしたわけではないのでナガトも窘める程度で終わらせている。

もう一人が起こした騒動に比べれば問題が無い程度であったと言うものもあるが……

カレンの発言を肯定するかのようにライは冷めた目で、チェルシーは首を傾げながらナガトを見ている。

そんな3人の様子に苦笑いを浮かべながら話を続ける。

「言っておくが、断じて厨二病とかなんじゃないぞ。エルダーテ

イルには数多の武器、特技が存在するだろう？流派と言うのはそれらの武器、特技をどのように使っていくかと言う事を研鑽して行った過程で生まれたものだ。例えば＜守護戦士＜の場合、両手武器を使うか片手武器と盾を使用するかで大まかに使う者の戦術が分れる。両手武器の者は攻撃重視、片手武器と盾を持つ者は防御重視といった形にな。ここまではいいか？」

まともな話なのかと納得し、カレンやライも呆れた表情を真剣なモノに変えナガトの言葉を聞き洩らさないと言う表情で聞いていた。生徒達が真剣になったのを確認しながらナガトは一息入れる。喉の渴きを覚え、水筒を取りだし水を飲む。

ナガトは元々教えるのは得意ではない。だが、教えなければ未熟な者が危機にさらされるとあれば弱音を吐くわけにはいかないのだ。

「流派は無数にあるが＞守護戦士＜は基本的に両手武器を使うアタッカー、片手武器と盾を使うディフェンダーに分かれる。俺の流派は……ライどちらだと思う？」

「カトラスに盾を使っているからディフェンダーですよね？」

「正解だ。師匠は『壁』^{ウォール}と呼んでいた。……モンスターと仲間を隔てる壁という意味があるらしい。まあ、そいつは置いておこう。ライの師匠が出来るのは今の所俺しかないからな。お前には『壁』^{ウォール}を学んで貰う。」

「はい！！」

拳を強く握りしめ気合の入った様子で返事をするライ。

先日の件も影響しているのだろう目には強い意志が宿っていた。一方カレンとチェルシーは不満げである。ナガトは＞守護戦士＜、自分達に流派を伝える事が出来ないと言う事に気がついたからだ。そんな二人の様子に気がついたナガトは付け加えるように告げる。

「わりいな。俺は召喚術師と施療神官の流派は知らないもんでな。ちょうど、セリアとアリアがお前達と同じ職だからな。お前達は彼女達に習うと良い。」

その言葉を聞いたカレンとチェルシーの不満げな様子が薄れた。否、むしろ満足気になった。

何故ならばナガトの株価は先日ので恐ろしい勢いで下降中だからだ。

セリアやアリアの方が良い事を教えてくれるんじゃないかと思っ
ていたりする。

そんなカレンとチェルシーの内心に気がつかないナガトは安堵の息
を漏らす。

同じクラス繋がりでライばかりを鼻屑していると思われるも困るか
らだ。

実際の所あまり安堵出来ない所まで株価は下がっているのだが……

「で、ライ。今日はお前に課題を出すぞ。時間はかかるだろうから
慌てずじっくりと挑め。」

「はい！」

そう言ってナガトは勿体ぶったかのように言葉を止め、ライの様子
を伺いながら続ける。

ライは強くなれるという期待に胸を膨らませ元気良く返事をする。
そんなライの様子を見てナガトは苦笑する。この最初の課題で脱落
した人間が多いからだ。

ナガトは内心、見事クリアしてくれよと願いながらライに課題を
告げた。

「多数の相手に囲まれたとき、その状況で1対1に持ち込む事……

これが課題だ。数の差はそんなまじ量の差になるからな。それを埋める方法を探せ。ちなみに後ろにはチェルシーとカレンがいるからな。その事を忘れるな。」

ライはその課題の内容に絶句する。

どうやればそんな真似が出来るのか見当もつかない課題だ。

ナガトの言を疑う訳ではないのだが、どうやればそんな真似が出来るようになるというのだ？

そんなライの表情にナガトはさもありませんといった様子で答える。

「まあ、その反応はふつーだわな。一応言っておくが、お前のレベルでも十分可能だ。頑張って創意工夫をしてみろ。」

そう言うと言くと行ってナガトは狩りへと向かう。

どうすればいいのか……ライは全く見当がつかなかった。



村にやって来てから数日、概ね村人たちからは好意的に受け入れられていた。

高レベルの冒険者であるため、幾多の高レベルの素材を手に入れる事が可能であったからだ。

また、ソルシエールも村の農作業や酪農に興味を持ったのだろう。積極的に手伝いをし、それが縁で村人とも仲良くなっていた。

今日はと言うと釣り竿を持って鮭釣りへと出かけていた。

一応、サブクラスにも＞漁師＜と言う物があるのだが、それは特殊な素材を釣りあげる時に有益な技能で鮭釣りとかにはあまり関わりの無い技能である。

技能値0でも釣る事は出来るらしいのでソルシエールも試してみようと考えた。

その考えは甘かったらしく、ソルシエールはオケラのまま帰宅の途に就いた。

鮭は竿には一匹も掛からず、水棲系のモンスターばかり襲いかかってくる始末。

苛立ち交じりに叩きつぶし、素材を蒐集したが目的の鮭は一向にからなかった。

次はもう少し良い釣り竿を手に入れてから挑戦する事にしようと考えた。

釣りに行って成果がモンスター素材というのは冒険者らしいと言うかなんというか……ナガトは絶対にからかうだろうなと考える。

そうしていると、コタンの牧場へとたどり着いた。牧場では若い大地族の青年が老人に叱られながら牛の世話をしている姿が見えた。

その様子にソルシエールは苦笑浮かべる……こういう所はどこも変わらないらしい。

向こうがこちらに気がついたらしい。手を振った為こちらも手を振ってこたえる。

ソルシエールの居る場所に近い納屋から、恰幅の良いおばさんとお腹を大きくした若い娘が出てきた。

二世帯で住んでいるのだろうなと考えながら、二人に挨拶を交わす。

「やあ、ソルシエールの嬢ちゃん。今日はどこに行っていたんだい？」

「や、そなたは元気そうだな。妾は釣りの帰りじゃ。結果は無惨なものだの。」

ため息交じりにそう話すソルシエールに恰幅の良いおばさんは豪快に笑いかける。

そのおばさんに対して若い娘は申し訳なさそうにソルシエールに頭

を下げる。

若い娘に対してそなたもおばさんを見習った方が良いぞと苦笑気味に答える。

「そりゃー不運だったね。まあ、そんな時もあるだろうさ。……ところで、少し相談したいことがあるんだけど良いかい？」

「ふむ？構わぬよ。」

「子供が出来た義娘に滋養のある物を食べさせてやりたいのだけど何か持っていないかい？」

「お、お義母さん！？そんな、失礼ですよ！？」

娘に気にするなどとも言ふ風に手をひらひらと振るとお婆さんのその言葉にソルシエールは少し考える。

少し前に狩った飛竜の肉はどうだろうと考える。滋養と言う面では、何も問題はないだろう。

ただで譲ると娘が更に恐縮しそうなので何かを対価に貰うべきかと考える。

「ああ、飛竜の肉がある。これならば文句のようが無いじゃろう。チーズ一つでどうじゃ？」

「ふふ、商談成立だね。とびきりのチーズを持ってくるから少し待ってておくれ」

「あ、……すみません。義母が無理ばかり言って」

「何、酒を飲むためのツマミが欲しかったからの。渡りに船じゃ。」

瓢箪から駒とでもいった表情でにこやかに納屋に向かうお婆さんを見ながら気にしなくて良いと若い娘に言う。

今日はワインに飛竜の血でも混ぜて呑むかなと考えつつ、呪文で凍らせた飛竜の肉の入った箱を背負い袋から取り出す。

あと一月ほどで母親になると言う。赤子に対して何か贈り物を用意

しようかと考える。

セリアに頼んで銀のスプーンを作って貰うのはどうだろうか。外国では生まれたばかりの赤ん坊に贈る風習がある所があるらしいし……そう考えていると、おばさんがチーズを持ってくる姿が見えた。

「うちの自慢のチーズさ。それが飛竜の肉かい？」

「うむ、氷が解けるのを待ってから調理をするようにな。」

「うん、気をつけるよ。ふふふっ……腕によりをかけなくちゃねえ。」

箱の蓋を開け飛竜の肉を見ながら、嬉しそうに頬を緩めるおばさん。義娘の事はダシで本人が食べたかっただけじゃないかと邪推しながら、ソルシエールは食材を交換する。

チーズを背負い袋に放り込むと、別れのあいさつをしてその場から立ち去って行く。

晩酌用の酒を求めて、村で酒を作っている家へ足を向ける。

コタンの村に来てから数日、色々行ってみたので何処に誰がいるかぐらひは把握できるようになった。

良い酒があると良いのだがと考えながら、酒造をしている家に向かって歩いてゆく。

今目指している方角から赤い皮鎧に身を包んだ暗殺者が歩いてくるのが見える。

彼の名をジライヤと言う。

紹介された時に聞いた事だが特撮モノが大好きでキャラクターもそれにちなんだものになっているそうだ。

ナガトが一発で分ったらしいので結構古い特撮のキャラクターなのだろう。

赤い頭巾に赤い皮の胴鎧、籠手も具足も赤で統一しておりアンダーに着ているクロースアーマーの色は黒。

紫電を纏い輝く刀を背負い振り回す姿は欠片も忍んでいない……そ

んな忍者だ。

ただし、信じがたい事に腕は良いらしくナガトも一目を置いていた。世界忍者同盟なるギルドの一因らしい……どのぐらいの規模のギルドなのかはソルシエールも知らなかった。

そんな彼が酒瓶を手を持っている。どうやら、酒の買い出しに行っていたらしい。

ソルシエールはジライヤに向けて片手を上げる。

「や、ジライヤ。今宵は酒盛りをする心算か？」

「奇遇でござるな、ソルシエール殿。その通りでござるよ。まあ、セリア殿の慰労も兼ねているでござるがニンニン。」

この村に滞在する唯一のギルドで大地族との交渉を一手に引き受けているらしく、ストレスはかなりの物らしい。

ナガトやジライヤは生産系に疎く、アリアは気が弱い部分がある為セリアにお鉢が回っているそう。

大地族の商人に高レベルの裁縫師、鍛冶屋の作るアイテムを売り利益を上げる。

それは割と好評であり、貴族や騎士達がこぞって依頼をしてくるようになったそう。

彼らの要望を纏めながら村長の昔のコネを使い、上手く取りまとめているそう。

「なるほど、セリアは大変そうなのう。折角の酒盛りじゃ、妾からもツマミを提供するでしょう。」

ソルシエールは背負い袋から先程貰ったチーズを取りだしてジライヤに見せる。

それをみたジライヤは目を輝かせる。この村のチーズはなかなか味が良く酒の肴には必須品となっている。

セリアにとって何よりの御馳走になるだろう。

そう考えたジライヤは一も二も無く頷き、ついでと言う事でソルシエールを酒盛りに誘う。

「ソルシエール殿も酒盛りに参加するでござるよ。ニンニン」

「うむ、楽しみにさせて貰おう。」

「で、時間でござ……」

ジライヤが時間を伝えようとしたところで言葉を止める。

少し離れた場所でスキップをしながら村の外へ向かってゆく。盗剣士くの青年の姿が見えたからだ。

彼の名をグレゴールと言う。

セリアに保護された。盗剣士くの青年で青く染めた革鎧を身に纏い一対のレイピアを使用するオーソドックスなタイプである。

大災厄の後、恐怖に負け一時期戦う事が出来なくなった冒険者の一人である。

最近、ゴブリンぐらいならば戦う事が出来るようになったらしい。

セリアが紹介した時にPKとして名を馳せているソルシエールの名前に過剰反応をした青年で一触即発の事態に発展しかけた。

ナガトの取成しとソルシエールが相手にしていなかったため事なきを得たがグレゴールとソルシエールを会わせないと言う事はコタン村の冒険者にとって暗黙の了解になっていた。

本心を言うとジライヤにとってグレゴールよりもソルシエールの方が好ましいと考えている。

少し考えて放っておく事にした。グレゴールはジライヤやナガトとも相性が悪い。

あの様子ならば今日は戻ってくるまいし、折角の酒盛りに水を差す必要もないだろう。

ジライヤとしては何処に言っているのかまで探っておきたかったのだが、セリアの頼みで止めている。

快調に向かってきたグレゴールが悪い方向へ向かったら目も当てられないかららしい。

その言葉にジライヤも了承をせざるを得なかった。

「失礼、酒盛りの準備もあるのでござるし、カラカンチのギルドハウスへ向かうでござる。ニンニン」

「うん？ まあ、よかる……妾用のツマミも要るからの」

ジライヤの言葉に首を傾げつつも了承する。

血なんかは自前に用意しなければ誰も準備してくれないだろうから……セリアの慰労会の準備を手伝う事にした。

ジライヤは上手く誤魔化した事に安堵し、グレゴールを無視してソルシエールを案内する事にした。

ライ達も狩りから戻ってくるまではしばらく掛かる。

それまでにやれる限りの準備はしておくべきだろう。

スキップで去るグレゴールにそこはかとなない嫌な予感を覚えたが、考えない事にした。

後日、ジライヤはこの時の判断を悔いることとなる。



今日になって急にナガトから本日は休暇にすると言われ、ライ達はどうしたものかと悩んでいた。

チェルシーはアリアの元へ行って＞施療神官くの『流派』について学ぶことにしたようだ。

ライはギルドハウスに閉じこもり、どうやって課題をクリアするかを考え始める。

かなり悩んでいるのだが思いつかない。ナガト曰く筋が良い奴でも

一カ月はかかるらしいので急ぐ必要はないそうだ。

だが、ライは焦ってしまう。ススキノの状況は悪化し刻一刻とエッゾ帝国の治安が悪くなって言っているからだ。

一刻も早く強くならなければならない。

そんな焦りが悪いのか普段ならば受けないようなダメージを受け、他の二人にもモンスターの目が向くようになってしまった。

日に日に動きが悪くなっているのをナガトも見かねたのだろう。

精神的にも追い詰められており、リフレッシュするための時間が必要だと判断し今日の休暇となったのだ。

ライの近くでは打ち上げられたマグロのようになったカレンがいる。不貞腐れたように寝そべりながらセリアに対する呪いを吐いている。その様子をライは溜息をついてみた。

ライがナガトに課題を与えられた日、カレンも意気揚々とセリアに『流派』の教えを請いに行ったらしい。

そして、セリアに教えて貰った流派はあまりに酷く快活なカレンですら大ダメージを受けていた。

ライとチェルシーが聞きだした所によると『召喚獣より先に死ぬな。以上』だけだったそうだ。

カレンの悲惨な現状を知ったライは難しい課題ぐらいで弱音を吐くわけにもいかず唸りながら考え込んでいた。

ちなみにカレンは半ばヤケになっていたりする。

「らーい、お酒飲もうよ、もう、ヤケだよヤケ!!」

「カレン、お前さ……今日何杯目だよ。」

「いいじゃん。お休みなんだし、ライはボクの酒が飲めないと言うの?」

据わった目でライを睨みながら無理茶利お猪口を手にしたせ、酒を注いでいく。

カレンは絡み酒だったかと内心考えながら、やむを得ず酒を飲んだ。

飲みやすい果汁酒だったらいい。飲み慣れないライでも問題なく飲めた。

ライはカレンに絡まれながら、しぶしぶお酒を飲み続けていた。



カラカンチのギルドハウスまで来たソルシエールとジライヤは首を傾げた。

窓から中を伺っているコタンの村の子供達がいたからだ。

何があったのだろうかとソルシエールは首を傾げながら子供達に声をかけてみる事にした。

「そなたら、どうしたのじゃ？」

「あー尻尾のおねーちゃん、あのねー」

「あのねー、ライたちがへんなのー」

「かれんおねーちゃんがかおをまっかにしていすとおはなししているの」

ソルシエールが子供達に声をかけると子供達はふさふさの尻尾を見ながら困ったような表情を浮かべる。

恐らく子供達はライ達に遊んで貰いに來たのだろう。

お目当てのライ達がいたのは良いが肝心のライがいたのは良いが奇行をしているようで近寄れないといったところか。

ジライヤはらちがあかないとばかりに窓の傍へ行き部屋の中を見た。ソルシエールもジライヤの肩に乗り部屋の中を見て呆れた表情を浮かべる。

「……なるほど、昼間から何をやっているでござるか。ニンニン」
「昼間から酒とは感心せぬな。」

やれやれといった表情で玄関を開けてライ達のいる部屋に向かう。
ジライヤは近場にある井戸まで言って水を用意してきたようだ。
多分、ぶっ掛けるつもりなのだろう。

その二人の後ろから村の子供達が怖いもの見たさでついて来ていた。
ジライヤはさっとドアを開けると、椅子に向かって語りかけている
カレンと床に蹲って鬱になっているライに容赦なく水を浴びせる。

「ひゃっ!？」

「おあ!？」

水を掛けられて意識がはつきりしたのだろう悲鳴を上げて部屋の中
を転がりまわっている。

その様子を見て子供達がケタケタと笑う。

その声を聞いたライとカレンは慌てて立ち上がり加害者の方を見た。
ジライヤとソルシエルは呆れた表情を浮かべて二人を見ている。

「昼間から酔いつぶれるのはいかなものかと思うでござるよ。」

「セリアが知れば一晩まるまる説教じゃな。」

「じ、じらいひやにひよひよるしえーるさん!!?」

「な、なななななな」

「おねーちゃん、へんなかおー」

「らいもへんなかおー」

真っ赤になってのたうちまわる2人にあきれ顔の2人、更に面白そ
うに笑う子供達が入り、カラカンチのリビングは急に賑やかになっ
た。

とりあえず、弁明があるなら聞くがと言われ二人はここに至るまで
の経緯を話始めた。

不貞腐れていたカレンに無理やりライが付き合わされて飲まされた

そうだ。

課題が上手く解けないと言うストレスも有り、気が付いたら深酒をしていたらしい。

話を聞いて行くうちにソルシエールとジライヤは頭を抱える事となった。

「……ナガトのおっさんからの課題、どうやってこなせば良いか見当がつかなくて。」

「それならいいよ!!ボクなんか!セリアさんに流派はって聞いたら、頑張って生き延びろってしか言われなかったんだよ!!」

「セリア殿それは……」

「……もう少しわかりやすく話してくれぬか?」

絶句したジライヤを放っておいて、ソルシエールが続けるように促すと二人はボツボツと語り始めた。

ライ曰く、複数の敵に囲まれている状況で1対1に持って行くなんてどうやればいいのか分らない。

カレン曰く、セリアに召喚術師の戦い方を教えて欲しいといったところ、召喚獣より先に死ぬのは召喚術師として恥である。召喚獣よりも後で死ぬように死力を尽くす。コレがセリアの流派と言われたと答えた。

カレンの話を聞いたソルシエールは頭を抱えた……黎明期から存在すると言われているアレがまだ生き伸び続けていた事に対してだ。継承者はおろ、脈々と受け継がれているらしい本当にしぶとい流派だとセリアは呆れかえっていた。

カレンに対してはかけてやる言葉が思い浮かばず、とりあえずライの問題から解決することにした。

「とりあえず、坊やの方から解決するでしょう。とはいっても答えを教えれば課題の意味が無くなるからの……妾はヒントを与えるこ

とぐらいしか出来ぬ。」

「え？分るのか！？」

「それなりに続けておるからの。さてとヒントを与えようかの。『今、坊やが使える特技、持っているアイテムを全て書き出すのじゃ。』」

「……それに何の意味が？」

「妾は無意味な事など言わぬ。やってみよ、その上で考えてみるが良い。坊やならそれで分るはずじゃ。」

ソルシエールは羊皮紙とペンを取りだしライに手渡す。

ライは釈然としないながらも言われたとおりに特技とアイテムを書き出してゆく。

その様子を満足げに見るソルシエール、感心した様子で頷くジライヤ、恨めしそうな様子で3人を見るカレン……

そのカレンの視線に気がついたのだらうソルシエール派閥の悪そうな表情を浮かべる。

「カレン、その流派はな……妾が知る限りにおいて黎明のころから存在すると噂されるモノなんじゃ。その、すまん。それに関しては力になってやれそうにない。」

「ジ、ジライヤさんは？」

「魔術系のソルシエール殿でどうしようもないのでござる。＞暗殺者くの拙者では無理でござるよ。ニンニン」

「そ、そんなあ……」

バタリと崩れ落ちるカレン。

どうやら力尽きたようだ反応が無くなっている。

子供達はそんなカレンの周囲を取り囲んで心配そうに見ている。

その様子にソルシエールとジライヤは苦笑を浮かべる。黙ってはいたが、それをマスターした場合、本気でしぶとくなる流派だった

する。

レギオンレイドや戦場を裸で走り抜ける変態チックな召喚術師がその昔いたのだが、ソイツの流派は正にそれだった。

裸の癖に何故か死なず、無事に戦場を走り抜ける様を何度となくソルシエールは見掛けている。

一度、話をする機会がありその時にコツでもあるのかと聞いてみたら、慣れが全てだと言う回答を貰った。

PKが徒党を組んで攻めても逃げ延びる為、そのうちPKからも相手にされなくなったと言うオチまで付いていたりする。

二つ名が『戦場のストリートキング』とか呼ばれていた真正の変態だ。

セリアは真っ当な人格を持っているので心配はいらないだろうがカレンがそっちに行かない事を知り合いとして切に願うしかない。

「まあ、良い。ジライヤよ。今宵の宴は多少人が増えた所で問題は無いであろう?」

「ん? ああ、もちろん問題ないでござるよ。まあ準備する量が増えるでござるが、そこは拙者達が骨を折れば良いだけでござるニンニン。」

ソルシエールとジライヤは苦笑しながらカレンを見ている。

子供達につつかれながら、精も魂も尽き果てたと言う表情をしているカレンを放っておくのは非常に可哀想だ。

まあ、せめて宴会で憂さを晴らしてもらおうと二人は考えたのだ。

「それと、二人とも余り子供に心配をかける真似をするで無いぞ。」

「そうでござるな。その子供達はお主達が心配で外から覗いていたでござるよ。」

ライとカレンはバツ悪そうに子供達に視線を向ける。

流石に小さな子供達に心配されるのはあまりにも不甲斐ない。

「ルリシビ、ユワレにキリ、ありがとう。今度何か埋め合わせするからな。」

「ううう……3人ともお姉ちゃんを心配してくれてありがとう。でも、ごめん。しばらく立ち直れそうにない」

二人とも素直に感謝をしたが、カレンの方はダメージが大きすぎたらしい。しばらくは立ち直れなさそうだ。

ライは羊皮紙に自分の使用できる特技とアイテムを書き出し、カレンは不貞寝を始めた。

子供達はしばらくその様子を見ていたがしばらくすると誰ともなく申し合わせたように立ち去って行った。



ここはエルダー・テイルのヨハネスブルグ『ススキノ』。

崖を転がるように転落しあつという間に悪徳の街へと堕ちた都市である。

そのススキノに銀牢寿と言う名の零細ギルドが存在している。

悪辣さならばススキノでも有数と言われるほどのギルドである。

事実、他の中規模のギルドですら彼らには一目を置いていた。

現代ならば、まず許される事のないアヘンの販売を手掛けている。

これだけであれば、他の街ならばともかくススキノではそう珍しくはない。

だが、彼らはその取扱量が他のギルドの比では無かった。

地方の領主の娘や息子を人質にとり、アヘンの生成をさせているのだ。

まだ、軌道にのっていないがコレが成功すればエッゾ帝国を裏から支配するのではと言われている。

ここは銀牢寿のギルドホール。

ギルドマスターの部屋に金糸で五本指の竜が描かれた武闘服を身に纏った大柄の男がウォッカを呷っている。

床には白目をむいたまま意識を失っている半裸の大地族の女性が転がっていた。

十分に楽しみ飽きたのだろう、武闘服を身に纏った大柄な男はそんな女性に目を向ける事もなくウォッカを呷っていた。

この大柄な男の名をエアロと言う。

大規模戦闘に参加した経験はなく、対人の経験も無かった。

ただ、彼はこの世界に来て強い力を振るう事の快樂を知った。

幾度となくその拳で新米の冒険者や大地族を殴り倒した……その圧倒的な快樂にエアロは酔い痴れた。

そして、暴力で人を脅す術を手に入れた。エルダー・テイルの世界では力があれば何でもできると言う事を知った。

故に脅し、宥めすかし、時には女を与えエアロは仲間を増やしていた。まだ、6名程の小さな集団ではあるが将来的には大規模戦闘ギルドにするつもりだ。

そんな未来へと思いを馳せつつ、エアロはウォッカを再び呷った。

ドアからノックをする音が聞こえる。新たな女のデリバ리를頼んだ覚えが無いエアロは不審に思ったが「入れ」とノックをした相手に部屋に入る許可を与えてやる。

ドアが開き、黒いフード付きのローブで体を覆った>付与魔術師<の男が室内へと入ってきた。

エアロは訝しげな表情を浮かべ黒いローブの男に声をかける。

「何の用だあ？ホロウ。てめえにやあ例の領主を説得するよう命じていた筈だぜ？」

「件の村の内通者から連絡が来た。雷鳴の魔女がコタンの村にいる

そうだ。」

ホロウと呼ばれた男は挨拶もフードを取ることもせずただ用件のみを告げた。

エアロは苛立った様子を浮かべるが、エアロの知恵が無ければこのギルドは立ち行かない事を理解していた為、それを抑え込んだ。

麻薬の確保、女の確保、どれもホロウの計画書無しでは上手くいかなかったであろう。

故にエアロも下手に出るしかない。

そう心を落ち着けてエアロはホロウが持ってきた情報を思い起こす。雷鳴の魔女とは国内外で知れ渡っている有名なPKである。

PKの癖に徒党を組まずソロで活動を行っている為PK以外からも人気がある。

また、その外見故特殊な性癖を持つ人間からも大人気らしい。

それと自分の組織との関係がエアロには理解できなかった。

「ああん？それがあどうしたってんだあ？」

「ああ、気づくように話してやるべきだったな。『雷鳴の魔女を手に入れないのか？』と聞いているのだ。」

「……ほお」

エアロはホロウの発言に激しい怒りを覚えたが提案の内容を聞いて頭が冷えた。

雷鳴の魔女を手に入ればススキノでの銀牢寿の発言力が増す事に気がついたからだ。

エアロは粘つくような笑みを浮かべ、涎を垂らさんばかりの表情を浮かべる。

雷鳴の魔女と言っても所詮は女、無理矢理にでも快楽を教え込めば、虜にする事などたやすいエアロはそう考えた。

あの雷鳴の魔女を組み伏せ犯す……その妄想だけでエアロは達して

しまいそうだった。

「ああ、良いじゃねえか。最高だぜ！ホロウよう」

「ふむ、では誰を派遣するかね？」

「あーそーそーだな。ブラッドとジーンの野郎でいいんじゃないか？」

皮算用を始めたエアロに対してホロウは冷笑を浮かべる。

あの魔女にチンピラっを二人送り込んだところでどうこうする事など出来ないだろう。

そんなことも理解できないエアロの事がホロウは滑稽でならない。

とりあえずは言われたとおりに手配すればよいと考えた。

コレで終わるはずもないのだから……そういえばとくだらない用事を一つ思い出した。

思い出した以上済ませておくにこした事は無いだろうとホロウは考える。

「エアロよ。内通者への報酬はどうする？」

「あん？そうだなあ……雷鳴の魔女の事を知らせてくれたんだ奮発してやりゃいいさ。そーいや前に捕まえた貴族の女いたろ？ほんと壊しちゃったと思うが1人だけ結局壊れなかったタフな奴がいただろ？アイツくれちまえよ。おらぁもう飽きたしよ。お下がりでことで良いんじゃない？」

何かがツボに入ったらしいエアロはゲラゲラゲラと大口をあけて笑いだす。

思い出したかのようにウォッカを呷りながらゲラゲラと笑い、一通り笑い終わるとホロウに手配するように命じた。

ホロウは頷き、用件は済んだとばかりにエアロを無視してドアを開けて部屋を出て行った。

内通者への報酬はアランに運ばせるべきだろう。

ブラッドやジーンでは途中で駄目になってしまう可能性が高過ぎる。ついでにアランに村の様子を探らせても良いだろうブラッドとジーンの報告では正確性が欠けるからだ。

それに、あの二人では噛ませ犬にもなるまいとホロウは考えている。ホロウは一冊の本を取りだした。

ゆっくりとページを開きながらススキノで起きた事件に対して思いを馳せる。

ススキノの冒険者が狂っていく様、冒険者達に襲われた大地族の女が壊れて行く様は人の心が理解できないと自称するホロウにすらその有様や心の動きが理解出来た。

他人の心の動きが理解出来ると言う事はホロウにとってこの上の無い娯楽であった。

過去にこのように心の動きが見えた事が無い訳ではない。

特に放蕩者の茶会のメンバー、狂戦士クラスティ、……雷鳴の魔女ソルシエール。

彼らの持つ激しい感情は別格であった。

放蕩者の茶会のあの女の持つ眩さ、シロエの持つ不可能を解きほぐし理解する精神、クラスティが持つ戦場での闘志、ソルシエールの大規模戦闘ギルドを襲撃する狂気。

それらを眺める事が彼にとってこの上ない娯楽であり、愉悦であった。

ススキノの狂乱も楽しくはあるが、そろそろ飽きが来たころだ。別の対象を観察するべきであろう。

久方ぶりの雷鳴の魔女、是非とも彼女の狂気を再び見てみたいものだ。とホロウは思った。

クスリも女もホロウ一人いれば問題ない。むしろエアロ達はもはや切り捨てべきであろう。

このギルドに関わった人間を全て生贄としてささげても構うまい。彼らには十分尽くしてやってきたそろそろ自分が享楽を追及しても

良いころだろう。

そう考えホロウはウォッカで祝杯をあげる事に決めた。
久方ぶりに美味しい酒が飲めそうだとホロウは思った。

02 (後書き)

駄文ですがご容赦を

ここはコタン村より馬で半日ほどのところにある村。

今はもうこの村に住む者はいない。

風雨に曝されても消えぬ血痕、焼け出された家屋、所々に打ち捨てられた人骨がかつて村でどのような惨劇があったのかを伝えていた。この村ではススキノの冒険者たちによって若い娘達が攫われ逆らう大地族は殺されていった。

村の男達が一致団結して刃向うも高レベルの冒険者の前に手も足も出ず殲殺しにされた。

生き残った村人達は村から逃げ出し、やがて村には誰もいなくなつた。

ここはそうやって生まれた廃墟の村。

〈大災厄〉後冒険者が引き起こした罪を端的に表した場所である。

エッゾ帝国の過酷な現状の縮図とも言えた。

故にここには他の村の大地族も商人も冒険者達も近寄らない。

エルダー・テイルに潜む悪意をいやがおうにも再確認させられるためである。

その誰も近寄らない筈の村に一人の男がたたずんでいた。

黒の燕尾服を身に纏い銀髪を短く整えた俗に言う執事風の衣装を身に纏っていた。

この青年をアランと言う。

メインクラスは〈暗殺者〉サブクラスに〈執事〉。

ナイフを使用した戦闘を得意としており近しいものからは『戦う執事―Battle Butler―』などと呼ばれていた。

周囲の建物にべつとりと付いた血痕、焼かれた建物、来る者を拒むような村の雰囲気の中、彼は顔色一つ変える事は無い。

普通の神経をしているものであれば、村にこびり付いた怨念に近寄

ろうとする者は居ないであろう。

彼はこの廃村でカラカンチの内通者を待っていた。

銀牢寿の連中と同じ穴のムジナである内通者は非常に時間にルーズな性格であるらしい。

約束の刻限はとうの昔に過ぎており、既に太陽は真上まで昇っていた。

だが、彼はその事に欠片の苛立ちやなにがしかの感情を浮かべる事も無かった。

やがて太陽は西へ傾き始めたころようやく内通者が到着した。

内通者は尊大な表情を浮かべてアランを見下し悪びれる様子も無い。それはいつもの事なのだろう。アランは気に留める様子も無く内通者を出迎える。

「お待ちしておりました。グレゴール様」

「ああ、御苦労。執事……僕も忙しい身でね。まあ、君なんぞには理解できないだろうがね。」

粘つくような笑みを浮かべ見下した挨拶を返す。

既に慣れたのだろうか、それとも鈍感なのか村に漂う怨嗟も気にとめた様子が無い。

むしろ、どこかご機嫌な様子で村の中を見回していた。

一通り村を眺めた後、世の中の全てを舐め腐ったような濁った目で死者の霊を馬鹿にするように口を開いた。

「ははっ、ここは良いところだね。踏み潰された屑蟻共の嫉みや怨嗟はいつ聞いても気分が良い。そう思うだろう？ 執事」

「私には分りかねます。」

「ふうん、まあ君程度じゃ仕方ないか。」

口元を歪め嘲笑する。

大地族の無念を笑い、それに罪悪感を覚える冒険者を笑い、そして、偽善者の集まりであるカラカンチの連中を笑う。

グレゴールは救いようが無いほど墮落していた。

この場にナガトやジライヤがいれば問答無用で斬り殺していただろう。

セリアですら更生を諦めたかもしれない……

だが、ここには誰もおらずいるのは彼と銀牢寿の下僕であるアランだけだ。

故にグレゴールは日頃の鬱憤を晴らすかのようにカラカンチをあげつらい嘲笑する。

裏切りに気がつかない間抜けなギルドマスター、間抜けな〈守護戦士〉そして間抜けな〈暗殺者〉……そして、自分に莫大な富をもたらすであろうロリ吸血鬼を嘲笑う。

アランは顔色一つ変えることなくその様子を見ていた。

グレゴールはセリアの思いを踏みにじる事に快楽を覚えていた。

何れは、アリアとセリアの2人を組み伏せて犯してやりたいと考えていた。

「ああ、そういやロリ吸血鬼の捕獲に誰を向かわせたんだい？」

「ブラッド様とジーン様が向かいました。」

「へえ……ジーンさんは狂喜しているだろうねえ。あの人ペドだし……まあ、お前みたいなのはパシリ程度がせいぜいだよなあ」

アランがロリ吸血鬼の捕獲に向かわなかった事を嘲笑する。

日本サーバーでもそこそこの名の通った〈暗殺者〉を使い走りにする。それはグレゴールにとって痛快であった。

今まで相手にもされなかったような相手に命令を下せるのだグレゴールの虚栄心を満足させない筈が無い。

銀牢寿はカラカンチよりもグレゴールを評価している。

そう、グレゴールはスカウトされ欲せられる立場なのだ……カラカ

ンチ如きにいて良い男では無い。

手土産にカラカンチを受け渡す事などグレゴールにとっては当たり前前の事であった。

ふと、アランへと視線を向けてみると、グレゴールの態度に卑屈になるわけでもなくポーカーフェイスを保ち続けている。

グレゴールは気に食わなかった。自分のような偉大な人物にアラン如きがとっていい態度では無いと考えた。

「……お前、生意気なんだよ。」

グレゴールは拳を振り上げるとあらんかぎりの力を込めて殴り飛ばした。

突如の凶行にアランは殴り倒され地面に倒れ込む。

「もっと！ 敬え！ 貴様如きが！！ 口をきくことすら！！ 光荣な！！ 事なんだぞ！！！」

地面に倒れ込んだアランを何度も何度もグレゴールは踏みつける。

そして落ち着いたのかグレゴールは踏みつけるのを止める。

少しは懲りて自分の偉大さを思い知ったであろうとグレゴールは考えた。

故に怯えている筈のアランを嘲笑ってやろうと顔を向けたグレゴールの表情が凍りついた。

無表情のアランから発せられる威圧感にグレゴールの矮小な心を恐怖に染め上げた。

怯えて顔を逸らすと、残っていた虚栄心を総動員して息を詰まらせながら

「こ、今回はコレで済ませてやる。次はな、無いからな！！！」

「ありがとうございます。アラン様」

作法に適った言葉と礼なのにもかかわらず、グレゴールはアランの言葉に強い恐怖を覚えた。

このままではメッキがはげてしまう……グレゴールは悲鳴を上げるようにアランに命じる。

「さっさと僕への報酬をよこせ!!」

「……分りました。ホロウ様よりお預かりしたグレゴール様へ報酬はこちらの納屋に納めております。ご確認を」

そういうとアランは自分の背後にある納屋のドアを指示した。

廃墟と化した村の中でこの納屋だけが小奇麗に清掃されていた。

銀牢寿のコタンへ攻め込むための拠点として使われているのだろう。昨日今日、掃除をして体裁を整えただけと言う雰囲気ではなかった。グレゴールは気を取り直し納屋へと向かう。

……古来から女の世話をして相手に言う事を聞かせるという交渉術は存在する。

典型例に引っ掛かっているグレゴールは銀牢寿から与えられる報酬に溺れていた。

「ふうん、田舎くさい村娘は飽きたんだけどなあ……」

そんな事を呟きながらグレゴールは夢中病者のような足取りで納屋に近づきドアを開いた。

そして、グレゴールは中にいる報酬を見て息を飲んだ。

鎖に縛められた麗しく気品のある少女がそこにいたからだ。

透き通るような白い肌と日蔭の中でうっすらと輝くブロンドの髪、深い海のように美しい碧眼は憂いと絶望に染まっていた。

それでも凜とした様子を崩さないのは貴族の女としての最後の矜持か。

そんな報酬を見てグレゴールは唾を飲み込んだ。
今までとは比べ物にならないほどの破格の報酬。
コレに比べれば今までの女など塵芥にも等しい。

カラカンチを裏切り、銀牢寿について良かった今までの苦勞が報われた気分になった。

この娘を今から時間をかけて蹂躪し、最後の矜持を己が折るのだ……その征服欲にグレゴールの獣性はいやがおうにも高まっていった。

「最高だ、最高だよ！！今後が良い付き合いがしたいとホロウさんに伝えておいてくれよ。」

そう言うときグレゴールはアランの事などすっかりと忘れ大急ぎで納屋に入りドアを閉じた。

納屋の内部より漏れてくる悲鳴にアランは歯を食いしばり、拳を強く握りしめた。

外道の行いをしていると否応なく自覚させられる、アランにとって先程の拳などよりこちらの方が遥かに辛い。

感情を押し殺し表情を消す。

今のアランには私情で動いている暇は無い。

ブラッドとジーンがコタンの村にやってくる前に彼らの様子を観察するための準備をしなければならぬのだから。

一度納屋を振り返り、忌まわしいその場所を自分の脳裏に焼き付ける為に睨み据えた。

「……お嬢様に会わせる顔がありませんね。」

思わず漏らした呟きに自嘲を浮かべながらアランは駆けだした。

奇しくもそれはまるで納屋から逃げ出しているようにも見て取れた。それから半日、納屋から悲鳴が途絶える事は無かった。



コタン村の南の外れ、〈緑小鬼ーゴブリン〉の生息ポイント。

レベル的にはライ達より少し低めではあるがまだ十分レベルが上がる領域にいる。

ナガトがライ達を鍛え上げるのに頻繁に使用している狩り場だ。

エッゾ帝国では狩りに出る者は少なく狩り場がぶつかるとはほとんどなかった。

故に他人を気にすることなく時間をかけ狩りの方法を学習させることができた。

現在ナガトは師範システムを使用し、ライ達の戦いぶりを見守っている。

ライ達のが手に負えないと判断しない限り基本的にナガトが手を出す事は無い。

ナガトに見守られながら、ライ達はゴブリン4体を相手に奮戦していた。

その様子を見ながらナガトは楽しげな笑みを浮かべていた。

「男児3日合わざればなんとらと言うが……ライの野郎、気がついたようだな。」

そのナガトの言葉を肯定するかのようにライの動きは先日までとはガラリと変わっていた。

〈アンカーハウル〉により敵が背後に行く事を阻止する……これは敵が自分の背後に回る事を阻止する事にもなる。

以前であればここから先は闇雲に剣を振るい囲まれる前に仕留めようと賭けに出るか、フットワークを使って敵から逃れようとするかの二者択一であった。

無論、その程度でモンスターの攻撃から逃れる事は出来る筈も無く、逆に深手を負う始末であった。

しかし、今のライは、前方3方位から攻め込んでくるゴブリンに麻痺効果のある特技で動きを封じ自分の前にいるゴブリン達の動きを止める。

攻撃したら麻痺が解けるため、麻痺の効果時間が残り少ない個体から順にカレンと協力し叩きつぶして行く。

チェルシーはタイミング良く回復呪文を唱え、致命的な事態が発生するのを阻止する。

前衛がダメージをあまり受けていない事が後衛2人の余裕を作り、その余裕を使ってゴブリン達を効率よく仕留めて行く。

ナガトの流派の基本的な戦い方であり、コレが出来るのと出来ないのでは生存率が段違いに違ってくるのだ。

そして、このやり方は現在の主流のやり方では無い。

今の主流は麻痺や毒といったステータス異常を与えるのに労力がかかるのであれば、その分を使って少しでも多く相手にダメージを与えるべきだという考え方が主流である。

何故ならばモンスターは基本的にヒットポイントが多く、倒すまでに時間がかかってしまい効率的では無いとされているからだ。

故に麻痺攻撃の特技を使えば通好みとか効率が悪いと言う目で見られる事が多い。

だが、上手く使えば御覧の通り複数の敵がいても余裕を持って回す事が出来る。

追記しておく、戦士職には武士のへはやにえーラニアスカップチャーに代表される麻痺を与える特技は幾つか存在している。

だが、それを戦術に組み込む者は少ない。理由は上記の通りである。ライの戦術を理解し、それに合わせるチェルシーとカレンの行動も機敏だ。

パーティーとして無駄のない行動をしている。

このペースで上達して行けば、一人前になるのもそう遠い未来では

ないだろうと予測させる。

そういった生徒たちの上達ぶりを見ると嬉しくなった。

コレが終わったら、今日の訓練は終了して鹿狩りをするのも良いだろう。

最初にして最大の難関を越えたライへの祝いだ。

カレンの召喚獣があれば村で宴会をする分ぐらいは確保できるだろうと考えた。

自分がクリアした時の事を思い出し、ナガトは目を細めた。

そうこうしている間にゴブリンの数は減って行き、カレンのサラマ
ンダーが最後の一匹を焼き払い、戦闘は終了した。

ライは手ごたえを感じたのか剣を強く握りしめ歓喜の表情を浮かべている。

ナガトはそんな生徒達の元に歩いてゆく。

ライ達もそれに気がついたのだろうナガトに向かって大声で喋りかけた。

「ナガトのおっさん、これだったんだな!!」

「おっさんは余計だ。ああ、正解だ……よくやったな、ライ。」

その言葉にチェルシーとカレンの表情がほころんだ。

ライの苦勞が分っていたのだろうふたりとも我が事のように喜んでいる。

2人がライの周りにやってきてハイタッチをする。

3人とも苦しんでいたのだろう。それが解放されたカタルシスによって少々ハイになっているようだ。

「無事、課題を解決できましたね。ライ、おめでとうございます。」

「おめでとー、一緒に悩んだボクも鼻高々だよ。」

カレンなどはライに抱きついている。

それに目くじらを立てるチェルシー、ライはカレンの行動に顔を真っ赤にして大慌てしていた。

その様子にナガトは苦笑を浮かべる。

ライの頭を軽く2、3回叩いた後、手荒く頭を撫でる。

ナガト流の頭の撫で方で割とやられる方は迷惑だったりする。

だが、今回ばかりはライは嫌がる様子も無く頭を撫でられていた。

「しかし、この短期間で良く気がついたもんだ。」

「……ソルシエールさんに使える特技とアイテムを書き出してみろってヒントを貰わなければ、まだ気が付かなかったよ。」

最短記録だといったナガトの言葉にライがヒントを貰ったんだとバツ悪げに答えた。

そのヒントの的確さにナガトは己に対して歯がゆさを感じた。

本来ならば、その言葉は狩りの最中に悩んでいたライに対してナガトが言うべきであった。

そのヒントは自分の役目であったが、気づいてやる事の出来なかった不甲斐ないナガトの代わりにソルシエール教えたのだろう……本人がそこまで考えたかは別にして。

つくづく自分は人にモノを教えるのに向いていないと自覚させられた。

「ツたく、アイツめ。……わりいな、ライ。そのヒントは俺が言つてやるべきだった。」

「へ？」

ナガトの言葉の意味が理解できず首を傾げるライ。

そんなライの様子に苦笑しつつナガトは言葉が続ける。

普段なら言わないのだが、こうも鮮やかにやられるとナガトも愚痴を言いたくなる。

「ああ、いや……こうな、人にモノを教えるのは柄じゃねえと改めて思っただけさ。」

「……ナガトさん、そんな事はないんじゃないかな。」

「おう？」

珍しくナガトに慰める言葉を駆けるカレン。

いつもなら追い打ちをかける筈なのだが今日は様子がおかしい。ナガトも驚いたようにカレンに視線を向ける。

「……セリアさんみたいにそもそも教える事が『生き延びれ』だけよりはずっとマシだと思うんだよ!!」

「おいおい……」

「色々と台無しですよ……カレン」

大声で絶叫するカレンにナガトは毒気を抜かれてしまった。

どうやら、教師としてはマシな部類に当たるらしい。

セリアには悪いが、それで自信を取り戻させて貰おうとナガトは考えた。

ライは苦笑し、チェルシーは手で額を押さえて溜息をつく。

カレンはトラウマになっているのだろう未だに叫び声をあげていた。

ライはそんな空気を変えようと無理矢理話題をひねりだす。

「お、おっさん、今日の訓練の続きはまだ始めないのか？」

「ああ、そーだな。今日はここで中止だ……残りの時間は鹿狩りをするぞ。ライが課題をクリアーした記念に宴会をひらかねえとな。」

「そんなこと言って、まーた、お酒が飲みたいだけでしょ？」

「コタンの皆さんも誘うんですか？」

「喧しい。……ああ、無論誘うさ。ちいとばっかし多めに狩るぞ。」

カレン、荷を運べる奴を召喚しておいてくれ。」

「りよーかい。ならへ魔狂狼ーダイヤウルフ」を呼んどくね。」

ぶーたれたようにナガトに文句を言いつつもカレンはダイヤウルフを召喚する。

ダイヤウルフは野生のものと変わらない程度の強さがあり、低レベルの召喚術師の相伴として良く使われる召喚獣だ。

ナガトは宴会を開くときは必ずコタンの村人を巻き込むようにしている。

本人曰く冒険者が大地族に受け入れられるようにだそうだが、飲み比べをして大地族の酒を飲みほしている姿を見ると酒を巻き上げるためではないかと邪推したくなる。

だが、チェルシーにとってそれは喜ばしい事であり、是非とも村人達と一緒に宴を開きたいと思っていた。

ライやカレンはそこまで深く考えてはいないがギルドだけよりも村人達を巻き込んだ方が楽しいのでナガトの方針に賛成している。

ライは気合を入れて剣を抜き、振るうと得意げに笑って肩に担ぐ。

「まっ、祭りの準備は言いだしっぺがやるもんだよな。」

笑いながら召喚笛を取りだすと吹き鳴らしウマを召喚する。

チェルシーやナガトも理由を察しウマを呼びだした。

「ウマ3頭にダイヤウルフが要れば十分な数を運ぶ事が出来ますね。」

「だな。冴えてるじゃねえか、ライ。明日知恵熱出してぶっ倒れるなよ。」

「あははは、最近頭使いすぎているからねーほんと、明日ぐらい知恵熱で倒れそーだよ。」

「やかましい、コレぐらいで知恵熱出して倒れるもんか!!」

「ライ、安心してください。知恵熱で倒れても私がお世話しますか

ら。」

「倒れる事前提！？」

ナガトやカレンのからかい交じりの言葉、チエルシーの的外れのフオローにライは嘆きつつ鹿の生息ポイントに足を向ける。

まーた夫婦漫才始まったよ。と言うカレンの言葉は無視する。その理不尽に対する怒りは鹿にぶつけられれば良い。

今日は誰よりも多く鹿を狩る事を決意した。鹿も災難である。



同時刻、コタン村。

ライ達が訓練に精を出している中、裁縫師アリアから連絡を受けたソルシエールは工房兼ギルドハウスへとやってきていた。

替えの服が無いと言うのは女性であるソルシエールにとってかなり辛い状況だった。

それも今日で終わると考えると少しばかり浮かれてしまう。

サイズの微調整のため一日開けて欲しいと言われた為、今日は予定を入れては居ない。

予定であればオケラだった鮭釣りに再挑戦するつもりであったが、そんなことは既に忘れ去っていた。

コンコンとノックをすると中から返事と共にドアが開かれる。

中からは非常に上機嫌なアリアが出迎えた。

その表情を見てソルシエールの経験が警鐘を促すが、浮かれている本人はそれに気がつかない。

「いらっしやいませ、ソルシエールちゃん。ふふふ、腕によりをかけて作っただんですの。きつと気に入られると思いますわ。」

「こんにちは、アリア……妾も今日の日を楽しみにしておったぞ。」

上品な仕種で迎え入れるアリアだが、言葉や行動の端々にあらわれる不吉なモノが滲み出ていた。

それに気が気づかないソルシエールは満面の笑顔でアリアのに答える。

その笑顔にアリアは悶えながらソルシエールの手を取り、機嫌良く鼻歌を歌いながら奥の作業場へと招き入れる。

アリアは、パチンコのイラストレーターをやっていたらしい。

いわゆる版權モノのイラストだ。たまにパチンコ屋オリジナルの作品に関わったりもしていたようだ。

その為、最新のファッションから洋の東西問わぬ鎧や服のデザインに関してはどうもさうだ。

それが原因なのかカラカンチの作った鎧や服はエッゾ帝国の貴族に密かな人気を集めているらしい。

戦う事こそできないが、超売れっ子デザイナーになったアリアの発言権はカラカンチの中でも多大なモノがある。

とはいえ、常識人であるアリアはそれを悪用や乱用することは一度も無く、その人あたりの良い性格はコタンの村でも人気があった。

だが、アリアにとって悪癖の一つや二つはある。

その一つが『無類の可愛い物好き』と言う事だ。

ソルシエールなどはストライクと真ん中らしい……村で一度見かけたときからレンタルしたくてウズウズしていたそうだ。

セリアはそんな二人の後姿を見て合掌していた。

どうやら、ギルドマスターでも今のアリアを止める事は出来ないようだ。

セリアは奥の部屋のドアを開くとソルシエールを自分の工房へ招き入れた。

「こちらが私の工房ですわ。」

「失礼する。……ほう、流石じゃな。」

アリアの工房は可愛いぬいぐるみやファンシーな絨毯、カーテンで統一されていた。

実際仕事に使用する作業台や椅子も可能な限り可愛らしく装飾していた。

こういった、可愛い女の子の部屋はソルシエールも割と好きなので楽しみに部屋を見回していた。

そんなソルシエールの身悶えしながら眺めていたアリアは誰にも邪魔されぬようドアの鍵を閉めた。

その音は部屋中に響き渡り驚いたソルシエールが振り返ると満面の笑みを浮かべたアリアと目があった。

そこに至って浮かれていたソルシエールは不吉な予感を自覚した。

「アリアよ。何故にドアの鍵を閉めるのじゃ？」

「ふふふ、企業秘密を護るためですわ。それに邪魔が入ると面倒ですし……」

にこやかな笑みを浮かべるアリア、言っている事は筋が通っているのは前半だけだ。

後半の内容となによりも表情がそれを裏切っている。

引き攣った表情を浮かべるソルシエールにアリアは気にした様子も無く、新調したらしい衣装ダンスに手をかけてそれを開く。

衣装ダンスの中には、イブニングドレス、ゴスロリのドレス、蝶柄の着物、エッゾ帝国の民族衣装、カジュアルな革鎧etcetc……どれもこれも、ソルシエールに合うサイズのモノばかり並べてあった。

「ふふふ……衣装はたっぷりありますわ。ソルシエールちゃん。」

目が少しばかり血走っており、夜に見たら子供が逃げ出す事請け合
いである。

ここに至り、ソルシエールはアリアの性癖に気がついた。

『無類の可愛い物好き』、確かに女性であるソルシエールにも理解
できる感情だ。

可愛い子には可愛い恰好をさせたい。女性の根幹を指す欲求の一つ
である。

だが、ソルシエールは他人に可愛い恰好をさせるのは好きでも自
分でするのは好きと言う訳ではない。

「ア、アリア血迷うな落ち着くのじゃ。」

「ふふふっ……大丈夫よ。貴方みたいな可愛いらしい子が要るんで
すもの私の心は噴火し続ける火山ように落ち着いているわ。」

「そのどこが落ち着いているのじゃ!! 妾は普通の服で……」

「そんな、可愛くない服なんて!!」

作業台を力いっぱい叩き、血走った目をソルシエールに向ける。

その目からはそんな事は許しません。許せませんと力いっぱい語ら
れていた。

可愛い子には可愛い服を着るべきなんですとアリアが力説し
始める。

そんなアリアの力説に相槌を打ちながら、ソルシエールは抵抗の余
地なしかと諦めの境地へと入り始めた。

鍵がかけられた以上逃げる事も出来やしない。

この事を知っていて言わなかったであろうセリアに内心呪いの言葉
を吐く。

そして、作業台に並べられていく服を見ながら

「……コレが妾の服なのじゃな。」

「ええ、そうですよ。ソルシエールちゃん、とっても可愛いしいん

ですもの。もう、きゅんきゅんってアイデアが浮かびましたの。」

「きゅんきゅんってどんな擬音語じゃ……」

「こちらが下着ですわ。」

そういつて、アリアが作業台の上に載せた下着はレースの下着やガーターベルト、コルセットetcetc……色もバラエティに富んでおり、黒や紫、赤や白、よりどりみどりであった。

それを見せながら鼻息荒く迫るアリアの姿は子供が見れば泣いて逃げ出し、100年の恋も冷める事請け合いである。

やはり、ここは逃げるべきではないかとソルシエールは考えを改め、逃げ場を探す。

だが、ソルシエールは知らなかった。

カラカンチの不文律というか呪いと言うべきか……大魔王モードのアリアからは誰も逃げ出せないと言う事を

アリアは華奢な腕でソルシエールを捕まえる。

腕の細さと一致しない異常なまでに強い力で腕を握りしめられる。

動かそうにも万力に締めつけられたようでびくともしない。

表情を引き攣らせながら、ソルシエールはアリアを見上げる。

とても優しい笑みを浮かべている筈の彼女はまるで般若のように見えた。

ソルシエールは冷や汗を垂らしながらアリアに訴える。

「待つのじゃ、アリアよ。何故、妾を捕まえておく必要があるのじゃ!!!」

「だって、ソルシエールちゃんが逃げちゃうじゃないですか。こんなに素敵な素材絶対に逃がしません。」

「素材ってなんじゃ!!!」

「ふふふ、言葉の綾です。さーあ、お着替えしましょうねえ。時間はたっぷりありますよお」

「待て、待つのじゃ……誰かああああああ!!!」

村中にソルシエールの助けを呼ぶ悲鳴が響き渡った。
それを聞いた村の衆は誰とも言わずに合掌をしたそうだ。
大魔王モードのアリアに逆らう事の出来る村人も存在しないのだ。



日が傾くまでアリアの着せ替え人形になっていたソルシエールはぐったりとしていた。
様々な服をとっかえ引っ返して、色々と試したアリアは満足気だったそうだ。

現在来ているのは蝶柄の着物である。

制作者としてはもう少し冒険してみたかったらしいが、アンティークドールのようなソルシエールでそれをやると下品になりかねないので止めたらしい。

保守的な蝶柄の着物は金髪紅眼のソルシエールが着るとミステリアスな雰囲気醸し出していた。

現在、ソルシエールは村の広場へと向かっていた。

何でもライ達が鹿を大量に狩って来たため、それを使って宴会を開く事になったそうだ。

相当な量を狩って来たらしく、余らすよりはと村人達が皆集めることにしたらしい。

一部は保存食として冬の時期に備えるために取っておくのだろうが、内臓といった痛みやすい部位はその日のうちに食さねば駄目になってしまう。

駄目にするぐらいならば皆で一斉に食べてしまおうと言うのがこの宴会をする事になった建前である。

日々悪化していくエッゾ帝国の治安、大地族はそれに対する不安に

日々苛まされている。

ススキノに対する恐れ、暴虐を振るう冒険者に対する恐れ、それらがいつの間にか全ての冒険者に変わりつつある為に発生する不安。エッゾ帝国に置いて冒険者は既に恐怖するべき対象へと変わりつつあった。

それらの恐怖や不安に対するガス抜きと言うのが村長側の本音である。

美味しい肉を食い、酒を飲み、騒ぐことによって不安を紛らわし明日への活力を得る。

強い不安の中に生きるエッゾ帝国に生きる大地族にとっては必要なことであった。

宴会は既に始まっているようだ。鹿肉を調理し、酒瓶を女衆が運んでいる姿、酒を飲み肉を食らう男衆の姿があった。

変わった衣装を身に纏っているソルシエールを見て男衆は口笛を吹き、女衆は羨ましげに服を見ていた。

日に焼けた逞しい身体を持つ頭髪が寂しくなった老人がソルシエールに声をかける。

「よう、吸血鬼の嬢ちゃん。えらくめんこい恰好しているじゃねえか。うちの力カアのわけー頃思いつすじゃねえか。」

「誉め言葉と取らせて貰うよ、御老体。じゃが、妾と似ておるとなるとどれだけ年下の娘と結婚した？」

「はっはっは、そりゃあ……ゴホ、ゴホゴホ、ああ、つと、そういや嬢ちゃん鮭釣りに行ってオケラで帰って来たそうじゃねえか。」

ロリコンだったらしい老人は強引に話題をすり替えようとする。

その様子にソルシエールは苦笑し載ってやることにした。

ただ、からかうだけのつもりならば話題を強引に戻して嫁さんとの出会いから問い詰めてやるつもりであったが……

「……釣りのセンスには恵まれなかったようじゃ。」

「センスとかそんな問題じゃねえさ。嬢ちゃんは時間帯が悪いのよ。日が昇ってからじゃあ遅すぎる。鮭釣りは夜明け前に行くもんだぜ?」

「むう……」

「今度、わっしが連れて行ってやるよ。入れ食いって奴を体験させてやらあ」

「なんと、その時を楽しみにさせて貰うぞ、御老体。」

「わっしはオベリクンと言うのよ。吸血鬼の嬢ちゃん、御老体ってなあ勘弁してくれ。」

「了承したよ、オベリクン。妾はソルシエールじゃ。」

老人とロリ吸血鬼は名前を交換する。

ロリコンだったらしい老人は満足気に笑う。

ソルシエールは前回敗北した鮭釣りの再戦に意欲を燃やしていた。後、追及はしない事にしたらしい。

それではとオベリクンに断りを入れ、ソルシエールは別の場所へと向かう。

他の冒険者たちは何処にいるかと見回すと、ジライヤは子供達に捕まってニンジュツを披露していた。

正確には忍術の振りをした特技なのだけれども、子供達はそれでも十分とばかりに楽しんでた。

子供好きらしいジライヤは調子に乗って色々と見せているようだ。

ナガトはと言うと村の男衆をかき集めて飲み比べをしていた。

牧場の倅が勝負を挑みさっくりと敗れて皆から失笑を買っていた。それを見た牧場の倅の嫁は苦笑を浮かべ、適当なスペースまで引張って行き休ませてやる。

情けない奴めと牧場の主が仇打ちとばかりに勝負を挑み、男衆が待ってましたとばかりに喝采を上げる。

そんな男衆を女衆と一緒にいたセリアとアリアは呆れた様子で見て

いた。

ライ達は同世代の人間に囲まれて話をしていた。ただし、少女達とチェルシーはソルシエールの方を見ながらカレンの話を聞いていた。

どうもアリアが作ったソルシエールの着物に興味津々であり、それについて色々と聞いているようだ。

皆、口々に「アリアさんの新作かしら……」「良いな」「私も着てみたいなあ……」と羨ましそうに呟いていた。

ようやく、ソルシエールに気がついたらしいセリアは手を振って呼び掛けた。

それに手を振って応え、ソルシエールはセリアの元へ向かう。

セリアもソルシエールの着物に興味が沸いたのだろう。

観察するかにように着物を見ていた。

「……へえ、蝶柄の着物ねえ。アリアったら保守的なのを選んだわね。でも、ソルシエールさんが着るとミステリアスな感じね。良く似合っているわ。」

「ええ、もうちょっと冒険をしてみたかったですけど……ソルシエールちゃんの髪の色と瞳の色を考えるとうるさくなりそうだから止めましたわ」

「妾にしてみれば着物を着る事自体冒険じゃ。」

そう言ってソルシエールがセリア達と批評し合っていると、周りのおばちゃん達も興味が沸いたのか集まってきた。

ソルシエールの着物をまじまじと見つめ、一言断ってから袖の布地に触れる。

牧場のおばちゃんなどは女衆の代表格のよう率先する形で布地や帯をまじまじと見る。

そして、興味深そうに何度も見ながら若いころにこんなのがあればと愚痴り始めた。

「へえ、着物っていうのねえ。……若い頃にこんなのがあればねえ」
「でも、漁師や農夫、牧場の嫁じゃ無理さあ。」

「貴族様方が付けているドレスとは感じが違うけど……コレはコレで良いものねえ。」

アリアの新作は村の女衆にとって憧れの対象らしい。

とてもじゃないが買う事は出来ないのが残念ではあるが……

娘の晴れ舞台に着せてやりたいとか晴れ舞台に着てみたいと口々に話あっていた。

ソルシエールは村の女衆に好きにさせながらセリアに聞いてみたい事があったのを思い出した。

「セリアよ。今宵のような宴会は何度か行われておるのか？」

「ええ、狩りで大量だったりした時はやっているわね。これで3度目ぐらいかしら？」

「ええ、そうなりますね。でも、前回からは結構間が空いていますよね。最近は冬に備えて食料を貯蓄しないといけませんでしたし……」

「そうね。それが、一段落ついたから宴会をするという事になったのでしょね。」

「そうか。……しかし、不思議じゃ。」

そう言うソルシエールは宴会に集まった大地族と冒険者達を見回した。

ここしばらくの滞在で大地族はNPCなどではなくちゃんとした人間であると理解したつもりだった。

だが、そんなソルシエールの目から見ても冒険者と交じり宴を開く姿は自身の認識を疑いたくなるような光景であった。

そして、改めて未だ大地族がNPCと言う風に見ていた自分がいた

事に気が付き苦笑いを浮かべた。

カラカンチのメンバーやナガト、ジライヤの方がこういう方面では一日の長があるようだ。

そのソルシエールの言葉を聞いたセリア達や周囲にいた大地族の女性も苦笑を浮かべた。

「ふふっ、貴方にはそうかもしれないわね。」

「セリアはそういうけど、私達だってちょっと前まではそう考えていたんですよ……この村の人達に受け入れられてこうやって生活するなんてあの時は夢にも思いませんでしたわ。」

セリアとアリアの会話に大地族の女衆も続けるように話し始めた。やはり、冒険者と大地族が共に過ごすと言う事はそれなりに苦労があったらしい。

文化、風習の違いを乗り越えるのはかなり苦労をしただろう。

「そーだろうね。私達も冒険者の方々とこうやって宴会を開くなんて夢にも思わなかったよ。」

「始まりはあの飲兵衛が村長さんと飲み比べをしたことだったわね。」

「ああ、良く覚えているよ。ナガトのあんちゃんが確か……腹を割って話すには酒を飲むのが一番って言ったんだっけ？」

「あーあ、そーじゃったねえ。村長もウワバミだったし、負けた方が酒代を出すって話になっていたねえ。」

「結局、ナガトさんが敗北しましたわ。流石に歴戦の冒険者だからさほど懐は痛まなかったそうですね……」

セリアとアリア、大地族の女衆は当時の事を思い出したのだろう懐かしげな風に話す。

ソルシエールは実にナガトらしい話だと思った。

酒はナガトにとって様々な場所で使うツールらしい。

それこそ船乗りの友を作るところから女性をおとすまで全てにおいて使っているそう。

そう言う人徳めいたものもあるため、世界中の港に恋人がいるとかそういう真似が出来るのだろうか……

ソルシエールがそう考える間も大地族の女衆とセリア達の話は続いていた。

「それが最近だとうちの宿六も挑戦するようになって……あんなちゃんをダシに使えば文句を言われないと思って……」

「それを言うならナガトさんですわ……村の人達をダシにしてお酒を飲むのは困ったものです。」

「ほんと、どうやったら禁酒させられるかしらね。」

話の議題は亭主やナガトが酒を飲み過ぎると言う話に移っているようだ。

既に彼女達の間には大地族と冒険者という垣根は存在しない、同じ人間として対等の付き合いをしているのだ。

ソルシエールにはそれがとても眩く見えた。

きつと、これから先この絆は何よりも尊いモノになるだろう。

ふと、他の人間はどうなっているのだろうかと思い、再度ソルシエールは周囲に視線を向ける。

ジライヤは老人達に捕まり、酒を飲みながら身振りを交え会話をしていた。

どうやら、ジライヤが山で見つけた果物の話をしているようだ。

そのうちジライヤの案内の元果物と苗を手に入れに行く計画を練っているようだ。

ジライヤも酒を飲みながら地面に地図を描き説明している。

ライ達はモツやレバーを食べつくしてしまったらしく新たに投入されたカルビやもも肉に齧りついていた。

めったに食べられない肉に少年達はホクホク顔だ。

少女達は年の近い異性の冒険者であるライに興味津々のようで色々話しかけている。

それがどうもチェルシーは面白くないらしい露骨に近寄り、邪魔をしていた。

カレンはそんなチェルシーをからかっている。

さて、ナガトの方はと言うとどうやら牧場主他数名と飲み比べを行い勝利を収めたらしい。

ウワバミと言うよりも冒険者としての肉体の性能のせいだろうと予想された。

ツマミ代わりに肉を食らいながら次は誰が相手をするか挑戦者を求める。

流石に数名敗北すれば皆尻込みをし始め、挑戦者もいなくなってしまう。

それに気がついた村長が名乗りを上げる。大樽に入った酒を運びナガトの前にどさっと置く。

「ふむ、次はワシ相手になろう。飲み過ぎたと良いわけなぞせぬよな？」

「とうぜんだぜえ。今日こそ、勝たせて貰うからな。」

村長の挑発にナガトは不敵に返す。

大きな杯を持ちお互いに酒を注ぎ始めると、尻込みをしていた男達も周囲に集まり始め騒ぎたてる。

村長とナガトの飲み比べの一騎打ちは村の男達にとっても楽しみなイベントの一つになっているようだ。

それを見ながらソルシエルは急性アルコール中毒になった場合の対処は解毒ポーションで大丈夫だったのだろうか、ナガトが死んだとしてもススキノに行って蘇るだけだから問題ないかとか考えていた。

冒険者だからこそ出来る無茶だなど思いながら思わず微笑んでしま
う。

このコタンの村に流れる優しい空気をはっきりと自覚したからだ。

「世界の果てに行ったとしても、この光景はみれぬであろうな……」

「ふふっ、貴方のブログのエルダー・テイル旅行記に載せられる内
容よね。たまには世界の秘境以外も良いんじゃないかしら？ 貴方も
好きでしょ……こういうの」

「うむ、嫌いでは無いよ。」

セリアの言葉にソルシエールは何処か照れたように答えた。

エルダー・テイル旅行記とはソルシエールが作成しているブログで
国内外問わず、ソルシエールがその目で見た秘境のCGと紹介文を
載せている。

海外での活動がメインのため国内の秘境は少なめなのだが、それ
でも見た事のない光景をみたいと楽しみにする者は多い。

ソルシエールが有数の探検家と言われる所以はこのブログにあった。
故に彼女を知る者は理解に苦しむそうだ。

エルダー・テイル有数のPKであり、探検家としては常に冒険者達
の最前線にいる。

この矛盾はセリアには理解できない。ナガトは理解しているのだろ
うか？……セリアは少しだけ気になった。

そんな事を考えているとソルシエールが呆れたような表情を浮かべ
た。

セリアは考えている事を読まれたのかと内心ドキリとしてしまう。
だが、ソルシエールはセリアの方を見ていた訳ではない。

「やれやれ、村長の勝ちのようじゃ。」

「あらら……連敗記録は更新のようね。」

内心の動揺を抑えつつ、セリアはそう答えた。

ナガトは村長に敗北しそのままひっくり返って寝てしまった。

いびきをかいているようだから、急性アルコール中毒とかは大丈夫だろう。

最悪のススキノまで迎えに行けばいいのだし……

他にも敗北者達が屍の山を築いており村長の周囲は死屍累々だった。まあ、明日には復活するだろう……セリアとソルシエルは放っておく事にした。

それに気がついたアリアは「仕方ない人」と言いながら毛布を持ってナガトの元へ向かっていった。

女衆の一部も仕方ないといった表情を浮かべて一人一人に毛布をかけてやっていた。

その幸せな村の様子にソルシエールの心は温かくなるのを感じた。

「……みせてやりたかったの。」

「どうかした？」

「……何でもないよ。」

セリアが聞き咎めて聞いてみるとソルシエルはどこか寂しげに答えた。

その言葉の中に宿る憂いにセリアはそれ以上踏み込む事が出来なかった。

そういえばと、とある人物の事を思い出したセリアは気を取り直して宴会会場を見回した。

予想通りとはいえ来ていないという事実がセリアには少しばかり辛かった。

溜息を吐きながら、ボツリと愚痴を漏らす。

「参加するしないは個人の自由だけど……グレゴールも参加すれば良いのに、全く何処に行ったのかしら？」

そう言って嘆息する。

居ないモノは仕方ないし、強制するべきものでもない。

それでもセリアとしては皆と打ち解けて欲しいのだ。

コタンの村人から孤立し始めているグレゴールの未来にセリアは不安を覚えていた。

現在、グレゴールがしていることを知ればセリアはどう思うであろうか。

03 (後書き)

色々を入れ替えを行った第3話。
ススキノの悪意の欠片が見え隠れしています。

04（前書き）

今回はかなりエグイ表現もありますのでお気を付けください。

軽く欠伸をもらしながらナガトは暮れゆく夕日を見ていた。

久しぶりの宴会だった為羽目を外し過ぎたらしい。

昨日の宴会で行われた飲み比べは村長以外の全員が轟沈するという悲惨な結果に終わってしまった。

村の男衆の大半が二日酔いになっており、昼過ぎまで陸にうちあげられたアザラシのようになっていたそうだ。

ナガトがそんな事になっていれば当然ライ達の訓練も中止となる。

むしろ、村の男衆の大半が寝込んだため農家や酪農家から手伝いをしてくと泣きつかれ手を貸しに行ったそうだ。

それが原因でセリアとアリアにこっぴどく叱られる羽目になったがそれは自業自得だ。

その時の事を思い出したナガトは渋面になった。

また、そのとき聞いたのだがグレゴールはまだ戻ってきていないらしい。

高レベルの冒険者がある程度本格的に狩りをするところになるとこちらの時間で一週間程度、拠点に戻らないのは良くある話の為気にする必要はないだろう。

そう考えながら再び欠伸を漏らす。

現在ナガトは村の入口で見張りをしている。

コレ自体に大した意味はなく、ありていといえば二日酔いの罰である。

ススキノからコタン村まではかなり離れているため来る者は滅多にいないため、見張りとは形だけのモノになっていた。

風に当たりたかったナガトにしてみればちょうど良かったのだけれども……

沈む夕日を見ながらナガトは干し肉を取りだし齧る。

ソルシエールは今日もアリアの着せ替え人形にされたらしくぐったりしているようだ。

流石に二日連続では精も魂も尽き果てたらしい、あてがわれた家に戻って休んでいるようだった。

アリアの充実した時間が過ぎせたと言って目を輝かせていた様子はそら恐ろしいものがあつた。

見ていたライ達が怯えてどこかに逃げるくらいだったし……

着せ替えをしている最中に新しいアイデアが幾つも浮かんだらしく、貴族から受けたドレスの依頼にそのアイデアを盛り込むそうだ。

水筒に入れてある生温いお茶を飲みながら、ナガトはアリアの周辺で起きた今日の出来事を忘れることにした。

精神安定上悪そうだったので……

再び干し肉を齧りながら見張りを続けていると、初老の漁師―昨日の宴会でロリコンだと判明した―オベリクンが重そう魚籠を背負いながら村に戻ってきた。

オベリクンは二日酔いにならない体質らしく、酒を飲み比べて潰れても次の日にはケロリとしているそうだ。

二日酔いで苦しんでいたナガトにしてみれば羨ましい話である。

そんなナガトに気がついたのかオベリクンは釣ってきた鮭をナガトに見せながら話しかけてきた。

「よう、ナガトのあんちゃんよ。良い鮭が釣れただが、ひとつ持っていくかね？」

「おう、おかえり、オベリクンの爺様よ。……良い鮭じゃねえか。カラカンチに一つ届けておいてくれよ。後、ソルシエールにも届けてやってくれねえか？ やっこさん、鮭釣りに行ったらしいんだがオケラだったようでああ。」

「ああ、聞いた聞いた。あん嬢ちゃんは時間帯が悪いのよ。……今度、玄人が知る最高の時間を教えてやるって約束したばっかさあ。鮭渡すのはそんな時がええじゃろ。」

「ああ、違いねえ」

そう言うのと申し合わせたかのようにナガトとオベリクンは笑い出した。

道具や場所ばかりに拘り、時間帯を考えないミスは素人にありがちな失敗である。

無論、海の男であるナガトはそれに気がついていたがあえて指摘はしなかった。

何故かと言えはからかうネタになるからである……コレがソルシエールにばれたら悲惨な目に合わされるけれども。

ナガトとオベリクンは釣りの仕掛けや竿の製法に関してひとしきり話し始める。

元の世界では高級品である竹製の魚籠もこちらの世界では漁師が当たり前に持っている道具でそう高いものでもないらしい。

鮭釣りに使用する餌や竿、またその際よってくるモンスターをどうやって来ないようにするかなど色々と話し始めた。

釣の最中にモンスターが寄ってくれば釣りどころでは無いし、何より魚が逃げてしまう。

それをどうやって避けるかなど、漁師の知恵を聞かせて貰っていた。ひとしきり話をする、今度はナガトとソルシエールの持つ釣り竿へと話題は移る。

「そーいや、あんちゃんもあの嬢ちゃんもロクな竿持ってねえな。」

「まあ、仕事じゃないしな。適当に楽しめれば良いって程度の竿だよ。」

「かーッ、そりゃ良くねえなあ。あんちゃんならともかく嬢ちゃんには腕がねえんだから、しゃあねえなあ……明日でも竿やるからわっしの家にこいや。あんちゃん」

玄人の漁師から見れば適当な釣り竿を使っていると言うこと自

体気に食わない事らしい。

悪い道具では悪い結果しかついでこないと言うのがオベリクンの考え方のようなだ。

ナガトも本来ならば良い釣り竿が欲しかったのだが、元の世界と違いこちら側では手に入れるのが難しかった。

オベリクンが良い釣り竿をくれると言うのならありがたいと頂戴しようと考えていた。

ついでにソルシエールの分もナガトが選べばよいだろう。

お札に何を持って行こうかと考えたが、飲兵衛には酒以外は無いだろう。

もうすぐ行商人がやってくる時期でなので、景気良く消費してしまうおうと考えた。

お札なのに自分も飲むつもりであるあたり、ナガトは良い性格をしている。

「爺様よ。釣り竿の札に酒を持ってくるぜ。」

「おうゝ気が利くじゃねえか。流石はナガトのあんちゃんだ。んじやあ、そいつで酒盛りだな。」

「なら、牧場の倅も呼ぼうぜ。奴あ酒好きの癖に弱ええからよ。たんまりと酒を残してるって噂だぜ。」

「くうゝ何とも勿体ねえ話じゃねえか。奴の酒を飲み尽くしてやらあ……子供ができる前祝いって奴だ。」

「おうとも」

牧場の嫁や母親が聞けば激怒するような内容を喋っているが酒飲みたちは気にしない。

子供が生まれれば酒盛りにも誘いにくくなるので、その前にたつぷりと飲ませてやろうと言う親切心だそう言えば相手も納得するだろう。

ついでに牧場の主も誘ってやればいい、息子を遥かに超える酒好き

の彼ならば一も二も無く乗る筈だ。

ナガトとオベリクンはお互い顔を見合せながら獲物を見つけた虎のような笑みを浮かべる。

現在、ナガトは村の男衆と意気投合しており、頻繁に酒を飲みかわすほど仲が良い。

だが、そのナガトも〈大災厄〉に巻き込まれた当初は非常に悩んでいた。

大地族は所詮NPCではないかと言う感情と、NPCとは思えない行動や感情をあらわにする様に戸惑いを覚えていた。

悩み、悩んだ挙句、考える事を放棄すると言う結論に達した。

そして、結論を出すために村長を巻き込んだ一大飲み比べ大会を主催した。

結果としては村の酒の9割をのみ尽くしたため、村の女衆の怒りを買い男衆達と土下座をして回る羽目になったのだが、それによってナガトの迷いは晴れたのだ。

上手い酒が飲める相手ならばもはや対等の人間であり、大地族、冒険者などと言う細かい事は気にする必要が無いと割り切ることにしたのだ。

コタン村の村人達と飲む酒は美味しく、非常に楽しい時間を過ごせる。それでいいではないかと、それ以上拘る必要はないと考えたのだ。そんな割り切った考え方ができたナガトはコタン村の大地族に男女問わず人気がある。

何度もやっている牧場の酒強奪計画もナガト故に笑って受け入れられているのだ。

まあ、牧場の倅にとってみれば災難なのではあるが……

オベリクンとあーでもないこーでもないと言いつつ計画を練っていると、ナガトの背後から影のようにジライヤが現れた。

珍しく真剣な様子のジライヤにナガトとオベリクンの表情に緊張感が漂った。

ジライヤは正義感の強い男で大地族に対してはなるべく畏怖を与え

ぬように注意しながら行動をしている。

また、子供に甘い性格のため子供達に好かれていたりする。

そんなジライヤがオベリクンの前にも拘らず〈暗殺者〉の身体能力を利用し現れたのであるただ事ではないのだろう。

「ススキノの連中が来たでござる。人数は二名、オベリクン殿は村長殿に伝えて貰えぬか。ニンニン」

「ああ、分ったよう。二人ともきいつけてな。」

「おう、任せておけ。」

「心配無用にござる。オベリクン殿こそお氣をつけてでござる。ニンニン」

オベリクンは近場の村民たちに声をかけながら村長の家に向かって駆け出した。

その様子を見送った後、2人は真剣な様子で話し合いを始めた。

ナガトもジライヤも先程まで抑えていた殺意や敵意を抑え込むのを止めている。

今からやるのはPKなどと言うゲーム上の遊戯では無い。

『殺し合い』だ。

例え、大神殿に送られて冒険者が蘇ると言う事が分っていても殺すことには間違いないのだ。

それにためらいを持ち迷えば自分が死に護るべき者が殺されてしまう。

ススキノで過ごした一カ月がナガトとジライヤの魂にそれを刻みこんでいた。

少なくとも二人はPKなどと言って自分のやっている事を誤魔化すつもりはなかった。

ぞっとするような低い声でナガトはジライヤに尋ねる。

「誰が来たかは分るか？」

「確認したでござる。相手はブラッドとジーン、セリア殿にも連絡をしておくでござるか？ニンニン」

「ああ、村の動揺を鎮める必要もあるしな。そっちに回って貰おう。襲撃者がその二人ならば俺達で釣りがくる。」

普段特徴を変えなず冷静に情報を伝えるジライヤに対しナガトは寧猛な笑みを浮かべる。

村人達に対して決して決して見せる事のない戦場に向かう者としてのナガトの表情だ。

ススキノの外道を相手に容赦をして甘く見られれば致命的な事になると言う事はナガトもジライヤも嫌と言うほど理解していた。

故に通常はなるべく残酷に殺すことでコタン村の安全に繋がるのだ。それが可能なのは最近来たばかりのソルシエールを除外すれば、ナガトとジライヤのみである。

だからと言ってナガトやジライヤが残虐を好むかと言われれば違うと言う返答が返ってくるだろう。

だが、ススキノ……いや、エッゾ帝国ではそれをしなければ生き残れないほど呪われているのだ。

外道は『伊達にして帰すべし』と言うのが基本ではあるが、何事にも例外と言うものは存在する。

今からくる銀牢寿などはその良い例である。

彼のギルドは構成員の全てが狂っていると云っても良い、残酷に殺しても反省をしないのため一瞬で殺した方が良いだろうと考えた。警告の意味を理解できない輩に余計な手間をかける時間が惜しい。念話で村にいる冒険者達に注意を促すとジライヤに視線を向ける。

「俺はこのまま待ち受けるが、お前さんはどうする。」

「拙者は隠れておくでござるよ。」

「よし、了解だ。それじゃ、迎撃を始めるとするか。」

ジライヤは自分の発言が終わるや否やその場より姿を消した。
近くで見ているナガトですら惚れ惚れする見事なまでの隠行の特技である。

ナガトは背負い袋に手を突っ込むと、中から顔全体をすっぽりと覆い隠すフルフェイスの兜を取り出して被る。

元々装着していたプレートメイルと相まって戦場の敵を粉碎して歩む重装歩兵のように見える。

分厚い鉈のような分厚い刃をもつカトラスを抜き、壁に立てかけていたタワーシールドを装備する。

ナガトの意識は既にどうやって敵を排除するかに割かれていた。

そんなナガトの視界の先に砂塵を巻き上げながら近寄ってくる騎影が見えてきた。



砂塵を巻き上げながら2つの騎影がコタン村へと進んでいた。

一人は立派な体躯の名馬に跨り、シーサーペントの鱗で作られたスケイルメイルを纏った〈盗剣士〉ブラッド。

もう一人は二つの角を持つバイコーンに跨り、妖精銀で作られが銀糸で刺繍された白いローブを身に纏った〈召喚術師〉ジーン。

どちらもススキノの退廃的な生活にどっぷりとつかっているのだろう。

その目は濁り、他者に対して暴力を振るい傲慢に振る舞うのが当たり前と言う雰囲気は滲み出ていた。

〈召喚術師〉であるジーンなどはバイコーンを走らせながら何事かわけのわからない事を呟き続け居てた。

ススキノから出て二日間ずっとジーンは訳の分らない事を呟き続けていたブラッドは気がおかしくなりそうだった。

苛立たしさを全てぶつけるかのように叫び声をあげた。

「魔女、魔女、魔女！！阿婆擦れがあ！！エアロの野郎面倒事押しつけやがって！！」

「ブ、ブラッド、ぼ、ぼくだって、あ、あたらしく、て、手に入れた女の子、ま、まだ調教、お、終わって、な、無いんだぞ」

「ヘイヘイ、ジーン、そりゃあてめえがペドじゃなけりゃあ獲物は山ほど転がってるんだぜ？」

「バ、ババアには、き、興味、な、無いね。」

「そーかよ。ロリ吸血鬼は良いんじえねえか？合法ロリらしいぜ？」

ブラッドの言葉にジーンは舌なめずりをし、爬虫類のような目がいやらしく歪む。

口元より垂れてきた涎をそのままに恍惚した表情を浮かべる。

元々からしまりのなかった表情がさらに緩み、まるで夢遊病者のようにも見えた。

童女を虐げる状況思い浮かべ興奮しているのだろう。

バイコーンに吊るしたズタ袋を時折蹴りながら、どす黒い情熱を滾らせていた。

ブラッドはそんなジーンの様子を呆れたように見ていた。

ペドフェリアでは無いブラッドにはジーンの様子は理解が難しい。

エアロがジーンをコタン村の襲撃に参加させたと言う事はロリ吸血鬼を自分達の言うことを素直に聞く奴隷に作り替えるつもりなのだろう。

まあ、その方がブラッドにとっても都合が良いので特に問題視はしていない。

ブラッドとしては、コタン村にいる大地族の娘を数名攫って弄びたいと思っていた。

最近近場で美しい娘が捕まらないのでちょっと遠くへ行かないといけないのだ。

こういった遠征のついでに確保しなければやってられないとブラッドは考えていた。

トリップしたまま帰ってこないジーンに舌打ちしつつぼやく様にブラッドは呟いた。

「ハッ、ジーンをやつあ、クスリやり過ぎなんだよ。くっそ、ついでにチエルシー誘拐出来ねえかなあ」

「は、早く、つ、つかないかな。ソ、ソルシエールたん、は、早く、お、お持ち帰り、し、したい。」

ブラッドの話など何も聞いてはいないのだろう。

快楽におぼれ狂ってしまったジーンを見て、ブラッドは呆れたような視線を向ける。

訳の分らない狂った発言を壊れたスピーカーのように繰り返すジーンと一緒に行動をすると同じ穴のムジナであるブラッドですら気がおかしくなってしまうのだ。

ジーンと一緒に行動する時間を少しでも短くする為に、さっさと仕事を終わらせてしまわなければならない。

そう考えるとブラッドは名馬に鞭を入れて馬を走らせる。

バイコーンもそれに合わせて速度を上げてきた。

だが、流石にこの速度で走らせればジーンの鬱陶しい声も聞こえなくなる。

ブラッドはジーンの話聞くぐらいならば真面目に仕事に取り組んだ方が幾らかマシだと考え始めた。

そうやってしばらく走らせていくとコタンの村が見え始めてきた。

ジーンと一緒にやる仕事はさっさと終わらせようと思い、ブラッドは村の入口へと視線を向ける。

そこにはフルプレート製の鎧を身に纏い、フルフェイスの兜を身に付けた〈守護戦士〉がいた。

持っているカトラスとタワーシールドから察するにあの〈守護戦士

「ナガトだろうとブラッドはあたりを付けた。
面倒な奴が居たもんだとブラッドは舌打ちをする。

「いっそどこかに行つていりゃよかったろうにと愚痴りながら、どう対処するべきか思索し始めた。

「ナガトは歴戦の〈守護戦士〉であり、レベル的には同格である筈のブラッドを歯牙にかけない程度の技量をもっている。

「ブラッドとしては忌々しいがタイマンで勝てない事は分っているの
で一人で襲撃するならば逃げていただろう。

「だが、現状は2対1なのだ。

「一般的に冒険者の戦闘能力は人数の増加と共に跳ね上がると言われている。

「最低でも2・5倍、通常ならば3倍程度だ。

「この状況下であればたとえ相手が誰であっても負ける事はないとブラッドは確信を抱いた。

「今まで散々邪魔をしてくれたナガトを殺しその後コタン村に押し入り大地族を片っ端から殺してチェルシーを奪えばいい、そんな皮算用すら始める余裕ができてきた。

「ロリ吸血鬼はジーンに任せれば良いだろう。

「その為のペドフェリアだ……そんな勝手な事を考え嘲笑うような表情を浮かべ騎乗したままナガトにブロードソードを突き付けた。

「ナガトよう、銀牢寿のブラッド様がチンケな村に来てやったんだぜ。土下座して迎え入れたらどうだ」

「PKするのは止めてくださいと涙を流しながら許しを請うた奴がやけに強気じゃねえか。」

「黙りやがれ!!! こっちは2人もいるんだ。てめえが勝てるわけがねえんだよ!!!」

「ブラッドの嘲笑にそれ以上の悪意を込めてナガトは言葉を返す。

「ナガトとしては余り程度の低い舌戦をしたくはないのだが、相手の

口上を聞いて少しでも情報を手にしておきたかった。

ブラッドは過去の醜態を思い出したのかブラッドは顔を真っ赤にしてナガトを睨みつけた。

2対1と言う状況下でも強がるナガトには前の分も含めてたっぷりとお返しをしてやればいいと考えた。

数の多い方が強いのだから、怒りに顔をどす黒くしつつもそう言った計算ができる冷静さをブラッドはまだ保っていた。

その頼みの綱のジーンをちらりと見ると、心あらずといった様子で入口の様子を熱心に見ていた。

ソルシエールでも探しているのだろうか……そんな仲間の様子にまあ良いと考えブラッドはナガトを睨みつけた。

「……分ってんのか？ 2対1だぜ、2対1、てめえが腕がいくら立とうが勝ち目なんてねえんだよ。ほら、大人しくこっちの言う事を聞け。ロリ吸血鬼とチェルシーをこっちに寄せ。命令だぜ？ てめえらにやあ断る権利なんてねえんだよ。」

「ソ、ソルシエールさんを、よ、寄せせ！ ！ ぼ、ぼくは、ぜ、絶対、お、お持ち帰り、す、する。」

そんなブラッドの言葉にナガトは鼻で笑ってやる。

本気で銀牢寿の言う事を聞くのだと思っているのならばその頭の出度さに笑うしかない。

それに『2対1』では無いのだ……対人経験すらロクに無いであろう。

その程度の予測もつかない冒険者にナガトが負ける事は万に一つも無い。

そして、ジーンの物言いも不快であった……動物やペットにでも対するような口調、ソルシエールが聞けばそれこそ激怒するだろう。

奴が居ない幸運に感謝するのだなと内心考えつつカトラスを向けた。ナガトは最終通告ぐらいはしてやるべきだろうと考えた。

「雑魚が2人に増えたぐらいでなんだと言うのだ？ 全く話にならん。今、尻尾を巻いてススキノに帰れるなら見逃してやるがどうする？」
「ああン？ てめえ舐めてやがんのかぁ！！」

ブラッドは馬鹿にするようなナガトの発言に激怒し、ブロードソードを抜き放ち構える。

ジーンにやるぞと声をかけようと視線を向けた途端、ブラッドは固まってしまった。

不気味な笑みを浮かべ涎を垂らしながらのごとかを呟き続けるジーンに生理的な嫌悪を抱いたからだ。

周りの事など全く見えていないのだろうジーンは呟きを続け何事かを理解したかのように頷いている。

ブラッドは苦々しげに舌打ちをした。

こうなってしまうては正氣に戻るまでは戦闘など出来やしないからだ。

一方、ナガトはジーンの様子に嫌悪を浮かべつつも一切油断無く身構えていた。

こういう場合、狂人であるジーンは何をしてくるか分らない……故にコタンの村を確実に守る手段を取らなければならない。

2人がジーンを慎重に見ているとようやく現実に戻ってきたのか、涎を垂らしながら歯をむき出しにしコタン村を見て笑う。

その異常性にナガトは寒気を覚え、ブラッドですら呆氣にとられていた。

「ソ、ソルシエールたんを、む、迎え、い、入れるために、け、けじめも、よ、よい、し、したんだ。」

突如そのような事を叫びだし、バイコーンの上に載せていたズタ袋を引裂いて地面に投げ捨てた。

ズタ袋の中からくぐもった悲鳴が漏れ、中身が地面に零れおちた。現れたのは肌が露わな煽情的な衣装を身に纏い、全身を鎖で縛められ猿轡を嚙まされた大地族の幼い少女だった。

それを見たナガトは絶句し、ブラッドはまたかよとため息をつく。そんな二人の様子など見ていないジーンは涎を垂らしながら声を張り上げた。

「い、いらなくなった、ペ、ペットの、しょ、処分、し、して、か、飼い主の、せ、責任感、お、おしえないとね。」

「ま……」

茫然としていたナガトはジーン言葉に我に返る。

ジーンの凶行を阻止しようと慌てて叫ぶが間に合わなかった。

銀牢寿に捕まり、ジーンの手によって散々に蹴られ汚された大地族の少女はゴミをポイ捨てするかのような気軽さでその命を奪われた。その最後の表情が恐怖ではなく安堵であった事がいっそう哀れさを感じさせる。

玩具のようにペットのように扱われ、不要になれば処分される。

……彼女の人生は〈冒険者〉の手によって弄ばれたと言っても良い。踏み潰された哀れな少女を見てナガトは茫然としてしまった。

ブラッドは慣れているのだろう……特に気にする様子はなく呆れた様子でジーンを振り返った。

「やれやれ、ンな事するから、てめえの女が足りなくなるんだぜ？」

「い、いらなくなった、ペ、ペットは、か、飼い主が、しょ、処分しないと、そ、それが、か、飼い主の、せ、責任、だ、だから」

「……屑があ」

茫然とした様子だったナガトはブラッドとジーンの何気なさ気な会

話を聞いて激怒する。

情報を少しでも引き出そうと会話を行ったのが間違いであった。その選択をしたせいであの哀れな大地族の少女を殺してしまったのだ。

自分のせいと言うほどナガトは傲慢でも青臭くも無い。

だが、それでもだ、それでも助ける手段はあったのではないかと思ってしまうのだ。

ナガトの激怒は暴虐を成した銀牢寿の愚か者とみすみす少女を死なせてしまった自分へと向いていた。

人として落ちる所まで堕ちた外道を許す事が出来なかった！

1分1秒として視界におさめていたくはなかった。

〈守護戦士〉の攻撃の起点となる特技〈クロススラッシュ〉を選択。せめて、あの大地族の少女の百分の1でも敵に刻まんと誓う。

大地を揺るがすような怒声を浴びせながら、ナガトは敵へと駆け出した。

ナガトは怒り狂いながらも誰から倒すべきであるかと言う選択肢を間違うような未熟さとは無縁であった。

ジーンを斬る前に前衛として戦う事の出来るブラッドから始末しなければならぬ。

一方、ブラッドもナガトがこちらに来るだろうと読み迎撃の準備をするべく剣を構えていた。

ジーンを狙ってくれば楽に斬り殺す事が出来たのにと舌打ちをしながらも怒りで我を見失いかけているナガトを見て内心狂喜していた。

こうなってしまうえばどう料理するもこちらの思うがまま、ナガトの攻撃を捌きながらゆっくりと体の動きを阻害してゆけばいい。そうしてしまえば殲殺しにするのも楽である。

そう考えたブラッドはナガトの最初の一撃を上手く受け流そうと意識の全てを割いた。

その怒りの中に仕込まれていた罠が今か今かと待ち構えていた。

無論ナガトの怒りは本物であり、自分の手で敵を引裂かなければ気が済まないと考えている。

だが、コタン村の防衛をしているのはナガトだけでは無い。気がつけばブラッドの脇腹がごっそりとえぐり取られていた。

自分に何が起きたのか理解できないブラッドは痛みに絶叫をあげる。戦闘中に痛みで絶叫するような真似をすれば当然無防備になる。

その一瞬の隙をナガトは逃さなかった。

自分に何が起きたかも理解できないまま、ブラッドはナガトのヘクロスラッシュに切り裂かれた。

意識が遠くなっていく中、ブラッドの目にナガト以外の〈冒険者〉ジライヤの背中が見えた。

そして、自分の身に何が起きたのかを理解した。

隠れていたジライヤがブラッドを背後からへアサシネイトで攻撃を仕掛けたのだと言う事に……

「卑怯者め……」　っそう言いかけたが、死に行くブラッドは口が動かず、ススキノの大神殿へと送り返された。

ジーンはブラッドが瞬殺され新手が現れた事に動揺し喚きだす。

「か、隠れて、い、いた、な、なんて、ひ、卑怯、だ、だぞ。」

「何、気がつかない方が間抜けなのでござるよ……ナガト殿。」

「ああ、刻んでやりたいが殺しても蘇る〈冒険者〉相手じゃ意味がねえ。さっさと潰すぞ」

「了解したでござる。」

恐怖に駆られたジーンはバイコーンに命じて2人を襲撃させるもあつという間に切り刻まれてしまう。

召喚術師であるジーンは前線系の2人に対して戦う手段など持ち合わせてはいない。

逃げようと背中を向いた所を追いついたナガトとジライヤに捕まり、細切れになるまでその身体を引裂かれた。

2人掛かりでジーンが死ぬまで切り刻んだナガトとジライヤは申し合わせたかのように溜息を吐いた。

ナガトは背負い袋の中からマントを取りだし、無惨な亡骸を晒す少女にかけてやった。

散々弄ばれ、このような悲惨な死に方をさせられた大地族の少女を見てナガトとジライヤは暗澹たる気持ちになった。

コレがエッゾ帝国……ススキノでの現実であり、今もお現在進行形で起こり続けている事なのだ。

レベル90の〈冒険者〉でありながらたった一人の少女すら救えない自分達の無力さを呪いつつ、ジライヤが口を開いた。

「拙者がジーンめをさっさと攻撃して居れば……」

「いや、間に合わなかったさ。俺が走り寄ろうとする前に殺しちゃったんだからな。……俺達はコタン村の大地族を護らなければならん。確率の低いifに賭けるわけにはいかん。……この子の亡骸は村の共同墓地に埋めておこう。」

「……確かにそうでござる、理解は出来るが……やり切れぬ。」

少女の亡骸をジライヤは齒を食いしぼりながら見て、血を吐くような声で答えた。

そのジライヤの言葉がナガトには痛いほど良く分った。

アキバやミナミのように混乱していた冒険者達を取りまとめる事が出来ればこのような痛ましい事件は起きなかったであろう。

そう考えると、何もしなかった己を呪いたくなる。

だが、後悔に苛まされてやるべき事を忘れればようやく手に入れたほんの僅かな護るモノすら失いかねない。

ナガトは気合を入れ直しジライヤに対してやるべき事を伝える。

「残党が居るやもしれん。残党狩りをしよう……こうなるとソルシエールの手も借りた方が良さだろうな。」

「ああ、そうでござるな。奴らの仲間に侵入されては目も当てられぬ。念話で連絡して協力を願うのが早いでござろうな。……ニンニン」

やらなければ残っていることがジライヤに冷静さを与えたのだろう。普段通りの語尾を付けてジライヤは喋りはじめた。

ナガトはその様子に安堵し、手早く済ませようとソルシエールに念話を入れる。

数度会話をした後、思案するように考えて頷く。

「ソルシエールから提案があった――：と言う風にしたいそうだ。」
「了解でござる。それが一番確実でござる。ニンニン」

ナガトはジライヤにソルシエールからの提案を伝える。

その提案を少しの間ジライヤは吟味し、やがて納得したのだろうそれで行こうと頷いた。

ナガトはそのジライヤの聞きながら詳細について話す。

そして、大地族の少女の亡骸を抱きかかえるとゆつくりと村の中へと戻っていった。

コタン村の中へと戻りながらジライヤは暗澹たる気持ちになった。

人はこうも容易く堕ち、こうも酷い事が出来るのかと……何故、良心の痛みを覚えないのか。

そんな事を考えながらナガトは村の中へと戻っていった。

ジライヤはそんなナガトを見送るとナガトとは別方向へ進み村の周辺探索へと手を伸ばした。

あの少女の悲劇をコタン村では起こさせない。

それがジライヤにとって何よりも優先しなければならない事柄であった。



コタン村の外れにある茂みの中でアランはブラッドとジーンを退けたナガトとジライヤは感嘆の息を漏らした。

相手に反撃をさせる暇すら与えない一方的な戦闘は教科書通りと言える見事な対人戦術だった。

銀牢寿側の不手際を指摘するとすれば、ブラッドが正面のナガトに相対した時点でジーンは伏兵に気を配りそれに対応した召喚獣を呼びだしておくべきだった。

それを怠り、ブラッドも指摘をしなかった時点で勝負の行方は決していたも同然といえる。

今更ながらアランはコタン村に逗留する冒険者の質の高さを認識させられていた。

正直、アランとしてはここで雷鳴の魔女が現れるのを期待していたのだ。

だが、この不甲斐ない戦果では来る筈も無いと溜息をつく。

コタン村に潜入して探る事は不可能というか……魔女の館に乗り込むなど自殺志願者の行いと言うしかない。

一線級の冒険者が複数いる村に敵対する組織の人間が一人で潜入すれば問答無用で捕えられるだろう。

相手が一人であれば先程の2人のような不様を晒す事はないと自信を持って言える。

あそこまで慎重に罠を仕掛けて戦闘を挑む者達が自分にとって有利な状況を作ってくれるなどと言う甘い期待を持つ事は出来なかった。今回はブラッドとジーンの不様な戦果を報告して引き上げるべきだと判断した。

そうと決まれば善は急げとばかりにアランはホロウへと念話を繋げる。

『ホロウ様、ブラッド様とジーン様がコタン村の冒険者、ナガトとジライヤの手により撃退されました。彼らが対応したため雷鳴の魔女は確認できませんでした。』

『ならば、アランよ。村に潜入して魔女の所在を確認せよ。』

アランはホロウの無情な命令に絶句した。

一線級の冒険者が複数いる村、しかも先程の騒ぎのせいで確実に警戒しているであろう中に潜入……これは自害せよと言っているのとなんら変わらない命令であった。

それは、一線級の技量を持つ〈暗殺者〉であるアランにとっても変わらず、まず間違いなく討ち取られるだろう。

成功率がほぼ0に近い犬死をさせるような作戦、しかも魔女の確認をすること自体にあまり意味が無いのだ。

内通者の情報は今までの成果からほぼ100%間違いのない精度だと言う事は分っている。

そんな確実な情報の裏を取る行動の意味が理解できなかった。

アランを殺したいが故に命令を出したのではないかと邪推してしまうような内容だ。

当然のことながら、アランは異議を唱える。

『お言葉ですが、ホロウ様。私が村に入ったところで確認をする前にカラカンチのメンバーによって撃退されてしまうでしょう。』

『構わぬ。死ねばスキノに戻るだけのこと……分ったならばささと確認せよ。……あの娘は大事だろうか？』

『……分りました。』

アランは彼女の事をちらつかせるホロウにどす黒い殺意を覚えつつ承諾した。

この任務を受ける少し前に彼女が捕らわれている場所が判明した。救出の方法を検討し助け出すまでは迂闊な行動は避けねばならない。

アランは怒りを押し殺しつつ、目の前の任務に集中することにした。一方、ホロウにしてみればアランの命などどうでも良かった。

内通者の言葉に嘘が無い事も分っている……そもそも、あの男が銀牢寿に対して嘘をつくような真似は出来ないだろうと考えている。ホロウにしてみれば確認するのは余興のための下準備を確実にしておきたいといった程度でしかない。

どの道、コレで縁を切るのだアランに理不尽な命令を与えると云う快楽を味わうのも最後である。

とびきりの理不尽を与えておきたかった。

念話を切った後、アランは怒りを抑え込みコタン村への潜入方法を検討し始めた。

忌々しい話ではあるがホロウの言った通り死ねばススキノの大神殿に戻り復活する事ができる。

この無茶な任務を遂行するには自分の死を前提条件とするべきだろう。

それを考慮して考えるならば、ブラッドとジーンの襲撃を受けて多少なりともコタンの村が混乱している今、仕掛けるべきだろう。

混乱が収まってしまえば魔女を見つける前に先程のようにナガトとジライヤの手によって撃退される可能性が高い。

確認が最優先と言うならば最悪戦闘を行い、死んで逃げると言う手もあるのだ。

更に付け加えるならば幼い容姿の冒険者と言うものはレアであり非常に目立つ、遠目にでも確認することは可能だろうと考えた。

コタン村の入口ではナガトとジライヤが二手に分かれるのが確認できた。

別々に残党の確認を行うつもりらしい……その行動をみて安堵の息をもらす。

2人で入口の傍にいられたら動きようがなかった為である。

アランは背負い袋から黒いローブを取りだして普段着ている防具の上羽織る。

姿を上手く隠しながら村の中へと侵入した。

自分を見ている者が居ないことを確認した後、〈暗殺者〉の身体能力をフル活用して近場の家の屋根に登り伏せながら周囲を伺う。

村の様子を伺いやすく見つかりにくいポイントを見つけ出し屋根伝いにそちらへと向かっていった。

どうやら、誰にも気がつかれなかったらしい。

自分の幸運に感謝しつつ、他人に見つからぬように伏せた姿勢でコタン村を伺う。

この家の屋根ならば周囲の家のお陰で見つかりにくく、また村を一望する事ができた。

そうやって、辛抱強く村の様子を観察していると、村の入口へと空飛ぶ箒を使って急行している雷鳴の魔女を発見した。

他の仲間と合流するつもりなのだろう道沿いに低空飛行して向かっているようだ。

アランは無事目的を発見する事が出来た事に安堵した。

どうやら幸運の女神が微笑んでいるようだ、がらにもなくそんな事を考えながらアランはホロウに連絡を取ることにした。

報告さえすれば任務は終了、後は帰還呪文でも使えば良いだけの話である。

念話を繋げる際に蘇ってきた殺意や怒りを押し殺しつつ、ホロウへ連絡を取る。

『――：ホロウ様、雷鳴の魔女を確認しました。』

『ほう、早かったな。御苦労……ついでだ、実力を確認したい。仕掛け――』

ホロウの死ねとしか取れない命令にアランは怒りで目の前が真っ白になった。

それが不味かったのだろう。

ホロウの言葉が終わる前にアランは背後から紫電を纏う刀に貫かれ

ていた。

〈暗殺者〉の特技が一つへパラライジング・ブロー。

突如受けた攻撃によってホロウとの念話が途切れてしまった。

最悪のミスを犯した己をアランは呪いつつも、その身体は麻痺で自由が奪われている。

指を一本も動かす事が出来ないアランはその場に倒れこんでしまった。

振り向く事も出来ないアランの背後から加害者の声が聞こえてくる

「お主らの狙いはソルシエール殿とチェルシーでござったな。ニンニン」

「ま……じよは、おとり……ですか。」

「正解でござる。ソルシエール殿から提案されたのでござるよ。そちらの方が確実に対処ができる」と

この独特の喋り方はコタン村の冒険者、ジライヤのものである。

ジライヤの言葉の中に宿る冷え冷えとした刃にアランは歯噛みする。

生捕りにしたのはPKをしたくないなどと言う甘い話ではないだろう。

PKなどよりも余程過酷な手段で情報を得る為にアランを捕えであろうことは想像に難くない。

最悪の展開にアランは絶望的な気分陥った。

一方ジライヤは想定以上に上手く行った事に安堵の息を漏らしていた。

ブラッドとジーンの言により、相手の目的はソルシエールとチェルシーであると言う事が判明していた。

村の入口へ向かうルートを予め決めておいて、そのルートにそってソルシエールを移動させる。

そのソルシエールが通るルートの中で見張りやすい場所をしらみつ

ぶしに当たっていけばよい。

敵が居るのならそこにいるのは間違いないからである。

初めは提案を受けたナガトも難色を示したらしいがチェルシーを囚にするわけにもいかず、それ以上良い案が浮かばなかったのでやむを得ず採用することにした。

ジライヤも止めて欲しいと考えていたが、確実性を求める為にそれをのんだのだ。

後、ソルシエールならば大丈夫だろうと言う技量に対する信頼もあったのだが……

また、ソルシエールも攻められにくく護りやすいルートを選んでいた為、万が一ジライヤが間に合わなくても十分に返り討ちにする事ができる状態であった。

それはともかくとして、ターゲットを探すために集中力を奪われた敵を仕留めるのはそう難しい事では無い。

探し物をしている相手の背後をドツけばいいだけなのだから……このような狡猾な戦術を好んで使うため、ソルシエールは有数のPKなどと持て囃されるのである。

ジライヤはそんな事を思い起こしつつも背負い袋から縄を取りだしアランを縛り上げた。

「お主を拘束させて貰うでござる。情報を吐いて貰わねばならぬかな。」

想像していたよりも悪い展開にアランは内心焦りを覚えた。

どうにかして自害をしたいのだが、縛めるロープと猿轡がそれを許してくれそうにない。

芋虫のように縄で巻かれたアランをジライヤが背負い運んで行く。アランを運びながら、コタン村を護るために非道な手段を使ってもススキノの情報を手に入れなければならないと考えていた。



ここはエッゾ帝国のプレイヤータウン、ススキノにある銀牢寿のギルドハウス。

エッゾ帝国独特の勇ましさを感じさせる見事な内装で飾られていた室内が夜盗の群れにでも荒らされたような無残な姿を晒していた。

否、今もなお夜盗のような姿をしたエアロがテーブルを砕き、椅子を粉碎し壁に掛けられた装飾を破壊している。

エアロが荒れているのはブラッドとジーンがロクな抵抗をする事すら出来ず返り討ちにあったことが原因である。

今のススキノでこのような情けない真似をすれば他のギルドに舐められギルドの格が落とされてしまうのだ。

それを十分に承知して居るエアロは激怒し、ギルドの内装に八つ当たりをしていた。

しばらくは、ギルドの格を下げない為に格下の組織を吊るし上げなければならぬ。

エアロにコタン村のを件報告したホロウも冒険者同士の争いの面倒さは嫌というほど思い知っている。

だが、ホロウにしてみれば銀牢寿は今回の件で潰しアヘンを手土産に他の組織へと移籍するつもりだったため全く気にしては居なかった。

アランが捕えられたのも残念ではあるがさほど気にする事でもない。不甲斐なく追い払われた2人は帰還すると早々に大地族の女を連れて部屋に引きこもった。

ナガトとジライヤにあっさりとあしらわれた憂さをぶつけるつもりなのだろう……しばらくは出てくる事はあるまいとホロウは考えた。エアロはようやく落ち着いてきたのか、荒い息を吐きながら無事に残った椅子に座り込み、苛立たしげな視線をホロウに向ける。

ようやく話が続けられるかとホロウは嘆息し、コタンの村での一件を報告し始めた。

「気は済んだかね？ 済んだのなら報告を続けたいのだが……」

「ああ、続ける。クソッ……役立たずどもがアイツら、女一人浚えねえのかよ。」

「確認すらままなかったらしい。アランを派遣していて正解だったよ。」

それ以前だとエアロの言葉に突っ込みを入れながら、ホロウは内心冷笑する。

冷笑しつつも、魔女の狂気を見るにはやはり能力、覚悟そういったもの足りないかと落胆する。

そもそも、銀牢寿の冒険者が所持する特技で中伝止まりなのだ。

ホロウとて奥伝を少し手に入れられた程度である……レベルこそ高いが戦闘経験が乏しい素人集団であった。

ただし、アランは秘伝まで手を出しているそうだがそれは例外と見るべきだろう。

いっそのこと楽しみの方を切り替えるかと考えながら、ホロウはエアロに報告を続ける。

「アランは魔女を確認後、連絡が取れなくなった。恐らくコタン村の連中に捕えられているのだろう。」

「あん？ ちっ……そのうち死んで帰ってくるか。」

「ああ、その通りだな。アランが捕らわれた事よりもブラッドとジーンが殺された事の方が問題だ」

「分ってるよ。クソッ、舐められっぱなしじゃ示しがつかねえ……コタン村の連中を皆殺しにでもするか」

「それだと示しはつくな。」

エアロの以外にも建設的な意見にホロウは内心感嘆する。

馬鹿もたまには役に立つと内心罵りとも誉め言葉ともつかない発言をしホロウは唇を歪めた。

コタン村の大地族を皆殺しにすればススキノでの発言力は上昇するし、芥子畑をそっくりそのまま手に入れる事が出来る万事に置いて良い結果をもたらせるとホロウは考えた。

人手が足りなければそこら辺の村から徴発して働かせればいい、大地族なぞ雨後の筍のように増えて行くのだから。

だが、手段が問題になってくる。

単純に攻め込んだとしても技量の低い銀牢寿では間違はなく返り討ちにあって終わりだろう。

故に搦め手が必要になってくる……どんな手段を用いるべきだろうか？

そう考え、何か思いついたのだろう唇が喜悦に歪んだ。

自分の発言で生まれるであろう地獄、大地族達の嘆きを想像しただけでホロウの股座がいきり立ちそうになる。

「クッハッハッハ、エアロよ。……策が浮かんだぞ。コレを実行すれば奴らを一網打尽に出来る。」

「ほう、流石じゃねえか。んで、どーするつもりだあ？」

エアロも大地族で出来た屍の山を想像したのだろう。

早くそれを作り上げたいとばかりに涎を垂らしながらホロウに視線を向け続きを促した。

ホロウは勿体ぶるように指を振りながら、背負い袋より薬液の入ったガラス瓶を取りだす。

そのガラス瓶は〈狼殺し－Wolfbane〉とラベルで明記されていた。

ポーシヨンの類を普段使わず、あまり詳しくないエアロはラベルに記された薬液の名前に心当たらないようだ。

不審そうに首を傾げながらホロウを見る。

そんなエアロに対してホロウは、低能めとでも言いたげな視線を向けた後薬液の説明を始めた。

「おらあポーシヨンの類はつかわねえからしらねえんだよ。こりやなんだあ？」

「……まあいい、説明してやろう。コレは〈狼殺し—Wolfbane〉、俗にトリカブトと呼ばれるものだ。」

「へえ、コレがトリカブトか……んで、どーするんだ？」

そこまで言っても理解できないエアロに対し、あまりの察しの悪さにホロウは苛立ちを覚えた。

しかし、所詮は使い捨ての駒である余り賢いようではそれはそれで問題だと考え我慢することにした。

今回で銀牢寿は終わるのだ……そう考えれば親切に説明してやる気にもなる。

〈狼殺し—Wolfbane〉を持ち上げて出来の悪い生徒に教える教師のように振る舞う。

「いいか？コレをな。コタン村の井戸に流し込むんだよ。そうすりゃ、井戸水を飲んだ大地族の屑共はバツバツと死んでいく。大地族を皆殺しにした後、攻め込めば良い。連中は死んだ大地族のことで手いっぱいどころちの対処なんてできやしねえよ。」

「ふはっ、良いじゃねえか。おめえはよ……最高だぜえ、エアロ。想像するだけでいきり立ちまうよ。」

だらだらと涎を垂らしながら、エアロはそういつて馬鹿笑いを浮かべる。

エアロにとって最大の娯楽は力のない者が苦しんで死ぬ様を眺める事であった。

子供があまりの巢に水を流し込んで全滅させるかのように、エアロは大地族の村に毒を流し全滅させる。

所詮はNPCであり、殺したところで犯罪ではないのだ。

泣き喚いて死ぬ様が面白くて、エアロは何人もの大地族の人間を素手で解体していた。

かつて大航海時代、新大陸にやってきた者達が行った蛮行を〈冒険者〉達が繰り返す。

コレが歴史が繰り返すと言う事なのだろうか？

『NPCは人では無い。だから、何をしても良い』と言う免罪符はどこまで通じるのであろうか。

その免罪符を掲げて〈冒険者〉達はどこまで己の魂を汚すつもりなのだろうか……

少なくともエアロ達は子の快楽を追及するつもりであろう事は間違いない。

ひとしきり笑い終えたエアロは粘つくような笑みを浮かべてホロウを見た。

「ヤレ。後、特等席を用意しろ……大地族が苦しんで死んでいく様をたっぷりと観察してえからな。」

「ああ、所詮はNPCだ。何をしても問題はない……むしろ冒険者の娯楽になって死ぬのだ。これ以上の栄誉は無いだろう。」

「くかかかかかかッ！！最高じゃねえか！！俺達が大地族の連中に名誉を与えてやるんだ。早くやろうぜ」

「アヘンも早いところ量産せねばならん。さっさと終わらせよう。

二日後に出発すると他の奴らには伝えておく。」

「おお、任せたぜえ。へっへっへ、ああ、死体の前でカラカンチの女共を犯すのも良いなあ。きつとすげえ声でヨガってくれるぜえ」

「……妄想も結構だが準備は怠るな。」

そう言い残すとホロウはエアロの執務室を立ち去った。

全ての準備が終わり襲撃出来るのは二日後、更にコタンの村に辿り着くまでに二日、決行は五日後となる。

どうやって毒を流すべきかを考え、本当ならば自分がやりたいのだがグレゴールに譲ってやることにした。

自分達のギルドメンバーが犯した罪をすればカラカンチの連中はどんな反応をするだろうか……今から楽しみになる。

どうせココで銀牢寿は使い捨てる予定なのだ派手に浪費するべきだろう。

後、グレゴールにはコタン村に戻らぬように伝えねばならない。

アランが情報を吐かされた場合、〈狼殺し－Wolf sbane〉を井戸に確実に入れる事の出来る者が居なくなってしまうからだ。楽しみが阻害されるのは面白くない。

邪魔されぬように手を打っておくにこしたことはないだろうと考える。

そして、コレが成功すれば魔女は怒りを持って銀牢寿を追うだろう。あの魔女は極度に道を外した行為を激しく嫌う。

もし、この件が成功すれば〈狼殺し－Wolf sbane〉を使用した銀牢寿のメンバーを八つ裂きにするまで追い続けるだろう。

もしかしたら、今までとは比にならぬ狂気を見せてくれるかもしれない。

そう考えるとエアロは楽しくて仕方が無い。

早く決行日が来ないものであろうかと愛しい人に恋い焦がれながら待つ初心な青年のような心持ちだった。

ふと、アランへの人質の事を思い出したが放っておくことにした。これ以上管理する必要も無いだろう……欲しければ持っていけばいい。

金牢寿を破滅させると決めた以上、既に無用の長物である。

どうにでもなってしまうと考え、それ以上その事に思考を割くのを止めた。

移籍先のギルドを考え、アヘンの生成に必要な芥子に関する資料や

その土地の領主のアキレス腱を纏めた書類を纏めて自分の銀行に放り込んでおく必要がある。

ホロウはコタン村への襲撃をする二日後までにそれらを行ってしまわねばならない。

さてと忙しくなると考え速足で廊下を歩き始めた。

全ての準備を終え、すっきりした気持ちでコタン村の悲劇を見物しよう。

ホロウは、ほくそ笑みながら自分の執務室へと向かっていった。

04 (後書き)

私はログ・ホライズンの現状を大航海時代に新大陸を発見した状況と同じだと考えています。

大地族Ⅱネイティブ・アメリカン，冒険者Ⅱ入植者です。

今の私だと週一ペースが限界かな（苦笑）

05（前書き）

5話目です。

次で狼殺しは終了します。

カラカンチのギルドハウスにある一室。

セリアが作成した武器を収納するために作った物置用の部屋だ。

もっとも、セリアの武器を求めてやってくる商人が根こそぎ買って行ってしまったため今まで使われることはなかったのだが……

今、その部屋にコタン村でも戦闘に長けた冒険者達が集まっていた。ナガトにジライヤ、ソルシエール、そして、セリア。

部屋の中央に転がされているアランがこれから何をするのかを物語っていた。

ナガトとジライヤは怒りを押し殺した表情で黙り込んでおり、ソルシエールは部外者故に口出しを避けていた。

自然、カラカンチのギルドマスターであるセリアが尋問を行うことになる。

「――：猿轡を外して、これから尋問を開始するわ。」

表情を陰しくし、ジライヤに猿轡を外すように指示する。

その言葉にジライヤも頷き、アランから猿轡を取り外した。

現在のアランは縄で縛められて芋虫のようになっているがこればかりはいたしかたない。

高レベルの冒険者は捕えておくのが難しく、隙を見れば逆襲しかねないからだ。

〈暗殺者〉など高火力の職業であればなおさらである。

猿轡が取られたことを確認したセリアはアランに対しゆっくりと声をかけた。

「始めまして、銀牢寿の〈暗殺者〉さん。貴方達がこの村に来た目

的について話して貰えないかしら？」

「――：初めまして、私はアランと申します。：カラカンチのセリアさん。」

セリアの質問に対し、アランは自己紹介をすることで回答することを避ける。

どうするべきか、と思考しながらアランは相手を刺激しないように慎重に言葉を選ぶ。

最悪と言っても良い状況の中でどうにかして光明を見つけ出そうとポーカーフェイスを保つ。

一方セリアはアランの返答に内心驚いていた。

今まで見てきた銀牢寿のメンバーは、口汚く罵りこちらを激怒させるような発言をするか、媚を売るかその二つぐらいしかできないような人間ばかりだった。

どうしてこのような人間が銀牢寿に加入しているのだろうか？

セリアは少し興味を覚えた……それはアランが期待していた反応である。

だからといって、尋問の手を緩める程セリアは甘い人間では無い。

「自己紹介よりも、私の質問に答えて欲しかったのだけど」

「私のギルドのギルドマスターは厳しい人でしてね。貴方の質問に答えれば裏切り者のレッテルを張られるんです。そうなると非常に大変なんですよ。」

「今の状況よりも悪くなることはないと思うのだけど？」

「いえ、間違いなく今よりも悪い状況になりますよ。」

アランはポーカーフェイスを崩すことなく、セリアの質問をはぐらかす。

セリアの言うとおり今の状況は最悪に近い。ただし、最悪に近いだけで、最悪では無いのだ。

アランにとって最悪とは人質に取られた『お嬢様』に危害が加わることである。

故に方に一つでもその可能性を排除するためにセリアの質問に答えるわけにはいかなかった。

セリアはアランのガードの硬さに舌を巻く。

言葉遣いが丁寧な為、こちらでも感情的になる事はない。

むしろ、感情的にさせないように言葉を選んでいるような節も感じられた。

どうしたものかと考えていると、セリアはナガトがカトラスに手をかけている事に気がついた。

そっと手で押さえ、それを止める。

ナガトはセリアに納得がいかないと目で訴えるがそれを黙殺した。拷問だけはやりたくなかったし……痛みに鈍感になっている〈冒険者〉にどれほど有効か分らなかったからだ。

目の前のアラン相手では意味が無いかもしれない。

アランへの尋問も忘れ、どうしたものかとセリアは悩み始めた。

「セリアよ。妾が変わっても良いかな？」

部外者のため、発言を控えていたソルシエールがセリアに許可を貰う。

ナガトやジライヤも驚いたが、セリアは少し考え許可をした。

どうしたものか悩んでいる自分よりは第三者の目で見ていたソルシエールの方が冷静な意見を持っているかもしれないと淡い期待を抱いたからだ。

「うむ、感謝する。さてと、アランじゃったな。……そなたらの目的は妾じゃな？」

「……」

「そう沈黙せずとも良い。そなたの前にこの村を訪れた脳足りん共

がそういつておったそうじゃからの。」

ソルシエールの発言にアランは動揺した。

こうもストレートに問いかけてくるとは思っていなかったからだ。

そして、その言葉はアランに対する逃げ道を用意していた……そう、もう既にばれているのだから今更アランの知ることを言ったところで秘密を漏らしたとは思われないと言う。

アランは動揺し、冷静になっていくつもりだったがソルシエールが用意した逃げ道へと誘導されてしまう。

ブラッドとジーンが堂々と目的を告げる様を見届けていた為、それはなおさらだ。

このまま悪い方向へと流れて行くよりはこのこともあった。故に誘いに乗るままに答えてしまった。

「……ええ、雷鳴の魔女。貴方を銀牢寿へ迎え入れる事が目的です。」

「何故じゃ？」

「それに関しては存じておりません。私は末端の手足ですから……」
「ふむ、そなたを使い捨てても構わなくなったということかの。」

ソルシエールの言葉に対しアランは沈黙した。

難易度の高い任務は何度かあったが、ここまで堂々と使い捨ての駒にされたのは初めての経験であった。

使い潰すのが目的ではないかという疑念がアランに生まれる。

ならば何故と考える……絶望的な想像が脳裏をよぎった。

だが、それはアランの推測でしかなく。また、それを行った場合のリスクも相手は認識している筈である。

疑念が浮かべば動揺も浮かぶ、アランの冷静さは時を追うごとに削られていった。

それでもアランは最後の一線を越えられずにいた。何故ならば、そ

れを超えればお嬢様へ危害が高確率で及ぶからだ。

ソルシエールはあえて相手の不安を煽る言動をして裏切るとまでい
かなくても冷静さを奪おうと考えていた。

粗暴なモノは粗暴な底が見える筈なのだが、銀牢寿のメンバーにし
てはアランの態度は冷静なモノでこちらを怒鳴りつけると言う行為
もしなかった。

不安や動揺を抑え込み紛らわす為に叫びだすこともしない。

ソルシエールとセリアは内心首を傾げる。

銀牢寿のメンバーと言うにはあまりにも雰囲気の違いすぎないかと
……

だが、ナガトとジライヤはそんなアランの態度が気に食わなかった
ようだ。

目の前で大地族の少女の無惨な死を見ているのだ、冷静さを保てと
言う方が無理がある。

故に苛立った様子で口を開いた。

「それ以上情報を持ってないなら、後は殺して送り返せば良いんじ
やねえか。」

「拙者も賛成でござる。」

その言葉にセリアは眉をひそめた。

セリアは残酷な行為を好まない、戦いの結果であればともかくそれ
以外の場面で殺す事が出来ないとはいえ殺人はやらせたくないかった。
救いを求めるようにソルシエールを見るが、彼女は表情一つ変えて
いなかった。

それも有りだと考えているのだろうか……だとすれば、残酷に変わ
ってゆく〈冒険者〉達の心が怖かった。

故にセリアはナガトとジライヤの求めを拒む。

「駄目よ。捕えた捕虜を殺すのは『ススキノの連中』と何も変わら

ないわ。」

「綺麗ごとは止めてくれ。どの道コイツを捕えておく場所も無ければ見張りに避ける人間もないんだ。殺すしかないだろう。」

「……こやつらは大地族の少女を愛玩の道具にした挙句、笑いながら踏み潰したのでござる……生かしてはおけぬよ。」

怒りのあまり冷静さを失っているナガトとジライヤをみてセリアは内心嘆息する。

ナガトとジライヤの言う言葉は正しい。

エルダー・テイルに置いて〈冒険者〉は非常にたちの悪い存在であると言っても間違い。

その理由が死ぬことが無いと言う事と高レベルの冒険者に対抗できる存在が非常に少ないと言うことである。

殺しても意味が無く、監禁しようにも見張りが調達できず、解放するわけにもいかない。

反論の理由はセリアの感情的な嫌悪感でしかない。

だが、それを認めたくないのだ……そんな事をすれば奴らと何も変わらなくなってしまうそうだから。

アランはその様子を観察しながら千載一遇のチャンスが巡ってきたことを理解した。

ナガトとジライヤの2人は怒りで冷静さを失っており、セリアはそんな二人を説得しきれていない。

ここで一つ爆弾を投下すればためらいなくナガトとジライヤはアランを殺すだろう。

アランとしては早いところ殺して貰ってお嬢様の様子を確認したいのだ。

そんな4人の様子をソルシエルは冷静に見つめていた。

「私はナガトさんの言う哀れな少女を調達し報酬として配布する任務も承りました。」

「そうかい…」

アランの言葉を聞いたナガトは目を開き強く歯を食いしぼる。

ジライヤも刀を抜く、これ以上制止しようとすれば身内での戦闘へと発展するだろう。

ナガトとジライヤは怒髪天を衝いていた。

セリアも止める事が出来ない…：銀牢寿の仲間は殺すしかないのだろうか。

そんな絶望感がセリアの心の中に過る助けを求めるようにソルシエールを見ると彼女は苦笑してナガトとジライヤの前に立ちはだかった。

「ナガトにジライヤよ。少し落ち着くが良い。」

「邪魔をするな、ソルシエール。お前が殺すべきではないなどと言うつもりはないのだろうか？」

「無論言わせて貰おう。コヤツは殺すべきではない。」

「何故でござるか！？ソルシエール殿が奴を助ける義理など無い筈！！！」

ソルシエールは怒りで我を失いかけているジライヤとナガトをぞつとするような笑みを浮かべ見上げる。

それを見た2人は気圧されたように後ろに下がるが諦めた様子はない。

そんな2人を見ながらソルシエールはアランに視線を向ける。

対多数の戦闘には定石が存在する…：コレを知らぬものは数によって蹂躪されてしまうだろう。

それは戦いの流れを相手に渡さないことだ。

アランは現在その定石を護り自分の望む結末へと向けようとしているようにソルシエールには見えた。

このままアランの思い通りになるのは業腹である。

故にソルシエールは流れを変えてやることにした。

「ふむ、ならば言い変えよう。こやつは殺して欲しいという望みをかなえるべきではない。もしかすれば、銀牢寿が戦力を必要とするやもしれぬからの」

その言葉を聞いたナガトとジライヤは押し黙る。

納得できる話であり、それがどういう結果を生むのか判断できる頭は残っていた。

一方、アランは自分が誘導した方向からそれ始めたことに焦りを覚えた。

とは言え、ここで何かを言えば逆効果になってしまう。

アランはソルシエールに自分の生殺与奪権を奪われたことを自覚した。

だが、アランにも希望の目はあった。

ナガトとジライヤはそれでも納得できず首を横に振ったからだ。

首を振った2人を見て少し考えると、アランに視線を向ける。

アランとソルシエールの視線が交わった時、肉食獣のようにソルシエールが笑いを浮かべた。

まるでアランの希望を断ち切らんと言わんばかりに

「ならば、〈妖精の輪〉に投げ込めばよい。運が良ければ相手の戦力を減らせるやもしれぬ。」

「なっ!？」

ソルシエールの発言にアラン表情を蒼褪めさせ、他の3人は絶句した。

誰もが思いつきもせず、思いついたとしても試そうとは思えない最悪の手段を何でもない事のように言ってる。

もし、大神殿のある放置されたエリアに飛ばされようものならこち

らに戻ってくるのにどれぐらい時間がかかる事か。

また、ダンジョン等戻ることが難しいエリアでもそれは同じだ……
およそ、エルダー・テイルの冒険者にとって最も過酷な罰と言える。
そして、この童女はやるといった以上必ずやるだろう。

アランは嘆息する。そして、自分が相手を甘く見過ぎていた事を自覚した。

こうなった以上降伏しかないだろう……自分の持つ情報でそれを避けなければならない。

それにセリアは人が良い人物のようだ事情を話せばそう悪いようにはならないだろうという計算も働いた。

「参りました。流石は”偏執狂の一パラノイア” ソルシエールですね。」

「ずいぶん懐かしい呼ばれ方じゃな。それで参ったと言う事はこちらの軍門に下るということかの？」

「ええ、ひとつだけ条件を飲んで頂ければ、そちらの軍門に下りましょう。」

「セリアよ。どうする？」

ソルシエールの話を聞いてどうにかして止めなくてはと考えていたセリアは急な話の変化に目を瞬かせる。

そして、自分に話が降られたと言う事に気がつき、ひとつ咳払いをする。

ギルドマスターとしての仮面を被り、慎重にアランの言葉を反芻した。

「ええっと、そうね。条件の内容によるわ。」

「なるほど……私は銀牢寿の手により人質を取られております。彼女を奪還するのに協力をして頂けませんか？」

「……分ったわ。それを飲みましょう。皆も良いわよね？」

「それが真実ならばな。」

ナガトの言葉にジライヤとソルシエールは頷いた。
内容は信憑性が疑わしいと3人は考えていた。
とっさに思いついた人間が良い出しても不思議では無い内容だ。

「……そうですね。私の齎す情報が真実だった場合信用していた
だけませんか？」

「悪くない条件じゃ。まあ、情報の内容にもよるがの」

確かめようがないようなことやくだらない内容ではどうしようもないぞと釘を刺す事を忘れない。

アランは苦笑しながら取引に使える情報を検索する。

ギルドの信頼にひびを入れることになるが内通者の情報が良いだろう。

この情報は少し前に運んだ報酬の件もあるので証明しやすい。

万に一つ内通者が逃げ出していたとしても今まで溜めこんだ持ち運べない報酬は証拠として十分価値があるだろう。

そう考えると一つ頷き、セリア達を見上げる。

「この村の情報を銀牢寿に流している内通者の情報などいかがでしょう。」

「……貴重な情報ね。」

内通者と言われセリアは心当たりが一人浮かび上がった。

違って欲しいと願いながら動揺を無理やり押し殺しアランに視線を向ける。

声が震えるのは仕方がなかった。

そんなセリアにナガトとジライヤは痛ましいような視線を向ける。
誰がそれをやっているかはナガトとジライヤにも想像がついた……

そうだとでも不思議では無くやはりかということになるだろう。

「内通者の名前はグレゴール、二日ほど前にチェク村で報酬を渡しました。二日前に運んだ報酬はどこの誰かは存じませんが貴族の娘です。」

「……そう」

セリアは当たって欲しくない予想が当たったことに歯を食いしばる。直観的にアランが嘘を言っていないだろうと言う事が分る。

その為、ギルドマスターであるセリアは引裂かれるような痛みを感じていた。

ナガトやジライヤも押し黙り、セリアを見る。
ソルシエールはそんな3人の様子に嘆息する。

「セリアよ。確認の取れていない情報で一喜一憂しては身が持たぬぞ。」

「え、ええ、そ、そうよね。……私はチェクの村に向かうわ。この目で確認してきます。」

「――拙者も同行するでござるよ。一人で確認に行くのは危険でござる。ニンニン」

「お願いするわ。」

そういうと、窓を開けてロック鳥を召喚する。

そのまま飛び乗り、ジライヤが乗ったことを確認すると空高く跳び上がっていった。

相当慌てているようで、周囲の事にかまっていられないようだ。

ロック鳥の羽ばたきで巻き起こった風を堪えながら、残された3人はセリア達を見送った。

「……グレゴールの馬鹿野郎があんなに気にかけていたセリアを裏

切りやがって」

「言葉を尽くしても態度で示しても通じぬ馬鹿はおる。」

「グレゴールはいると思うか？」

「居らん。少なくとも捕虜が捕らわれた時点で身内の情報は漏れていると考えている筈じゃ。」

「そうか……」

「じゃが、運が良ければ報酬は残っておるやもしれぬ。」

「つまりはそいつから聞きだす事が出来ると言う訳か……」

「うむ……」

ナガトはそれっきり黙り、ソルシエールもそれに合わせて沈黙した。数時間後、セリアが気品のある大地族の少女を連れて戻ってきた。その表情は憔悴し悔いに満ちていた。

ジライヤも俯き、歯を食いしばっている。

そしてセリアは血を吐くような声で、アランの言ったことが真実であったと告げた。



ホロウは基本的に用心深く安全策は二重にも三重にも凝らす性格であった。

とは言え、その安全策は徹底されたものという訳ではなく無いよりはマシという程度であるが。

グレゴールにもう一つ用意しておいた村へと移動しておくように指示をしていた。

本人達はあずかり知らぬことであるが、それによってグレゴールがカラカンチに捕えられると言う最悪の事態を防いでいたのだ。

何も無い村の中でグレゴールは退屈を持て余していた。

貰ったばかりの報酬を持って来たかったのだがこちらまで連れてくる方法が無く。

暴れられたり逃げられたりした場合、指定された時間までに到着する事が出来ないことが予想されたため連れてくるのを諦めたのだ。頑丈に造られた家に頑丈な鍵をかけてきたため、逃げられることはないと安心していた。

まあ、ホロウから受けるであろう仕事が終わった後の楽しみに取っておけば良いかと気楽に考えていた。

グレゴールがこの村に来てから既に4日が経過していた。

ホロウの話では今日グレゴールに対して仕事の依頼をするらしい。報酬も相応に色を付けると言う話なのでグレゴールは気合が入っていた。

リングを齧りながら暮れて行く空を見上げていると、北の空から巨大な鳥……ロック鳥が飛んできた。

ようやく来たかと、リングのかすをそこらに投げ捨てると立ち上がり、ロック鳥の居る方向へと歩いてゆく。

ロック鳥はホロウを一人下ろすと再びススキノへ向かっていった。ホロウはロック鳥を見送ると視線を村へと向けた。

村の方からグレゴールがホロウの元へ走ってくる姿が見えた。

グレゴールのを見ながら、これからコタン村で起きるであろう惨事にホロウは心を躍らせていた。

普段は無表情のホロウの顔に粘つくような笑みを浮かびあがる。

「グレゴール、早速だがやって欲しい仕事がある。報酬も破格のモノを用意しようやってくれるな?」

「へ? 破格ってなんですか? グレゴールさん」

「――…貴族の奴隷を2匹だ。」

「へっへっへ……任しておいてくださいよ。それもらえるんなら何だってこなしちゃいますよ」

報酬に拘るグレゴールの強欲さに辟易としながらホロウは報酬の内容を言ってやった。

どの道、今日で銀牢寿は終わるのだどんな空約束を問題はあるまい。普通ではありえない破格の報酬を提示してやるとグレゴールの顔がこれ以上なく緩んだ。

先に渡した貴族の娘の肢体に溺れたのだろう……グレゴールは欲望に目をぎらつかせながらホロウを見る。

ホロウはそんなグレゴールの浅はかさを内心嘲笑しながら、鞆の中から〈狼殺し―Wolfbane〉を取り出した。

グレゴールは〈狼殺し―Wolfbane〉を見ながら首を傾げる。

ホロウはエアロと同等に察しの悪いグレゴールに苛立ちを覚えながら辛抱強く耐え、説明してやることにした。

「これは〈狼殺し―Wolfbane〉と呼ばれる毒だ。こいつをコタン村の井戸に放り込み、コタン村の大地族どもを皆殺しするのがお前の仕事だ。」

「へっ？そ、そんなことやって大丈夫なんですか？」

「何、NPC如き死んだとしても新しい奴らが沸いてくる。それよりも反抗的な奴らがいる事が許せん。」

「あーなるほど、所詮NPCですしねー。殺したところですぐ沸くんだ。アレだ……雑草を刈り取るのと一緒にすね。」

「言い当て妙だな。コタン村の大地族という雑草を取った後、我らに忠実な草を植える。」

感心したようにグレゴールの発言を反芻しながらホロウは答えた。雑草や害虫の駆除は〈冒険者―ニンゲン〉の仕事だ。

殺虫剤の代わりに〈狼殺し―Wolfbane〉を使うのも言い当て妙だとホロウは考えた。

余程気に入ったのか楽しげに笑い、押しつけるように〈狼殺し―W

olf sbane」をグレゴールに渡した。

「お前の仕事はコタンの村にいつて井戸に毒を流し込む事だ。今晚中に全ての井戸に流しこめ、そうでなければ限が無いからな。」

「雑草狩りっすね。へっへっへ、こんな仕事で貴族の娘が2人かよ。ぼろ儲けじゃねえか」

そう言つてグレゴールはだらしなく頬を弛めながら声を立てて笑う。セリアへの恩などグレゴールは一切感じていなかった。いや、グレゴールはコタンに住む大地族や冒険者達を憎悪していた。グレゴールは〈大災厄〉前はごく普通の大学生であった。

勉強よりも遊びやバイトにかまける……まあ、日本では良く見るタイプの大学生だ。

〈大災厄〉が発生し、モンスターと戦うもその恐怖に耐えきることができず、逃げ出してしまった良くいるタイプの冒険者だ。

そんなグレゴールがススキノにはびこる暴力に勝てる筈も無く、早々とススキノから逃げだし、たまたま出会ったセリアに拾われコタン村について行った。

サブスキルもロールプレイ用の〈騎士〉を選択しており、生産系では無かった為アリアのように純生産職として生きる事もできなかった。

コタン村で蓄えを切り売りし先細りして行く生活……更に後輩のライ達にもうとまれていた。

そんな先の見えない生活をしていたグレゴールにホロウの魔の手が伸びるのは当然のことだったのかもしれない。

ホロウはそんな彼に金を与え、酒を与え、女を与えた。

最初は残滓のように残っていた良心の呵責に耐えかね受け取らなかつたグレゴールも背に腹は代えられず少しづつホロウの与える者に手を伸ばし、最後に女に手を伸ばしたとき、残されていた良心が消えて無くなった。

むしろ女に手を出した途端のめり込んでしまったと言っても良い。
ホロウが導いた邪悪へと魂を売り渡したグレゴールの心は既に腐臭
すら漂わせていた。

もう引き返せないし、引き返すつもりも無いだろう……ホロウはそ
んな自分が邪悪へ落とした成れの果てを更にどん底得落とそうと画
策していた。

内心でグレゴールを嘲笑いながら悪魔よりも邪悪な悪意をもつホロ
ウは底なしの地獄への扉を開いた。

「今回の任務の結果如何で、カラカンチとの戦争の結末も変わって
くる。期待に答えろ、グレゴール。」

「も、もちろんですよ、ホロウさん。井戸に毒放り込むだけの簡単
な仕事じゃないですか。寝静まった後にでもちゃちゃつとやればす
ぐ終わりますって」

「くっくく、ならば期待させて貰う。」

「はい、任せておいてくださいよ。」

そう言うグレゴールは〈召喚笛〉でウマを召喚し、コタンの村へ
と進んでいった。

この様子ならば失敗はあるまいとホロウは考えながら、明日の朝起
きるであろうコタン村の最後の朝食に思いを馳せていた。

特に、コタン村の〈冒険者〉達がグレゴールの仕業だと知った日に
はどのようなことになるのか……

子供が翌日の遠足を待ちわびるかのように、グレゴールも翌日に起
きるであろう惨劇に心を躍らせていた。



コタン村の朝は早い。

より正確に言うのならエルダー・テイルの大地族の朝は早い。

電灯といった照明が無いため、夜間に照明として用いられるのは松明や焚き火、ランタンといった火を使った照明器具である。

これらは比較的裕福なコタン村の農村部であっても安い物では無い。故に、大地族の村人は節約も兼ねて早寝早起きをするのだ。

そして、村に滞在する冒険者も大地族の生活習慣に合わせていた。

吸血鬼であるソルシエールも例外ではなく夜更かしをなるべく避け夜明けとともに起きるようにしていた。

もっとも、吸血鬼は夜に活動したほうが有利なだけで朝早く起きる生活習慣が身に付けられないと言う事とは別の話であるが……

黒いゴスロリのドレスを身に纏い、村長の家へと向かっていた。

少し出遅れた為だろうか……村には村人が歩いている姿が見当たらず静けさを保っていた。

少々寝ぼけていたソルシエールはその事に気を止めず、ススキノへ行ったアランとジライヤの事を考え始めた。

セリアとジライヤが向かったチェクの村の中には既にグレゴールはいなかったらしい。

村の中央にあった元は村長の家と思われる石造りの家の中にはグレゴールへの報酬として用意されていた大地族の貴族の娘が鎖の枷を付けられ逃げられぬように閉じ込められていたらしい。

グレゴールにより酷い目にあわされていたのだろう貴族の娘は怯えながらセリアにここに連れてきた人物、そして自分を報酬として受け取った人物に関して事細かに話したそうだ。

貴族の娘の証言により、グレゴールが内通者であると言う裏付けが取れた。

その事を話したセリアの表情は沈痛であり、誰も声をかけてやることが出来なかった。

ギルドメンバーの成した悪行はセリアにとって身を斬り裂かれるような痛みであったに違いない。

保護した貴族の娘は下級の貴族の娘で銀牢寿によって家族を皆殺しにされ行くところが無いそうだ。

そのため、彼女はカラカンチで保護されることになった。

そして、グレゴールが内通者であると言う裏付けが取れたためアランの情報の正しさが証明された。

それはススキノへの人質救出作戦を実行すると言うことを意味する。とはいっても既にアランが大部分の事柄を調べ終えており、実際にススキノに行ってやるのは確認と潜入だけで済むそうだ。

ソルシエールが手伝おうと手を上げたのだが、任務の性質上隠密行動を得意とする〈暗殺者〉が最上と言われジライヤに白羽の矢が立った。

指名されたジライヤは多少不満げであったが内通者の情報をもたらしただアランを信用しないわけにはいかない。

その不満を口にするのではなく、ススキノへ同行することを了承した。

もしかしたら、アランの言葉が本当に正しいのか自分の目で確認してやろうと思っていたのかもしれない。

昨日、念話で連絡を受けたセリアの話では原因は不明であるが銀牢寿のメンバーは現在ススキノにはいないらしい。

その千載一遇のチャンスをもノにすべくジライヤとアランは人質救出作戦を昨晚決行することにしたそうだ。

成果に関しての報告は今日の昼頃報告するらしい。

銀牢寿がススキノにいない事是不気味ではあるが、ソルシエールとしてはそれが上手く行くことを祈るばかりである。

ナガトが言うには銀牢寿の行動に一々気にしていても仕方が無いらしい。

ソルシエールは直接性質面した事が無いため、それに関しては何とも判断できなかった。

そんな事をつらつらと考えていると、村長の家へと辿り着いた。

ソルシエールはいつものようにドアを軽くノックし家の中から返事

が来るのを待つ。

何故、ソルシエールが早朝に村長の家に行くかというエルダー・テイルでは料理スキルが無ければ料理を作ることが出来ないためだったりする。

だからと言ってコタン村のような小さな村落に料理屋があるわけがなく、村長の好意に甘えさせて貰う形になったのだ。

いつもならば直に返事が来る筈なのに今日に限ってはいっこうに返事が無い。

寝坊でもしたのかと考え、ならば他の村人に見つかる前に起こしてやった方が良くかと取っ手を手に取りドアを開ける。

不思議なことに鍵がかかってなくすなりとドアは開いた。

奥の部屋からかすかに血のにおいが漂ってきた。

嫌な予感を覚え、家の中に一気に踏み込むとそこには血を吐いて倒れ伏している村長がいた。

慌てて駆け寄り血で服がけがれるのも気に留めず、抱きかかえて必死になって村長に呼び掛ける。

「しっかりせよ！！村長殿！！」

だが、ソルシエールの声に村長が答える事は無い。

既に身体は冷たくなっており、死亡しているのは明白だった。

吸血鬼であるソルシエールは自分が飲む血液が飲めるかそうでないかかぎわける事が出来る。

ソルシエールの服に付着した村長の血液からかすかに毒物の匂いがした。

テーブルの上に用意されていた料理には手が付けられておらず、コップだけが床に転がり落ちていた。

恐らく村長はソルシエールを待つ間に水を飲んだのだろう。

その水に毒物が混ざり込んでおり、それが村長の命を奪ったのだ。

誰がそれをしたという疑問が脳裏を過ぎるが、それよりも他の村人

に知らせなければと考えて近くの家へ駆けこんだ。

だが、隣の家は朝食を取って倒れた家族が、向かい側の家の老夫婦も血を吐いて倒れていた。

それを見て、ソルシエールは自分の考え違いに気がついた。

村長を謀殺したのは残念ながら大地族の者だろうとソルシエールは考えていたのだ。

だが、現状はどうだ。

コタン村の大地族の住民が無差別に殺されている……こんな真似が出来るのは冒険者しかない。

恐らくではあるが、ススキノの冒険者からの攻撃であろうと思われる。

その瞬間、ソルシエールはススキノから銀牢寿が居なくなっていると言うセリアから聞いた話を思い出した。

恐らく、銀牢寿の者達は井戸か川かに毒を流し込みコタン村の大地族を殲滅しにかかったのだろう。

何のためにと言えば、カラカンチを潰す為に違いない。

気がつけばソルシエールは笑みを浮かべていた。

童女は怒りをばらまいたり他者に見せたりすることはない。

怒りや憎悪といった感情が高まり臨界点を超えると自然と笑みという形として表情に表れるのだ。

ただし、その笑みは朗らかなモノではなく見た者に恐怖や畏怖といった感情を与えるモノではあるのだが……

そして、凍りついたソルシエールの心は冷徹に敵を排除するための算段を始める。

コレが敵の攻撃だと予想される場合、次は本体による強襲が来ると予想される。

ソルシエールが経験した518の近似例を思い浮かべる。

敵がどのような攻撃をするのか予測しそれに対して最も効果的な対策を脳内に弾きだす。

――…本来であれば地獄へと送り込んでやりたいところだが、冒険

者に対して有効な手段はまだ確立されていない。

次点としては〈妖精の輪〉だが童女は不確定な手段を嫌った。

ならば、やることは決まっている。

敵がコタンの村に侵入する前に手早く仕留めるコレ以外にはないだろう。

勝手な行動をして同士討ちになるのを避けるためカラカンチのメンバーに連絡を入れることにした。

いざという時のためにセリアとナガトには念話で連絡を取り合えるようにしているのだ。

『セリアよ。聞こえるか？』

『え、ええ……聞こえるわよ。そちらでも何かあったのね。』

そちらでもという事はカラカンチでも同様の事があったのだろう。

セリアの声は憔悴しており、念話がとぎれとぎれになるのはギルドメンバーへの対応に追われている為だろうか。

『毒が混入された水を飲んだ村長殿が死亡したよ。コレは敵の攪乱じゃ、妾は強襲してくるであろう敵の本隊を潰しに行く。』

『そう……私達も行きたいところだけど、止めておくわ。私達は生き残りを探すことに専念するわ。貴方なら大丈夫だと思うけど気を付けて』

『うむ、任せておくが良い。』

それだけを伝え、ソルシエールは念話を打ち切った。

埋葬や棺桶の手配……最低でも遺体の目を閉じてやりたかったが、今は時間が無い。

時間が経過すればするほど相手方が有利になってしまう。

故にソルシエールは不義理であると承知しつつも彼らの遺体を放置した。

空飛ぶ箒を取りだし一気に空へと駆け上がる。

この手の攪乱をしてくる連中との戦闘回数は518回ほど、時間にして100時間少々。

彼らが行った手段をその対策を脳裏に思い起こしつつ、空飛ぶ箒の速度を上昇させてゆく。

そして、太陽と重なり地上から見えなくなってしまう高さまで上昇すると空飛ぶ箒を止める。

荷物袋の中に手を突っ込み、狙撃用の〈妖精軟膏―フェアリーバーム〉を取りだして使用する。

狙撃用と言われるが、このアイテムは遠眼鏡の代わりにちょうど良い。

ソルシエールは遠くの景色が引き延ばされて見える感覚に身を委ねながら敵の位置を探し始めた。

辛抱強く探していくと、大型のロック鳥が北の村の方からコタン村の方へと向かってゆく姿が見えた。

敵の様子を確認してみたが、周囲を索敵している様子はなく欲望にぎらついた目でコタン村を見ているか、めんどくさげにしているだけだった。

どうやら敵は自分達の攪乱が上手くいった為、楽に殲滅できると考えているらしい。

空中では地上よりも索敵に気を配らなければならないのにそれをする様子がなかった。

ソルシエールはその様に嘲笑を浮かべ、太陽を背に静かにロック鳥へと近づいて行った。



北の外れの廃村で銀牢寿の面々は朝日が昇るのをじっと待っていた。

2時間ほど前に戻ってきたグレゴールから誰にも見つからず全ての井戸に〈狼殺し—Wolfbane〉を流し込む事に成功したという報告を受けている。

ホロウは銀牢寿の最後の打ち上げ花火が打ち上がるのを楽しみに待っていた。

村を一つ滅ぼした以上もはや取引をするところなど存在すまい、銀牢寿はやり過ぎたのだ……最も提案したのはホロウであるが。

今まで色々と手をかけてきたが銀牢寿は所詮チンピラの集まりでありスキノを統一するには能力が不足している。

ホロウはアヘン取引のルートや技術者を個人的に確保しエアロ達にもいる場所を伝えていない。

コレを確保して他のギルド……新進気鋭の所にでも持っていけばスキノ統一は夢では無くなるだろう。

そこまで考えてホロウは今更のように気がついた。

これ以上、銀牢寿に付き合う意味など無いと言う事をここで分れて先に手を打っていたほうが良いだろう。

大地族の不様な屍を見る事が出来ないのは残念ではあるが”偏執狂”とまで呼ばれる魔女に姿を見られるのはよろしくない。

ホロウは自分の身の安全には更に気を配る性格であった。

故に魔女の怒りの矛先が向けられる可能性は減らしておきたいと考えた。

故に大地族の屍を見れないのは残念であるが、銀牢寿から逃げ出す事にした。エアロには適当に言ってごまかせば良いだろう。

そう考えるとホロウはエアロの元へと行く。

エアロは酒を飲みながら血走った目でコタン村を見つめていた。

ホロウが近づいてきたことに気がつくやと怪訝な様子で見る。

「これから先の予定なのだが〈付与術師〉の私がコタン村の殲滅戦に付き合っても仕方が無いだろう。それよりもこちらに連れて行く大地族の奴隷どもを先にみつくりっておきたいのだが構わんかね？」

「ほう、えらく殊勝じゃねえか……まあ、実際へ付与術師〱なんざいても邪魔だな。……ちやっちゃとアヘンを作る準備をしとけよ。」
「そうさせて貰おう。では、良い成果を期待しておくぞ。」

そう言うのと帰還の呪文を唱えホロウはススキノの街へと帰って行った。

エアロはコタン村で起きているであろう悲劇に夢中になっており今か今かと待ち構えていたため、ホロウの思惑など気にも留めていなかった。

否、正確に言うならばそもそも何も考えることなく受け入れたのだ。めんどくさい仕事はホロウに任せておけばいい、それが銀牢寿にとって当り前のこととなっており、その危険性に誰も気がついていなかった。

ホロウが逃げ出したなどと欠片も思わず、エアロは襲撃の準備を始めた。

「ジーン、ロック鳥を召喚しやがれ！！ブラッド今度はへまをするな！クライドも気を抜くなよ！！これからカラカンチのチキンどもをブチ殺す！！上手いことやった奴にあ、セリアとアリアを一番に喰わせてやる！！ジーン、魔女が欲しけりゃ絶対へまをするんじゃないぞ！！」

「あ、あは、あ、ああ、ソ、ソルシエルたんを、よ、ようやく、お、お持ち帰り、で、できる。」

「んな、連中よりチェルシーだよ。おらあそっちの方が欲しいぜ。」
「あー、了解」

欲望にぎらつかせるブラッドとジーンの二人に対し、クライドは興味なさそうな返事を返す。

その覇気のなさに不満げな表情をエアロは浮かべるがススキノでは希少な回復職のため何も言わない。

何故クライドがは気が無いのかというところも現状で満足しているため現状維持以上は興味が無いのだ。

一応、仕事はしっかりこなすので文句は言わないが盛り上がってきたところに水をさされた格好だ面白くはない。

面白くは無いのだが回復職だった為放置せざるを得なかった。

エアロは舌打ちをしながら、ジーンの召喚したロック鳥に乗り込む。さっさと乗れとも言いたげに3人に顎でしゃくる。

ジーンは何も分っていないのかニタニタと笑いながらロック鳥に乗り、ブラッドは触らぬ神にたたりなしとでも言いたげに肩をすくめて乗り込む、最後に残ったクライドは特に気にした様子も無く乗り込んだ。

全員が乗り込んだところでエアロは気を取り直した。

コレはジーンとブラッドの不様な敗北によって低下しかかっているギルドの格を再び押し上げる為にやらなければならないことなのだとエアロは考えていた。

しかし、実際の所は少し違っていた。

銀牢寿はアヘンの取引でその幅を利かせている組織である暴力で多少落ち目になるうがあまり関係が無かった。

だが、エアロは暴力で成りあがったと信じ込んでいた……大凡、ホロウから思考誘導された結果でもあるだろう。

故に威信を取り戻す為にカラカンチを殲滅しなければならないと信じていたのだ。

ホロウ以外はその事に気がついておらず、他の人間は流されるままにエアロの言葉を信じた。

「ジーン、そろそろ時間だぜえ！！派手に、派手に殺すぜえええええ！！！」

「う、うん、わ、分った。」

「よっしやああああ！！！」

「りょーかい」

ブラッドからの威勢のいい返答を聞いて上機嫌になったエアロはジーンにコタン村に向かうように指示する。

ジーンの指示を受けロック鳥が力強く羽ばたき、空へと一直線に駆け上がる。

今回の戦闘は大地族を毒殺することにより、そのショックで呆けているカラカンチを打ち取るというのが大雑把な概要である。

銀牢寿のギルドマスターであるエアロが上空から威圧してやれば、恐怖のあまり恐慌を起こし土下座をするであろうと考えていた。

カラカンチは女子供の集まりだと舐め切っている故の思考だ。

実際のカラカンチのメンバーはさほど甘くはないのであるが……それはさておき、500mほどの高度でエアロ達はコタン村に進んでいた。

モンスターでは無い野生の鳥でも獲物を探す為に1000m飛ぶ者もいると言う事を考えればさほど高くはない高度だ。

エアロやブラッド、ジーンは気が逸っているようで今か今かとコタン村の方へと視線を向けていた。

クラウドはどうでもよさげにロック鳥の上で座り込み、煙草に火を付けめんどくさそうに3人を見ていた。

集団戦では周囲の警戒をするのは必須事項である。

特に空中戦においては地上のそれよりも遥かに優先度は高くなる。

だが、エアロ達はそれを怠っていた。まあ、例え警戒をしていたとしても無駄ではあろう。

太陽の背に直進してくる空飛ぶ箒を見つけることはほぼ不可能なのだから……

故にこの奇襲もエアロ達では対処できなかった。

ロック鳥が何の前触れもなく硬直し、羽ばたきを止めた。

そして、空が飛べなくなったロック鳥が一直線に地上へと落下して行く。

エアロ達は抵抗すら出来ずに空中に放り出され、地上500m高さ

から墜落していった。

妖術師が呪文の一つへパラライズ。

30秒経過するか、もしくは何らかのダメージを受けるまで対象を麻痺させ続ける呪文だ。

それを上空で受けようものなら、今のエアロ達のように無防備な姿勢のまま地上へと叩きつけられてしまう。

突然の出来事に恐慌したエアロ達は何をすることもできず、悲鳴を上げながら地面へと叩きつけられた。

ソルシエールはそれを無感動に見下ろしていた。

いかに身体能力に優れた冒険者とはいえ500mの高さから叩き落とされればひとたまりも無い。

肉が潰れる音とともに銀牢寿の4人の姿は消え去った。

「518のうち3つしか例の無い最も愚かな選択肢を選ぶ奴がおるとはな……」

この程度の連中にコタン村の人々は殺されたのかとソルシエールはやりきれなくなった。

大地族にとっても、冒険者達にとっても不死の冒険者が行う悪行は非常に厄介だ。

裁く事が出来ず、殺したところで直に蘇る。

能力の高さ故に拘束することが難しく、更に言えば捕え続ける事のできる牢獄も存在しない。

それは悪人にとってやりたい放題好き勝手できると言うことなのだ。何か対策を打たねばならないとソルシエールは感じていた。

対策が打てなければコタン村の悲劇はエッゾ帝国の日常になるだろう。

今日、滅びを迎えたコタン村を見下ろしながらソルシエールは暗澹たる気持ちになった。

05（後書き）

〈ブリガンティア〉のリーダーであるデミクアスが武闘家であると言う一文を見て、エッゾ帝国の現在は北斗の拳の世界なのだなあと
いう風に理解しました。

聖帝十字稜とかやってみたいにゃあー（マテ

06 (前書き)

狼殺し完了です。

どす黒いお話にお付き合いいただきありがとうございます。

ここはザ・ナインと呼ばれるススキノで新進気鋭と言われるギルドの応接室。

質素なと言うよりも貧しい作りのテーブルと椅子だけが並んだ味気のない部屋でホロウは長時間待たされ続けていた。普通ならば不機嫌になって席を立ってもおかしくない状況で彼は苛立つ事も無く、むしろ上機嫌と言った容姿で待ち続けていた。

そうホロウはとても機嫌が良い。なぜならば『自分』に逆らってきたコタン村の滅亡、疎ましい銀牢寿の壊滅、そして銀牢寿からの他のギルドへの移籍がスムーズに行われたからだ。自分の思い通りに進む現状に気を良くしない人間はいない。それが謀略家であればなおのことだろう。しまりが無くなり始めた表情を苦勞してポーカーフェイスに戻しながら、これから先の輝かしい未来、栄達をホロウは信じて疑わなかった。世界は自分を中心に回っているのだ。そう考えるようにすらなっていた。

ザ・ナインとは〈大災厄〉後に作られたススキノ制覇を謳うギルドだ。少しずつではあるが着実に勢力を伸ばしており現在では30名程にまで成長している。アキバなどと言った他の五大都市では零細に当たる大きさでもススキノで言えばかなり大きい勢力を持つギルドになる。

大地族からみかじめ料を取り保護すると言うザ・ナインのやり方に対しホロウは生温いと感じていた。自分が入った後にそれは改革すれば良いとホロウは考える。新規に造られたギルドだけに勢いこそあるものの資金面が弱く、それが足かせとなりススキノでの勢力が思うように伸ばせない原因になっている。故にホロウが持つアヘンとその販売ルートがあれば初めから幹部として抜擢される筈である。そうなればこちらのモノ、金と女で内部からじわじわと腐らせ

て行き自分にとって都合の良い組織へと改革する。そしていずれは、アキバやミナミといった5大都市を手中に収める。ホロウの野心は燃え上がっていた。

ドアがノックされる音がホロウを妄想の中から現実へと引き戻した。銀牢寿を手玉に取ったホロウとはいえ今度は30名のギルドだ。少しばかり勝手が違う。油断をすれば足がかりを失うことになりかねないと咳払いをし冷静さを取り戻した。

ドアが開くと、血濡れた鎧を身に纏った2人の男が現れた。片方はランスと盾を持った〈守護騎士〉であり、もう片方は巨大な槍を手にした武士であった。ランスを持った男が部屋の中にホロウがいる事を確認すると相好を崩し両手を広げ、大げさな仕種で話しかけてきた。

「おう、待たせてすまねえな。ちいと、カチコミがあつたもんでよ……その対処に追われていたんだわ。俺はケイ、こいつはハゲネだ。で、今日は一体何のようだ？ 銀牢寿のホロウさんよ。」

ランスを持った男……否、ザ・ナインの頭目であるケイは自分と右腕であるハゲネを紹介する。血で汚れたヒヒロイカネ製のフルプレートを手ぬぐいで軽くふきながらホロウに探るような視線を向ける。一方、ハゲネと呼ばれた男は直立不動の姿勢でじっとホロウの様子を伺っていた。

ホロウはケイが行った自分に対する振る舞いが気に入らなかった。大人物である筈のホロウがいるのにも拘らず手拭で鎧の血を拭うとは言語道断である。ギルドを掌握した暁にはたっぷりと後悔させてやろうと誓う。だが、ホロウは謀略家である。自分の内心などおくびにも出さず、親しげな態度でケイに接した。

「私は少し前に銀牢寿を辞めました。彼らのやり方についていけなかったものでしてね。」

「ほう、で……?」

銀牢寿は外道なシノギで稼ぐことで有名である。ついていけなくなったと言う話をして何ら疑われることは無い。ただの大地族を奴隸として売買するのならまだしも貴族の娘をさらって奴隸にしたり、特にジーンなどは壊した大地族の娘を晒し者にしその反応で楽しんでる節があった。常識的な人間であればついていけなくなっても無理はないギルドである。もっとも、そうなるように誘導したのはホロウであるが……

ケイの先を促す言葉に対し少しだけ勿体付けるような感じで言葉を区切り、自分の持ってきた手土産を晒す。

「私はシノギの全てを担当していたのですよ。それが原因で追いかけてしましてね。――特にアヘンの利権が外部に漏れては一大事ですから。」

ホロウの切り出したアヘンと言う単語にケイは興味を引かれたような表情を浮かべた。アヘンの利権が手に入るのであれば資金面で苦慮しているザ・ナインの台所事情も明るくなりススキノ統一への更に一步を踏みこむ事ができるのだ。ハゲネも表情を変えていないが内心興味がひかれているのは間違いないだろう。面白そうにケイはホロウの言葉に応答する。

「ふうん、で、てめえは銀牢寿のシノギを手土産にオレんところで雇われたいと言うことか。」

「話が早くて助かります。こういってはなんですが、私を手に入れば銀牢寿のアヘンのルートを全て手に入れる事が出来ますよ。」

「ほう、そいつは良いなあ。よっしゃ、てめえをギルドに入れてやる。かまわねえな……ハゲネ。」

「好きにすればいいさ。お前が頭だ。」

「んじゃ、申請つと……ほらよ、許可を出したぜ。」

ホロウは内心ほくそ笑んだ。エアロと違い、ケイは察しの良い人物らしい。全てを語らずとも自分の言いたいことを理解してくれる。手下として使うには十分に有能だ。ケイが許可をしたギルド入会の案内に対し『YES』を選択する。これで今からホロウはザ・ナインのメンバーになった。銀牢寿とは違い、本気でススキノ支配を指せる組織を手に入れる第一歩を歩んだことに興奮を覚えた。粘つくような笑みを浮かべながら握手をしようと右手を差し出す。ケイもそれに応じるように右手を差し出し握手をした。

そして、握手を終えるとホロウが思いもしなかったことを切りだした。

「入会料として手土産は受け取っとくぜ。てめえは金庫番の下っ端として働いて貰うぜ。上に上がりたけりゃ、そこで手柄を立てるんだな。」

「金庫番には俺から伝えておこう。精々励むが良い。」

ケイとハゲネが告げる言葉にホロウは絶句した。自分の考えと違うではないかと叫びだしたくなる。何故貴様らホロウが考えたことに従わないのかと怒鳴りつけかけたが、ホロウの臆病さがそれを押しとどめた。ススキノで一番取扱量の多いアヘンとその販売ルートである。これを手土産にすればどんなギルドでも幹部待遇で扱われる筈なのだ。それをこの2人は入会料として奪い取り、下っ端として働かせるなどと抜かしたのだ。謀略家としてのホロウのプライドはその言葉でズタズタになってしまった。

このような結末は納得がいかないとホロウは2人に対して噛みつく。

「なっ!?! ススキノで一番大きなアヘンの取引を持ってきたのです

よ!?!?なんでこんな……」

「そいつぁ、入会のための手土産なんだろ?」

「ふっ、ふざけないでください。余所に持っていったっていいんですよ!?!?」

「ああ、そいつは無理だわ。」

ケイの言葉に対してヒートアップし、ホロウはついに怒鳴りつけてしまった。だが、別にケイは気にした様子も無い。ホロウの態度を鼻で笑い手にしていたランスを振り上げ、強くホロウを撃ちつける。鋼が肉を打ち据える鈍い音が応接室に響き渡り、ホロウは床へと這い蹲された。ギルドメンバー内であれば殴りつける事もできるそんな基本的なことをホロウはすっかり忘れていた。

ケイの行動を見た後のハゲネの行動は機敏であった。すぐさまホロウの上に片足を乗せ、動きを封じると力一杯やりを振り下ろしホロウの目の前の床につきたてる。それを見て情けない悲鳴を上げるホロウに対し、ケイは鮫のように笑うと言い聞かせるように言う。

「エルダー・テイルでも拷問は可能なんだぜ。てめえを拷問部屋に連れて行ってアヘンもその販売ルートも全て吐かせて手に入れてもこっち袴わねえんだぜ?」

「なっ!?!?」

ケイのあんまりとも言える暴論にホロウは絶句してしまう。逃げようにも逃げる事が出来ず、そして相手はやると言えば必ずやるだろう。あまりの理不尽にホロウは屈辱すら覚えた。販促ではないかと怒鳴りつけてやりたかったが、もしそれをすれば彼らは一切の情け容赦を捨て拷問を行うだろう。

そして、その拷問にホロウは絶対に耐えきることができないであろうと言う事が理解出来た。臆病なホロウはその理不尽に従うしか道を残されていなかったのだ。甘い準備で虎穴に入った愚か者の末

路である。命があるだけマシだろう。

「……分りました。」

「良い返事だ。手抜いたり隠し事したりした日にゃあ分っているよな？」

「は……い。」

ハゲネは一切の隙を見せずホロウににらみを利かせていた。そして、その様からホロウは逃げることにすらできないことを悟らざるを得なかったのだ。絶頂から絶望へと叩き落とされることは屈辱であり何よりも怒りを覚えることだ。目が眩まんばかりの憎悪を堪えつつ、反逆できる機会まで耐えなければならぬ我が身を呪った。そんな立場にしたケイとハゲネ、銀牢寿、カラカンチを呪う。逆恨みですらない理不尽な奴当たりである。それなのにもかかわらずそれが正統であるとホロウは考えていた。

そんな憤然とした様子のホロウを他のギルドメンバーが引き摺ってゆく。あらざらいアヘンのルートについて喋らされた後こき使われることになるであろうホロウをケイとハゲネは嘲笑しつつ見送った。ホロウが部屋を出て行った後、ハゲネは真面目な表情になりケイに忠告する。

「ケイ、奴は銀牢寿を裏切った。しかも重大な情報を持ち出してだ……いつ俺達を裏切るか分らんぞ。」

「ああ、心得てるよ。だから、アイツにゃあ重要な情報は扱わせねエ。キリキリとアヘンの販売ルートを作り上げて貰うつもりだ。完成したらそこからホン出してオプタテシケ当たりの採取のメンバーに加わって貰えばいいさ。」

「ならば問題はないか。ただし、アヘンの販売ルートが確立するまでは見張りは付けておけ。」

「当然だな。」

ハゲネの問いに答えてしまうと難しい話は終わりだとばかりに手提げ袋の中からチーズを取り出し、ナイフで一口分削いで食べる。このチーズは味も匂いもキツイ部類のモノなのだが、慣れると癖になる味でありケイは非常に気に入っている。ただし、ハゲネはその匂いがどうしても駄目らしく顔をしかめながらケイをみる。そんなハゲネの様子を知ってか知らずかパクパクと食べていく様に痺れを切らし、無理矢理他の話題をひねり出した。

「そういえば、その劇物もコタンの村産だったな。」

「ああ、そーだぜえ。コタンの村と取引のある大地族の商人どもとの交渉が上手く行きゃあアリアブランドの服とセリア製の剣が手に入る。貴族連中の贈りモノにゃあ服が一番だからな。剣はウチの連中に使わせりゃあいい。」

「前の交渉で手応えを感じたらしいからな。上手くいくだろうよ……ある程度ススキノが落ち着けば直接の取引にも応じてくれるかもしれない。」

「連中は中々骨があったな。あの小僧は元気しているかねえ。」

ケイはどこか懐かしそうに大地族の娘を庇いながら振るえる両手で剣を敵に向けていた少年のことを思い出した。ススキノでは見目の美しい女性、特に大地族は冒険者から奴隷の標的にされていた。連れ去られて奴隷にされればそれこそ地獄である。NPCであると言う事を免罪符にした冒険者は悪魔ですら鼻白むおぞましい行為を大地族の女性に対し行うのだ。ケイも何度か見たことがあるが狂っているとしか言いようのない行為だった。そんな中、冒険者であるとはいえ低レベルのモノが立ち向かう姿はケイ達にとっても新鮮であり驚くべきことでもあった。

もっとも、ケイ達が手助けをする前にナガトが現れて愚か者を叩き伏せてしまった。ケイもハゲネもその時のことを懐かしく思い出

していた。現実にはifは存在しないがそれがあれば、自分達が少年達を助けギルドのメンバーとして受け入れていたであろう。気骨のある者は上手く育てれば良い悪党になる。ケイ達にとって質の高い悪党はこれから先の商売の拡大に向けてどうしても得る必要がある人材であった。

まあ、ifは無いので地道に部下達を教育していくしかないわけだが、ケイとハゲネはその時のことを懐かしそうに思い出していた。

「ライだったな。大地族の為にLv差50ある冒険者に挑む気骨のある少年だった。」

「おう、ナガトの奴さえ現れなけりゃ、うちに入ってもらえていたのによ。全く、ああいう質の良い奴はレアなんだぜ。育て方ではない悪党になったろうにたく……あー、そろそろ時間かよ。」

調度品の時計を見てげっそりとした表情を浮かべるケイに対し、ハゲネは巖のような表情のままケイの言葉に頷いた。30名程度の小さな組織ではギルドマスターとは言え、現場の仕事をこなさなければならぬ。もっとも、これから行うのはエッゾ帝国の貴族との会合なのであるのだが。

冒険者だけでは生活することは出来ない。それは誰もが知っている筈なのに気付いている者は少ない。特にススキノの人間でその事に気がついているのはごくわずかだろう。故にそれに気がつかない馬鹿共の尻拭いを気がついた人間が行わなければならないのだ。今回の会合で物流の量が決まるため、ケイとて気合を入れなければならぬ。ケイの言葉にハゲネは頷いて応える。

「会合の時間だな。……最近は時間に正確になってきたな。」

「やかましいやい。ブリガンティの馬鹿どもや他の連中がもうちつと大人しくしてりゃあ俺だってこーならなかったんだぜえ。」

「奴らが駄目な分しわ寄せがくるな。大地族が絶滅すれば冒険者だって滅ぶのは分りきっているだろうに何でそれが理解できないのか……」

「ヒッキーだからだろ」

「だろうな。行くぞ」

馬鹿にしたように言うケイの言葉に言い当て妙だとばかりにハゲネは頷いた。槍を手にとるとドアを開き、ケイに対してさっさと行くぞと促す。そんなハゲネに対して、ケイはげっそりとした表情でついていった。融通や冗談が効かないハゲネにどうにかならないものかと考えながらハゲネと共に会合の場所へと急ぐ。

この時、彼らはまだコタン村が銀牢寿の手によって滅んだと言う事を知らなかった。もし、知っていたのならホロウと交渉しようとすら思わなかっただろう。拷問をして情報を引き出すという形で終わらせていた筈だ。そういう意味ではホロウがああの程度で済んだのは幸運とすら言える。ケイ達はコタン村の壊滅の報告を受ける。そして、それにより貴族達との交渉が激化することとなる。何故ならばススキノをホームタウンにするギルドの銀牢寿が大地族の村の井戸に毒を流し村人を全滅させてしまったのだから……

エッゾ帝国の大地族達は冒険者に対する恐怖を一層強いものにした。そして、それはザ・ナインのススキノ統一の妨げになるという彼らにとって最悪の事態を招くことになる。



コタン村の空は青く澄んでいた。廃墟と化した村が、折り重なる大地族の亡骸が、白日の元に照らし出されていた。雲一つない空はススキノの冒険者が行った悪行を隠すことを許さぬと言う天の意思

の表れか。もしくは、それを防ぐ事の出来なかった愚か者たちへの罰なのだろうか。

村に残された冒険者達は無言で埋葬の準備を進めていた。村の外れにセリアとカレンが大型の召喚獣を呼びだし重機代わりにして大きな墓穴を掘り進める。残りの者達は一軒一軒、家を回り「狼殺しーWolfbane」によって、いや銀牢寿に命じられたグレゴールが殺した村人達を一人一人運び出し、墓穴が完成次第埋葬できるように死体を集めてゆく。この場合、グレゴールが殺したと言う事を知らないことは幸いだろう。知っていれば、ススキノで過酷なエルダー・テイルの現実を見たカラカンチのメンバー達ですら心を壊していたかもしれない。

現在、コタン村にはカラカンチの関係者以外の人影が存在しなかった。なぜなら、「狼殺しーWolfbane」の毒によって一人残らず死したからだ。「狼殺しーWolfbane」とはトリカブトのこと、植物が持つ毒の中でも最強と謳われるモノの一つである。そして、その毒は即効性だ。

ただし、ここはエルダー・テイル毒での死亡に数十分掛かるようでは意味が無い。故に「調剤師」のスキルによってトリカブトの効果はより苛烈に進化を遂げる。

それでも冒険者であればその体力、解毒呪文、毒消しのポーションで無効化する事も出来る。しかし、大地族にはそのような真似は出来ない。故に飲んだら最後、死ぬしかないのだ。

また、毒が投げ込まれた時間帯が深夜であったことも最悪であった。日の出とともに起きて仕事をする田舎の大地族は毎朝、同じ時間に水を井戸に汲みにくる。そして、その汲んだ水を使って朝食を作るのだ。故に実際に誰かが朝食を食べるまで気がつく事が無い。田舎の食事は家族でいっせいに取るものである。故に気がついたときは手遅れでその家族は全滅しているのだ。たまたま、毒入りの朝食に手を付けなかった者達も家族の死を見て気が狂い後を追うように自殺をした。カラカンチが全滅しなかったのは単にアリアと言う

レベル90の〈施療神官〉がいたからである。それが無ければカラカンチも全滅しススキノへ送られていたかもしれない。

ススキノでも滅多に見る事の無い大地族の虐殺。しかし、コレは規模が大きいと言うだけであって残虐さという点ではマシな部類に入る。ズタズタに犯された上で晒し者になって死んだ大地族の娘や冒険者達の退屈凌ぎで武器を持たされ親子で殺し合いをさせられる家族、拷問にかけられ生まれてきたことを後悔しながら死んでいく者達……エッゾ帝国ではこれが日常茶飯事である。大地族の間では悪徳の都とススキノは呼ばれるようになっていた。

やがて、十分な広さの墓穴が掘られるとセリアとカレン以外の者達でコタン村の村人の死体を運び一人一人丁寧に埋葬してゆく。その際に銀牢寿から救出した貴族の娘やチェルシーに埋葬の仕方などを聞き、レクチャーして貰いながらなるべくしつかりとした形になるよう心掛けていた。とは言え、村人たちの分の棺桶は手配できないのだが……

みな、無駄口をたたかず一心不乱に作業に没頭していた。もしかすると、作業に没頭することで辛い記憶を追いやろうとしているのかもしれない。特にライ、カレン、チェルシーの3名はその傾向が顕著に表れていた。

やがて、日が暮れる頃に埋葬もすべて終了した。明日、カラカンチのギルドハウスに集まるようにセリアが言うとその場で解散となった。皆、心身ともに疲れ切っておりこれから先の話をするにしても時間をおいた方が良くセリアは考えたからだ。……もともと本人も疲れ切っていたのだが。



村人を埋葬した次の日、セリアの呼びかけに従いコタン村にいる

冒険者達はカラカンチのギルドハウスに呼び集められていた。あまり眠れていない者も多いようで憔悴し切った表情をした者が多かった。セリア自身化粧で誤魔化しているがかなり憔悴していた。だが、ギルドマスターであるという責任感が彼女に全てを投げだして逃げることを許さなかった。セリア自信そんな自分の性分を疎ましく思っているのだが……

セリアは皆が集まっていることを確認すると口を開いた。

「今日、みんなに集まって貰ったのは今後のことについて話し合うためです。大地……コタン村の村人達が死んでしまった以上、私達がここに留まり続ける事は出来ないわ。だから、何処かに移住しなければいけないわ。私はアキバが良いと思うのだけど……どうかしら？」

「アキバって……反対だよ！！ボクは逃げるような真似なんてしたくない！！」

「セリア様、私も反対です。」

「まあ、2人とも落ち着け。」

セリアの言葉に集まっていた全員が反感を覚えた。セリアはギルドマスターとしてギルドのメンバーの安全を守るためにアキバと言う場所を提案したのであろう。確かにアキバであればススキノのような悲惨な事件に合わなくても済む。だが、その心遣いは理解は出来ても納得は出来ないのだろう。すぐさまカレンが噛みつき、チェルシーがそれに同意する。出遅れたライが躊躇いがちに頷き、ナガトが2人を宥めるように割って入り話し合いの場が荒れることを防いだ。

エルダー・テイルの現状を最近ようやく理解できてきたばかりのソルシエールは傍観し、一人蚊帳の外にいる貴族の女性は困ったようにその様子を見ていた。

普段はおとなしい筈のアリアが意を決したような表情でセリアを

みる。そんなアリアの気迫にライ達3人組だけではなく、ナガトとセリアも気圧されたかのように見つめ返した。

そして、アリアはカレンの意見に賛成し、更に補強材料を付けくわえた。

「一番安全なのはアキバに行くことだと思う。でも、それは許されないと思うの。だから、私はトサミナトの街を移住先に提案するわ。」

「トサミナトとは？」

ススキノ、アキバ、ミナミといった日本サーバーの情報をようやく吸い上げたばかりのソルシエルがアリアの提案に対し質問をぶつける。まだ、地方都市の状況に関する情報は持ち合わせていないのだ。そして、トサミナトの事を知らないのはソルシエルだけではないようだ。ライ達年少組も聞いたことが無いと首を傾げる。

そんなソルシエルの疑問に対してアリアから話を聞いたことがあるナガトが回答した。

「トサミナト街って言うのはタムパ岬にある海底ダンジョンから来るススキノの連中への防波堤として作り上げた街のことだ。冒険者が100人ほどの開拓村のようなもんだ。ススキノの連中とやりあうならこれ以上の街はねえな。」

「――：タムパ岬。あの辺りは難易度の高いダンジョンや戦場がひしめいておったの。力を付けるには良い場所じゃ。」

「そこが良い。このまま何もせずにアキバに逃げたら、ボクは自分を一生許せないよ。」

「セリア様、私も仇を討たず逃げるような真似はしたくありません。」

「セリアさんそこにしよう。オレ、尻尾を巻いて逃げるなんて芋引くような真似したくない。」

ナガトの言葉にソルシエールが納得したように頷き、続いてタムパ岬の周囲の情報を話す。それを聞いたカレンが内に溜まっていた後悔と嘆きを絞り出すかのようにトサミナトへの移住に賛成の言葉を述べた。チエルシーもライもその言葉に同意する。

セリアは困った表情を浮かべた。みなを決意は固い、セリアとしては安全な場所にいて欲しかった。アキバならばセリアの知り合いがいるし少しぐらい無茶を言っても応えてくれる友人もいる。セリアは何処か安全なギルドにライ達を預けた後、単身でエッゾ帝国に戻りススキノと戦うつもりでいた。ライ達の言葉は痛いほどに理解出来る。故に無理強いは出来なかった。

「――仕方ないわね。トサミナトへ行きましょう。」

そのセリアの言葉にライ達3人組が歓喜の声を上げる。セリアの内心を理解出来るのか高レベル組は少し申し訳なさ気にセリアを見た。なら、そういう提案をしてくれるなどセリアは思うのだが、それとこれとは話が別なのだろう。

歓喜する3人をよそにセリアは貴族の女性へと視線を向ける。彼女の名前はアギフ・カリム・アル・ワージド、エッゾ帝国の地方領主の娘らしい。故に彼女の処遇をどうするかが悩みの種ではあるのだが……その視線に気がついたのか貴族の女性、アギフはセリアから声をかけられる前に気にしないでほしいと言いたげに首を横に振った。アギフは冒険者から受けた暴行により、心に深い傷を負っていた。それが原因で口がきけなくなってしまっているのだ。

セリアは彼女から一緒に行動をしたいとお願いされていた。できる限りであればそれを聞き届けてやるつもりだったが、ここから先は連れて行けば大変な目に合わせることになる。故にセリアは彼女の親元へ送ろうと考えていた。

「アギフさんはお父様の元に届けようと思うのだけど……」

そのセリアの言葉にアギフは首を激しく横に振る。……会いたくなくても会えない。汚された自分がおめおめと家族の元へ戻る事など出来はしない。そのことは事前にセリアは筆談で聞いていた。アギフの思いつめた表情にセリアは不可能かと内心白旗を上げた。この件もあるから本当はアキバへ行きたかったのだ。今更行き先を変えるわけにもいかない。

「分ったわ。それなら、トサミナトに着いたら何らかのサブクラスを習得して貰います。いつまでも私達が保護できるとは限らないから。」

アギフは頑張りますとでも言いたげに必死に首を縦に振る。それを見たアリアは優しく微笑みかけながら言葉をかける。

「それなら、裁縫師をお勧めします。私が教える事が出来ますし……鍛冶に比べればまだ素材が集めやすいですの。」

「うむ、生産系がお勧めじゃな。いざとなればそれだけで喰っているからの。」

ソルシエールはアリアの言葉に続けるように言った。アギフはコクコクと頷き嬉しそうに微笑む。その微笑みはとても愛らしく、先程までの話し合いで硬くなっていた空気を和らげた。その笑顔にライが見惚れたように呆けた表情を浮かべるとチェルシーに摘まれ、カレンに足を踏まれる。

「っう……なんで!?!」

「ライ、アギフ様をそんな目で見てはいけません。」

「そうそう、あの子だけはボクも許さないよ。」

チエルシーもカレンも、アギフが男の冒険者によってどんな目にあわされてきたのかを聞いているため制裁に及んだのだ。ライの視線に怯えたような表情をアギフが浮かべている事に気がつき、ライは米搗きバツタのようにペコペコと頭を下げる。そんな、おかしい行動をするライに困った表情をアギフは浮かべる。ソルシエールとアリアは苦笑し、セリアは無情な一言を投げつける。

「罰としてライには鍛冶場の荷物を運んで貰うわ。」

「うううう……はい、この愚かな犬めに何でもお申しつけてください。」

ナガトは憐れむような視線でライをみる。アレを無視するのは相当慣れていないと無理だろう。それこそ港ごとに恋人を作るナガトぐらいに……だからと言って助けるような真似はしない。そんなことすれば間違いなくナガトが生贄にされるから

そんなライの様子にアタフタとアギフが慌ててとりなすようにセリアをみるがアリアに止められる。ソルシエールなどはライを生贄にしてアギフの男性恐怖症は治らないかなと外道なことを考えていたりする。

それはさておき、アリアが真面目な表情を浮かべてセリアをみる。セリアは何事かと思い、アリアに視線を向ける。

「セリア、トサミナトに着いたら武器を作って貰えないかしら……私も戦おうと思うの。」

「アリア……貴方は裁縫師として活動するだけでも十分過ぎる程……」

「駄目なの。私もグレゴール達がしでかした事は許せないの。グレゴールのしでかしたことは責任は取りようが無いけれど……だからこそ、戦わないと言う選択肢を選ぶことは許されないと思うの。」

アリアの強い意志にセリアは説得は難しいと考えた。そもそもアリアは〈大災厄〉後モンスターと戦う事ができなかった冒険者だ。しかし、生産職としての技能と本人のセンスがあった為、そちらの方面でカラカンチを支え、既に無くてはならない存在になっていた。故に戦う必要は無いのだが……今回の一件が余程堪えたのだろう。翻意を促すのは難しそうであつた。ナガトも困つたような表情を浮かべるが仕方が無いと考えていた。アリアの考え方は彼らにとっても納得のいくものだからだ。ため息交じりにナガトが答える。

「…分つた。だが、最初はライ達と一緒に訓練だな。ブランクは結構きついぞ。」

「ありがとうございます。ナガトさん」

「無理はしないでね。……貴方が居ないと色んな意味でギルドが成り立たなくなるわ」

「ええ、気を付けるわ。」

実のところ、カラカンチの収益の9割はアリアの手によるものだったりする。故に戦わないでサポートに回ってくれていたほうがありがたいのだが、そういうことを言う訳にもいかないだろう。

カラカンチの台所事情を知っているナガトは苦笑し、知らない他のメンバーは首を傾げていた。

2人の話がまとまったとみたソルシエールは次の話題を切りだす。

「ジライヤ達が帰ってきたら移動じゃな。先に荷物を纏めて準備せねばならぬ。ここに長居をするわけにもいかぬしな。」

「いえ、ジライヤさんが来る前に発つわ。グズグズしていたらスキノの連中が押し寄せてくるわ。荷物に関しては申し訳ないけれど、村で野菜や薬を売りに行くときに使っていた馬車を使わせて貰いましょう。」

「ここを戦場にするよりは万倍マシだな。」

これ以上、コタン村を戦場にしたくないセリアは安全重視のソルシエールの発言に対し異を唱える。それに対して他のメンバーも異議は無いようだ。ソルシエールはそもそも次の議題への呼び水程度にしか考えていなかった為、特に反論することなく頷く。

ここを戦場にしたくないと言うのはこのメンバーにとって共通の思いのようだ。

そんなことよりも、ソルシエールはさらに重要な課題があると口を開く。

「――：芥子畑はどうするのじゃ？」

その内容にカラカンチのメンバーは黙り込む。そもそも、日本人である彼らは芥子畑自体に良いイメージを持っていなかった。

そして、この芥子畑を狙ってススキノの連中は要らぬちよっかいを出してきた。挙句の果てにコタン村に毒を流し滅亡させた。もし、芥子畑が残っていればそれを狙ってススキノの連中が現れるだろう。最悪の場合、村が無くなる事態にまで発展するかもしれない。

そう考えたセリアは、迷うこと無く言い切る。

「燃やすわ。このまま残していても薬には使われないでしょう。アヘンにされるぐらいならば無い方が良いわ。」

その一言に冒険者達が全員頷く。皆良いイメージを持っていなかったのだろう。迷い無く焼き尽くすことを選んだ。ただ一人、アギフが困った表情を浮かべたが、それでもススキノの人間に渡すよりは良いと思ったのだろう。少し迷ってから頷いた。

コレで全員の意見が統一されたとセリアは考えた。故に次は行動である。出来れば明日までに準備を済ませ、トサミナトの街へ向か

いたいとセリアは考えていた。故にセリアは手を2、3回叩くと発破をかけるように言う。

「さあ、今からは時間との勝負よ。アリアの工房はカレンとチェルシーが手伝ってあげて、私の工房はライに手伝って貰うわ。ナガトさんは自分の分とジライヤさんの分、ソルシエールさんはアギフさんに付き添って貰えるかしら？ 質問が無ければ始めるわよ」

全員が質問は無いと返事を返すとそれぞれが自分の持ち場へと歩いて行った。ここから先は時間との勝負である銀牢寿が帰って来ないうちに全てを終了させておかねばならない。出来る事ならば明日の朝コタン村を発ちたいと考えていた。



セリアの工房は実のところアリアの工房よりも荷物が多い。

何故ならば、鍛冶の原料は重く大きい物が多い。また、セリアは廃棄処分された剣を引き取ってそれを打ち直しているため、そういった鉄屑が多く散らかっていた。ライはセリアの指示のもとそれらを箱の中に纏めて入れていた。

荷作りをしているライを尻目にセリアは幾つか持っていくほどの価値の無い剣を炉の中に放り込み溶かしていた。ライが文句を言わずに仕事をしているのはその目的を知っているからだろう。

溶けていく鉄を横目にライはセリアに質問する。

「それに字とか彫れるんですか？」

「大丈夫よ。鍛冶スキルを使えば問題なく彫れるわ。コタン村の全員分の名前を掘るつもりよ。」

スキルを上手く使えばあっという間だからとセリアは何でもなさ気に告げた。

金属製の慰霊碑だ。無論何も加工をしなければ錆びてしまうため、幾つかの金属を混ぜて錆び難い合金にしてから墓にするのだ。

セリアは完全に溶けた金属を取り出し型に流し込み成型をする。作業に集中し始めたらしく一心不乱に形の変化してゆく金属を見つめながら道具を手に取り、じっと待ちかまえていた。ライはその様子を横目に見ながら作業を進めてゆく。当たり前のことであるが金属製の刀剣や鎧は重い、その重さで箱を壊さないようにする為に適当に分けながら一つ一つ梱包を進めていった。

流石に一人では思うように作業が進まない。金属の様子を見ているセリアにはライを手伝う余裕が無い……色々と言いたいことはあるが黙って仕事を進めていった。

数時間が経過した頃だろうか、ドアがノック音が響いた。セリアはリューターを使い、冷えた金属塊に名前を彫り込んでいる最中だ。なので、必然的にライが対応することになる。

だが、ノックをした人間は返事を待つつもりはなかったらしい。カレンがドアを開けて入り込んできた。

「こっちは終わったよ。そっちは……まだまだ見たいだね。」

「セリア様は……作業中みたいですね。」

「この量は一人じゃ無理だから手伝ってくれ……と、アリアさんは？」

「ん、良いよ。……アリアさんは食事の準備をしに行ったよ。料理スキルは無いけど一応素材のままでも美味しい物はあるし。」

「手伝いますね。最初に梱包の終わった箱を外に運び出した方が良いでしょうね。」

「ん、頼む。オレ一人じゃ二つのことは出来ないし」

そう言うと、チェルシーとカレンは手分けをしてライの仕事を手伝い始めた。主にカレンが召喚獣を使って梱包した箱の運搬をし、チェルシーとライが荷物を片っ端から梱包して行く。流石に3人（召喚獣も合わせれば4人）の手でやれば荷作りも段違いの速度で終了するらしい。一人の時では考えられない速度で荷作りが終了した。荷作りが終了することにセリアは彫り込みが終わったらしい。深く深呼吸すると慰霊碑をテーブルの上に置いて使っていた道具を片付け始めた。

3人は慰霊碑が完成したことに気がつくがそれに対しては何も言わない。罪悪感のせいだろうか……それを話題にするのは酷く罪悪感を覚えるようだ。ギルドメンバーが裏切りコタン村を全滅させたことはススキノで人の生み出した地獄を見てきたライ達にとっても堪えることだったのだろう。それに気がつきながらもセリアは指摘しない。したところでどうにもならないからだ。

故にセリアは荷作りが終わった様子を見て多少演技も込めて罪悪感の籠った眼差しで3人を見てねぎらう。

「お疲れ様。思ったより早く終わったわね。」

「ん、先月、商人が廃棄された武器をあまり持って来れなかったから……少し楽だったよ。」

「そーだね。アリアさんの服の材料ばかりだったねえ。」

「セリア様もお疲れ様です。そろそろアリア様も食事の準備を終えられている頃ですね。」

「そうなら急いでリビングに向かわないといけないわね。みな待っているでしょうから」

そう言うとセリアは慰霊碑に布を被せてリビングへと向かうように言う。そんなセリアに押されくたくたになったライ達が追いやられるようにリビングへと押し出された。まだ、慰霊碑と向き合う強さは自分達には無い。これが思い出となり、コタン村での楽しかつ

た日々の方を語れるようになる時が来ることをセリアは祈った。



コタン村の芥子畑が燃える。冒険者の欲望を刺激しコタン村を滅ぼした遠因の一つが一つ残らず焼かれてゆく。遠く煙をあげながら炎は勢いよく燃え上がっていた。

その様子を馬車に乗っているライはじっと見つめていた。その表情はどこか虚ろで覇気というものが感じられない。怒りも悲しみも通り越して定款すら感じさせる表情だ。

〈大災厄〉後、ススキノでは大地族やレベルの低い冒険者を高レベルの冒険者が虐げる様子をライ達は散々見てきた。これほど多くの大地族が殺されたケースは初めてであるが、これよりも惨い殺され方をした者を多数知っている。故にアキバへ逃げるような真似は出来なかった。これは他の者も同じだろう。例外はソルシエルだろうが、彼女も因縁ができた以上逃げ出すような真似はしないだろう。

「……嫌になるほど良い天気だ。雨でも降れば良いのに」

ライは空を見て忌々しそうに言葉を吐く。自分の心とは正反対の青く澄み切った空が憎らしかった。雨でも降れば多少なりとも気は紛れるだろうに……。そんなライの言葉を聞き咎めたのか一緒に馬車に乗っている人間のうち一人、カレンがライの傍にやってきて軽く頭を小突く。

何をするんだと言う視線を向けるライに対し挑むように睨みつける。そのカレンの迫力にライはたじろいでしまう。

「晴れてて良かったんだよ。」

「どうしてだよ。」

「雨の日よりも晴れの日の方が好きだからだよ。」

「おいおい……」

どうだ参ったかとも言わんばかりの表情でカレンは言い切る。

あまりに理不尽な言葉にライは毒気を抜かれてしまう。言い掛かりで睨まれた方はたまったものではない。だが、幼馴染であるライにはカレンの理不尽な言葉がどん底に落ち込んでいるライの心をそれ以上おちこませまいと気遣っていると言う事を理解していた。

とは言え、素直に感謝出来る程ライは人ができているわけではない。内心は感謝しつつも呆れたような表情を作り、カレンに対してまぜっかえすような言葉を言う。

「中間テストの前は台風でも来ないかって言っていた癖に」

「うう、五月蠅い。今は雨が嫌いなもの！！変な屁理屈言わないの馬鹿ライ！！」

自分でも理論が強引だと理解しているカレンはライのまぜっかえすような言葉に上手く反論できず、顔を真っ赤にして言い返す。カレンが元気づけようとしたのが理解できるチェルシーやアギフも非難めいた視線をライに向ける。馬車の傍を空飛ぶ箒で飛んでいるソルシエールは楽しい表情を浮かべる。ナガトとセリア、アリアは苦笑を浮かべている。ライは周囲の視線に気がついて決まり悪そうに頭をかく。

そんなライに対し、ソルシエールが意地悪げな表情を浮かべながら告げる。

「素直に謝った方が良いぞ。機会を伺ったり、言葉を選べばナガトのような大人になるからの。」

「そりゃどう言う意味だ、ロリ吸血鬼。」

「ふん、そのままの意味じゃ、ケダモノ。」

ソルシエールがナガトの女癖の悪さを上げてライをからかうと、やり玉に挙げられたナガトが問いただす。気にした様子も無いソルシエールの反論にナガトはぐうの音も出ない。とある事情からナガトの女の遍歴を知っているソルシエール相手では相手が悪いのだろう。ナガトは藪蛇にならないうちに黙り込んだ。アリアは苦笑し、セリアは呆れているようだ。どう言う意味なのか大体推測のつくライは、どうするかしばらくの間悩み素直に謝ることにしたようだ。

滅んだ村の埋葬をした直後にこのような明るい会話をするのは不謹慎かもしれない。カレンの言葉が無ければセリア達もしくは暗いままだったろう。このような暗い時代に生きるからこそ、明るさは必要になるのだ。

この方がコタン村の人々も喜んでくれるだろう。自分勝手な意見であるがトサミナトへ向かう一行はそう考えることにした。

T o B e C o n t i n u e d . . .

トサミナト編へ

予告編

トサミナト……それはアキバへと逃げることを良しとしない。命知

らず達が集う街。

荒くれ者が集っているわけではないが一筋縄ではいかない傾奇者達がばかりがそこにはいた。

皆がススキノへの敵愾心を持っており、日々優れた冒険者へと成長していく武闘派ぞろいの街だ。

ソルシエール達が移住してトサミナトに慣れてきた頃に近場の領主から緊急の依頼が舞い込んでくる。

見回りに出た領主たちの軍勢が何者かの手によって殲滅したらしい。兵達は全て幹竹割で殺されており、高レベルの武士による犯行ではないかと言う話であった。

ススキノからの侵入者かと冒険者はいきり立ち犯人を追いまわし始めた。

死者こそ出ていないが犯人の特殊な戦法に二の足を踏む冒険者達。

そのときおぞましい輩が闇の中よりあらわれる。

「いよいよ、我らの出番か……」

赤いサーリットのみを被ったレスラーと見紛う肉体を持つ男が禪一枚で雄叫びをあげた。

非情の決断が下されようとする中で少年はそれを止めようと駆けだした。

次章 妖刀事件

2011年公開予定。

06 (後書き)

トサミナト街の設定やプロットの関係でしばらく時間がかかりそうです (苦笑)

とりあえず1章は完結。

駆け足でしたがお付き合い頂きありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2420p/>

悪の華

2011年4月4日21時12分発行